

253号



今月の編集

あごら大阪
あごら京都

闇を照らす閃光

—長谷川テルと娘・暁子—

お望みならば、
私を売国奴と呼んで
くださってもけっこうです



私なりの平和への歩み

長谷川暁子

話す勇氣、行動する勇氣 栗原小巻

劉星氏の思い出 坂井尚美

緑の星・暁の星 服部 素

長谷川暁子さんとの出会いから 澤田和子



奈良女高師時代のテル(1931年)



重慶でのテル・劉仁夫婦(1941年)



左が長谷川暁子さん、右が栗原小巻さん
(1994年2月 栗原さんと語る夕べ)

話す勇氣、行動する勇氣

——テルさんと暁子さん——

栗原小巻

上海、重慶、東北へ。日中戦争直前から、戦争の時代に、長谷川テルさんの苦難の長い道のりは、ご主人と、子どもたちを思う、深い愛に、支えられていました。『望郷之星』テルを描いた自伝的ドラマ撮影の時、わたくしは、過去の不幸な時代を想像し、心は長谷川テルさんの気持ちで、演じました。平和への願いと、子どもたちの将来の幸福。——わたくしは、暁子さん（暁風さん）に、日本でお会いできるとお聞きしたときは、胸に、熱いものを感じました。

暁子さんのご講演の記録、読ませていただきました。二つの祖国を持つ、暁子さんの心の声を聞き、その人生に向き合う真摯なお考えに、尊敬の気持ち、より深く、強いものとなりました。

ご母堂である、長谷川テルさんから受けつがれた、その素質。もちろんテルさんは、テルさん。暁子さんは、暁子さんです。

しかし、お二人に通じる確かなことがあります。それは、中国人として、とか、日本人として、とかではなく、一女性として、信念と、誇りを持つて生きるという、生き方、心構えです。

逆らえない、大きな時代の嵐に、立ち向かう勇氣。長谷川テルさんには、それがありません。

暁子さんは、ご講演で、大きな体制についても、批判は批判として、語る勇氣について述べていらっしゃいます。

彼女は、強く意識していなかったと、おっしゃっていますが、より良い社会のために、平和な社会のために、人は、何ができるでしょうか。

それは、どんな状況でも、話す勇氣、行動する勇氣だと思えます。

お二人の人生に、出会えましたことは、わたくしの大いなる喜びです。

おぼろけの号 闇を照らす閃光——長谷川テルと娘・暁子—— 目次

話す勇氣、行動する勇氣——テルさんと暁子さん—— 栗原小卷 1

緑の星・暁の星 服部 素 4

長谷川暁子(劉曉嵐)さんとの出会いから 澤田和子 9

絶望を希望に変えたひと 斎藤千代 14

劉星氏の思い出 坂井尚美 18

テルさんに救われた「中国・東北の旅」 芦澤礼子 20

〔年表〕長谷川テル・暁子の足跡 24

「嬌声売国奴」の正体はこれ——都新聞の記事から(一九三八年十一月一日) 26

●長谷川テルさんの著作から

晩春の別れ／上海にて 28

中国の勝利は全アジアの明日へのカギである——日本のエスペランティストへの手紙 58

暴政の国——日本 62

代用人 66

全世界のエスペランティストへ 68

失くした二つのリング——病床にて 74

●長谷川暁子さんの講演

私なりの平和への歩み——二つの祖国を持つ苦悩と喜び 80

●長谷川暁子さんの文章から

知られざる「長谷川テル」 94

日本エスペランティストの皆様へ 99

長かった五十年——戦争の悲劇を乗り越えて、真の信頼関係を築くために 103

めじゃーなりすとのめ 歴史をつくる・未来をつくる 尾崎祈美子 106

グループ紹介 大阪市立婦人会館自主グループ協議会 108

TOPICS アジア太平洋NGO会議開催／インターネットで世界フォーラムに参加しようほか 110

集会から 女性学・ジェンダー研究フォーラム・大阪発のワークショップ／8・15女性のつどい 114

気になる英語 トランス・ベストایتIV 奥川 睦 118

沖縄から 沖縄戦の実相を薄める県の姿勢——新平和資料館問題ほか 120

語りかけたあなたへ24 四十数年前のこと 大里知子 122

あいら読書室 悪魔の遺産／幻の塔／われわれは戦前の翼賛弁護士の轍を踏まない！ 124

あいらのあいら 126

緑の星・暁の星

服部 素

手元の、高杉一郎著『中国の緑の星——長谷川テル 反戦の生涯』朝日選書。出版は八〇年となっているから、私が長谷川テルを知ったのはその後だと思ふ。感動は大きかったけれど、歴史上の人という認識だった。その後、栗原小巻がテルを演じて好評だったテレビドラマ『望郷之星』のことは知らずに過ぎた。九二年、大阪の友人、澤田さんから、このビデオを上映すること、遺児の暁嵐さんも出席されることを告げる熱っぽい電話をいただき、大阪へかけつけた。日本兵に向けて反戦放送をする栗原小巻は圧巻。テルが一挙に身近な人となり、謙虚な暁嵐さんに、そつと声援を送りたい気持ちになった。新生中国の暁がめぐりくる、まさに暁の嵐のような時代に、この世に生を受けられたのだ、と、歴史の渦を目のあたりにする思いだった。

敗戦の年、私は十五歳。十五年戦争と共に育った宿命のように、反戦平和から眼も手も離せず、私なりに戦後の歳月を重ねてきた。今は、〈あごら〉と〈YWCA〉の会員。そして立命館大学国際平和とミュージアムで、ボランティアガイドを主軸とする〈平和友の会〉でも活動をしている。なかでも戦争中の抵抗運動に関心を持ち、治安維持法で拘禁されたある女性からの聞き書きを、グループでまとめるところまでは、彼女が亡くなるまでに仕上げる事ができたが、その後、やっと所在がわかった方は数か月前

に亡くなって……などという状態で、焦りを感じている。

そういう中で、長谷川テルはまさに「中国の緑の星」（エスペラント名ヴェルダ・マーヨは「緑の五月」の意）。いつか機会を見つけて暁嵐さんをお招きしたい、とはずっと思っていたが、数人でビデオを見たことから弾みがついた。すでに日本国籍を取得、

長谷川暁子さんになられた彼女に、澤田さんの助言で依頼のお電話をした。はじめはためらっておられた彼女も、やっと「みなさんの質問に答える形でなら……」とひきうけてくださった。

「私なりに生きていきたい」というテーマでどうですか、テルの話ではなく……」

「もちろん結構です。暁子さんが日中ふたつの祖国を持つて生きてこられたご体験をぜひ」ということで、安堵してその日待った。

エスペラントイストの方たちも見えて、お話がはじまった。実に的確な日本語で事の核心をつきながら、彼女の経てこられた体験の深さが如実に伝わるお話しぶりに、吸いこまれるように時間が過ぎた。そう、考えてみれば彼女にお母さんの記憶はない。テルなる人への彼女の尊敬と、「テルの



1994年2月26日 栗原小巻さんと語る夕べ
左端 暁子さん、1人おいて栗原さん、右端 澤田さん

娘」という他人の眼を感じる意識のねじれ。あゝ、そこまで考えが及ばなかった。伊藤野枝の娘、伊藤ルイさんの心の葛藤にも通ずるかも知れない。

ことに文革の時の心の傷は察するに余りある。お話の前に澤田さんと三人でミュージアムを見た時、反戦運動のところで澤田さんが「テルさんのように臆することなく本音の反戦運動を日本で続けていたら、きっと小林多喜二のような目に遭っていたでしょうね」と言われたあとだったので、お話のあと、私はそのことを受けて「お母さんの遺伝子が暁子さんの中で活動しているのを見るような、共産党批判、をされたんですね。何という凄いい母娘だろうと思いました」と言った。後日、出席者の一人は「あなたは遺伝子といわれたけれど、私は胎教だと思う。暁さんはおなかにいる間中、ご両親が話し合われる思いを聞いておられたわけでしょう」と。

伊藤野枝さんとルイさんとの深いところでの志の受け継ぎにも似て、どこかで截然と切れ、一方で渾然と相通じつつ、見事な母娘。「いったい、人間なんて少しずつでも進歩しているのかしら？」と疑い、気弱になる日頃にあつて、雲間から太陽が射すように人間への信頼をとりもどさせてくれる人たち……それは、一代にして成るのではなくて、親から子へ、子から孫へ何代もかけて創り出されていくものではないかと、私は思う。

韓国で非転向を貫いて釈放をかちとつた徐俊植^{ソジュンシク}さんの、その後の彼の地での人権活動を伝える『ニム通信』によって、呉昌順^{ウサンジュン}オモニ、徐きょうだい、子どもポスルちゃんたち、三代にわたる魂の形成を見守る幸せを、私は与えられている。その九号の記事を読んで、私が送つた感想を引用させていただく。「とてもすばらしい内容で深く心をうたれました。冒頭陳述と、ポスルちゃんたちへのお手紙が、実に表裏・硬軟一体となつて、俊植（ジュンシク）さん」を語っています。こういう凛とした人生があつて、

呉曰順オモニ・徐夫妻・ポスルちゃん・ヘスちゃんへ……と、志が代を重ねて伝えられていくのでしよう。こうした様子を、共感共苦のうちに味あわせて頂くことの、何というか、震えるようなよろこびを感じます。ポスルちゃんは私の孫のひとりと同じ年ですが、こんなにも本をたくさん読んで、そして、子どもながらにどんなにかきつい試練と思われるのに、お母さんともども立ち向かつていかれることへ、なみなみならぬ声援を送りたい気持ちです。お手紙を読んで、この冒頭陳述もこんな寒さと不調の中で一心に準備して語られたものだと思います。霜がきらめくようなまぶしさを感じます。知人の八十八歳の方が中国の方と知り合つて、日本に来られる度に向こうはお子さんを、その方はお孫さんを連れて、何十年か先のお互いのために逢うことを重ねておられます。二ム通信もそういう射程のお仕事だと思えます。母の記憶はないままに、魂の深奥で継承されている世代のバトンあり、また獄中から「いつもお前たちのことを思っている父さんがしるす」としたためる手紙に溢れる愛と共に形成されていく魂がある。それぞれの国のきびしい試練の中で至福を思う。

暁子さんは「例えていえば、自分のことを大事に考えてくれるお母さんが、ろくな働きもしないで、人間として失格な人他人のことも考えない人だったら、どんなに可愛がつてくれてもそんなお母さんに、悪いことは悪いと言わなければいい子じゃないと、私は思いますね」——そして好き嫌いじゃなくて私は中国を愛しているから、本当のことを言わなければ……と言われる。その端的な強さに私はたじろぐ。何故なら、私にとつて日本は「祖国」と実感できるようなものだろうか。ともすれば情けない現状への嘆きが先立って、肩を落としてしまう。しかし、この国を匡っていくのは、この国に生を受けている一人ひとりしかない。

かつて若いいのちを「天皇陛下のおん為に……」と死なしめたこの国は、今、生きる根っこを喪い、

惑い、キレ、荒れる根なし草を漂わせている。そこにつけこんで「自賛史観」の連中は、「新しい教科書」で絞りこんでいこうとしている。しかし、歴史の真実を覆いかくし、歴史の流れに逆行する中で、いのは育たない。

暁子さんの「長かった五十年」という投稿原稿は、二つの祖国を身に蔵して、深く肯かせられる重みを持つている。「過去を歪めることは歴史を背負って生きる日本の現在と未来を歪めることになる。そして、その重荷を自らの手で下ろさない限り、日本はいつまでたっても諸外国と対等な外交関係を作り上げることはできない」……まさにそのとおり。私が「私」を見出して生きる一步をふみ出すためには、ほんとうは、戦後何をおいても国としての生まれ代わりを徹底すべきだったのだ。未清算の過去は、歳月が経てば経つほど、雪だるまのように負債をふくらます。そんな中で新たな「戦前」がめぐりくるのを何としても防ぐためには、近隣の人びとに償いを果たし、乏しくなってもいいから、胸をはって人間らしく生きられる社会を創ろう!とする人を、一人でも多くする……その弾みをつけることよりほかない、と私は思う。

だが私は この寒くて小さい
わが祖国を 根っこまで愛しているのだ
たとえ千回 死のうとも

わたしは わが国で死にたい

——パプロ・ネルダ (チリのノーベル賞詩人)

(あごら京都)

長谷川暁子（劉暁嵐）さんとの出会いから

澤田和子

私の友人木田日登美ほぐださんが、八年前中国に留学するため、同じ大阪経済法科大学に勤務していた劉暁嵐さんの相談相手に私を選び、紹介をして日本を離れて行ったことから、暁嵐さんのおつきあいがはじまった。有名な反戦エスぺランティスト「長谷川テルの娘」日中の混血児ということであった。

大阪の平和運動家・反核実業人の会の宝木武則さん（エスぺランティスト）が長谷川テルさんの日本脱出を援助され、暁嵐さんに大阪の家を提供しておられた方と知って、過去のいきさつを教えていただいた。そして八〇年に制作された日中初の合作テレビドラマで、栗原小巻さん主演の『望郷之星』の存在を知り、ビデオを借りた。しかし、何度もダビングしてあり、声のみで画面が見えない。なんとか鮮明なものを見たいと、暁嵐さんに頼んだところ、栗原さんを経由して制作会社からビデオが送られてきた。それを見て「日本人でこんなすごい女性がいたのか」と驚いた。

私は、大阪市立婦人会館で近代女性史を学習したが、その中には長谷川テルは出てこなかった。何故だろう？と思ひ、手元にある歴史の本を探したが見つからなかった。ようやく中国関係の本の中で紹介されていて、日本兵に向けた反戦放送をした人であること、エスぺラントで書かれた書物が多くあることもわかった。このビデオをたくさんの人に見て貰いたい、この素晴らしい女性を知って貰いたいと、

私は走り出した。

九二年九月、まず私の所属する〈夕陽丘女性史グループ〉の十周年記念イベントに上映会ができたらと考えた。暁嵐さんから八月に大阪・八尾に栗原さんが公演に来ておられることを聞き、楽屋に暁嵐さんと宝木さんと一緒に訪問した。栗原さんの了解をとり、東京に出かけ、制作会社テレパック社と提供会社サントリー広報部の許可を受け、脚本を書かれた岩間芳樹さん（本年六月死去）にもお願いをして、「平和運動に使用する」との条件で上映の許可を受けた。九月二十七日、婦人会館のホールに、多くの参加者を迎え、初めて上映会が開催ができ、暁嵐さんに挨拶をしていただいた。平和運動を通じて知り合った弁護士や、作家の武田英子さん、京都の服部素さんも来てくださり、反響を呼んだ。このとき参加してくださった方が奈良や兵庫などでも上映会を何度か開催してくださった。そして、私の手元に、テルに関する書物や資料がたくさん集まってきた。

この後、九三年二月、暁嵐さんは日本国籍を取得、長谷川テルの娘、長谷川暁子とられた。嵐のあとと暁の到来を願ってつけられたであろうその名前を、彼女は「もう嵐はいやですから嵐を捨て暁子にしました」と言われた。その言葉に、彼女の長い厳しい人生が語られていると感じた私は、今もその言葉を忘れることはできない。

武田英子さんの紹介で、九四年一月に、あまり気乗りのしない暁子さんと山口の〈中国残留婦人交流の会〉に出かけた。彼女によれば「母テルのことを話せ」と言われても、生後一年未満で死去した母の記憶はないし、「有名な反戦エスペランティスト・テルの娘」が、この頃重荷になっていることと、心ない人たちから父劉仁の重婚説がささやかれていたことが、暁子さんの心を重くしているようだった。

前日からの大雪の中を、講演の前、世話役の方が瑠璃光寺に案内してくださった。この寺のご住職が、

彼女が中国人と知り、特別なお部屋に通して下さり、いろいろなお話をしてくださった。真つ白な雪のお庭と温かい言葉に彼女の心がなごんだ。

この後の講演「私の生き方」では、彼女は、今までの人生と日本と中国の間で平和を望む自分の気持ち、留学生のこと、残留婦人のことを、美しい日本語で話され、さすがテルの娘と、大きな評価があった。重婚であろうと、テルと劉仁の愛は深いし、平和運動に捧げた二人の生き方と関係はない、と私は思う。

二月に〈ピースおおさか〉に栗原小巻さんを迎え、上映会のあと坂井尚美弁護士（大阪弁護士会・平和問題懇話会）に司会をしていただいて、栗原さんと暁子さんが、テルさんのこと、ロケで中国に行かれた時のことなどを、たくさん参加者の前で語られた。会場には当時日本軍の通信兵として重慶でテルの放送を聞いた方からも発言があり、短い人生を平和に捧げたテルとその夫劉仁のことは、参加した多くの人たちに深い感銘を与えた。栗原さんはやさしい方で、暁子さんに「私はあなたのお母さんですよ」と話されている。

本年一月、京都立命館国際平和ミュージアム〈平和友の会〉の服部さん（あごら京都）から暁子さんに講演依頼があり、暁子さんは、母テルのことではなく、「二つの祖国をもつ、私なりの平和への歩み」として話してくださった。「もうこれが母のことを話す最後にした」と。いやがる暁子さんを「平和のためだから」と連れ歩いた私は、本当に申し訳ないことをしたと思う。しかし暁子さんと行動を共にして、私の中ではテルさんと暁子さんが重なり、暁子さんの平和を愛する人間性と、豊かな感性、そして二つの祖国をもつ国際人として、尊敬の念がますます強くなってきた。暁子さんをもっと多くの人に知って貰いたいと思うようになってきた。

九六年十二月末、兄の劉星さんが北京で死去され、劉仁・テルの遺児は暁子さん一人となった。彼女は今、大阪・京都・神戸の大学の非常勤講師や朝日カルチャースクールの中国語の先生として生活し、忙しい日々の中、私たちと一緒に平和運動をしてくださっている。「さすがテルの子」と周りの人たちは評価するが、本人は「テルはテル、暁子は暁子」としておられる。自分の言いたいことはきちんと表現し、平和に関して素晴らしい感性を持ち、行動をされている。テルと劉仁の平和への思いは暁子さんにきっちり引き継がれていて、頼もしい限りである。彼女についてはもっともっと書きたいことがたくさんあるが、誌面の都合で割愛しなければならないのが非常に残念である。

私と暁子さんの出会いをつくつてくださった木田さんとは十年前ベルギーで開催された「原爆被爆者・国際法廷劇」に参加される大阪在住の被爆者の援助をして、初めての海外旅行をしたことがある。役目を終えたあと、二人でオランダに行きアンネの家を見学したことがなつかしい。中国へ留学した木田さんの成果が実り、今年の夏、北京の学生向けに『アンネの日記』を中国ではじめての翻訳劇として演出されている。先日、北京の木田さんからの便りで、『アンネの日記』の上演が成功したことの知らせと、新聞記事が届いた。早速、暁子さんに翻訳してもらい、二人で木田さんの成功を喜んだ。

私は八一年から二年間、大阪市立婦人会館で近代女性史を学習後、夕陽丘女性史グループを結成、同時期に小さな会社を設立し、代表者に就任した。仕事と家事の余暇に、女性と平和の問題の学習と運動をしてきた。その中で「あこら」と斎藤千代さんに出会い、また、平和を求めて運動をしておられる多くの方々に出会った。

いま日本は、テルさんが命をかけて闘った、戦前の時代に逆行していると思う。ガイドライン法案をはじめ、いろいろな法案が国会で承認され、憲法九条も危なくなっている。『あこら二五一号』で報告を

した、オランダ・ハーグ世界市民平和会議は、「公正な世界秩序のための十の基本原則」を採択し、その第一項目に日本国憲法の理念が採り入れられ、「憲法九条」は世界に輝いた。

その世界に認められた「憲法九条」を、私たちは守る努力をしなければと思う。運動をするなかで出会ったすてきな方々と力をあわせ、ささやかであるが私なりの平和運動を続けたいと思う。

この大変な時期に、長谷川テル・暁子母娘の特集号を組んでくださった『あごら』の皆さんに深謝する。そして、この特集号をたくさんの人に読んでもらえたらと願う。

(あごら大阪)

◆北京の夕刊紙に紹介された木田日登美さんの『アンネの日記』



木田日登美さん

中央戯劇学院の張先生と彼の指導している日本人留学生・木田日登美さん、北京人芸の若手通訳呉朱紅さんが『アンネの日記』を中国の舞台で上演しようという話を聞いたとき、マスコミは心配した。(中略)しかし、七月二十五日、菊儿胡同七色光劇場で初上演された『アンネの日記』を観ると、この心配はまったく余計なことだとわかった。観客の笑い声、とりわけ、少年少女の観衆の無邪気な笑

い声は劇場の雰囲気と和ませた。哀しい物語は、必ずしも哀しい手法で表現するとは限らない。究極の環境の中に満ちた青春への賛美、命への執着、平和への憧れは、人びとに希望を与えた。(中略)豪華な劇と比べたら、『アンネの日記』は確かに小劇にすぎない。僅か二、三十万円の資金、伝統的舞台設計、無名の俳優、素朴な飾りでありながらも、この物語は秋の午後、爽やかな香りを漂わせて人びとの心を酔わせた。

〔北京晩報〕七月三十日付 文責・満岩記者 訳・長谷川暁子 要約・あごら編集部

絶望を希望に変えたひと

斎藤千代

「長谷川テルの娘が日本に見えたの。〈母を語る〉に、どうしても登場してもらいたんだけど」——興奮気味の澤田さんの電話に、「それはよかった！ ぜひ」と反射的に答えたのは、四年前のこと。長谷川テル——中国で反戦活動をした女性として、その名は（その人の存在は）、なぜか私の頭にも刻まれていた。しかし今考えてみると、私は戦後、テルの紹介記事を読んだ記憶もないし、日中合作のテレビ劇『望郷之星』が話題になったことも、今回資料を受け取るまで知らなかった。でも、その名は小学生の頃から知っていた記憶がある。その頃愛読していた『婦女新聞』にでも出ていたのだろうか。

この号の編集にあたって澤田さんから送られてきた膨大な資料を読んで、私は、仮にも「テルを知っている」と思っていたことを恥じた。テルについて何一つ知らなかった。エスペランティストについても、うわすべりの概念しかなかった。こんな大切な人の大切な行動を知っていなかったのだ。

テルのことをほんとうに知るためには、最低、テル自身の著作集『緑色の五月（みどりの五月）』（友常一雄訳・龔佩康編）か、『長谷川テル作品集』（宮本正男編）、『風の中のささやき』（高杉一郎訳）のどれかを読むほかないと思う。奈良女高師時代から社会思想に目覚め、一九三七年、中国人青年劉仁と結婚中国に渡って、日本の無謀な戦争を一日も早く終結させるために死力を尽くし、三十五歳の若さで、つ

いに故国の土を踏むこともなく逝つた生涯が、胸の奥に刃を刺されたように迫ってくる。

小林よしのりによれば、日本人はほとんど全員、十五年戦争に心から賛同していたということになるが、ごく普通の日本人だった私の両親も、戦争阻止に必死だったし、周囲にもそういう人が少なからずいた。それぞれがアリの一穴を掘って抵抗しようとしたなかで、国家は怒濤のように個人の志を押しつぶし、死ぬべきではなかった、死ぬはずもなかった人びとを殺し、アジアの人びとの生命にも精神にも修復しがたい深い傷を残した。

その土砂流、火砕流に、二十五になったばかりの女性が、ほとんど素手で立ち向かったことを思うと、「まるで戦前!」と、「今」を嘆きながら、対抗のうねりも未だにつくり出せないでいる自分が恥ずかしい。『緑色の五月』の中には、テルの実姉のほかにも中国のテルの友人十二人が、テルについて、その実像を生き生きと伝えている。また総論として、澤地久枝さんが、簡潔な文章でテルとその時代を省察、「さすが!」と感じ入る。

しかし、ただひとつ、澤地さんの題名が「意志強固な半生」としてテルのことを語っておられるのは、私にはひっかかる。どんなに意志強固な人でも、意志だけでは火砕流には立ち向かえない。私はテルの文章からは、繊細でこまやかな情感と、純粹すぎるほど純粹な心情を何よりも感じる。

二十二、三歳ころの短篇には、神経を病んでいたのではと疑いたくなる文章もある。(『男尊女卑の象徴』) のようだったと伝えられる父と、その父に従う母に絶望し、苦悩しながらも愛し続け、そういう「日本人」を造り上げた日本の社会を考察しつづけたテル。彼女は日本の社会の状況を学ばずば学ばず、その病根の深さにおののき、いたたまれず、自分を内側から駆り立てるものに突き動かされて死力を尽くした、と私には思える。

目を覆うほどの日本軍の残虐に絶句しながら、彼女は、それを犯した一人ひとりの兵士に対しては、むしろ哀れと思う。日の丸と君が代を叩きこまれて、「お国のための正義」と信じて戦場に狩り出された情報操作、情報封鎖に何とか気づかせたいと、彼女は心を込めて宣撫放送を続けたのだろう。

《重慶放送》の彼女の声を聞いた兵士の一人の歌「重慶放送　その流暢な日本語を　ひそかに聞きて　おだやかならず」は、その彼女の必死のやさしき、必死の思いを感じ取ったのだろう。

世界に向けての国際語エスペラントでの発信にも、日本と日本人に対する愛情があふれている。「売国奴と呼んでくださっても結構です」と言い切れたのは、「売国奴と言う人は言え、自分こそ愛国の士」と、自ら深く信じたことができたからではないだろうか。

そのやさしさと愛情は、中国人の夫、劉仁への愛によって国境を超えた人間愛に高まった。それは「強固な意志」ではなく、「ひたすらな祈り」にほかならなかったのではあるまいか。

テルの著作集を読んでいると、私はつい、高群逸枝を思い出す。『大日本女性人名辞書』『母系制の研究』『女性二千六百年史』で、皇紀二千六百年の波に乗った高群に対し、十三歳年下のテルは、プロレタリアート・エスペランティズムの学習を通じて、グローバルな思考力を培い、戦争の抑止力があるとすれば、世界の良識とのネットワーキングしかない、と信じていた。彼女を貫いていたのは、常に個であり、国家にも家制度にも拘束されることはなかった。フェミニズムの元祖として、今も多くの女性の信奉を集めている高群だが、フェミニストという意味では、テルこそ本当のフェミニストだった、と私は思う。

劉仁と知り合う一年以上前の一九三五（昭和十）年二月に、彼女は「日本婦人の地位向上のために必要なこと」として、婦人の選挙権、民法の改正、公娼制度の廃止、助産婦の地位向上、母性保護、を、エスペラントで世界の同志に向けて発信している。今日、エンパワメントとかジェンダーといった美し

い言葉で言われていることの本質を、六十年前に的確に示しているのだ。そして、公娼制度の廃止については、「この制度を恥ずべきものとしてキリスト教徒が、外国人も含めて主体となって運動しているが、それは道徳的立場に立っており、へおしろいをつけた女奴隷の廃止を意味していない点にご注目ください」と、わざわざ付記している。娘を売らなければならない農山村の貧しさは、中国侵略を肯定する構造でもあった。同じ貧しさを負いながら、それを社会の抜本的改造にかけた中国の人びとの思想の確かさに日本の後進性を感じとっていた彼女の知性と感性に、改めて脱帽する。

長谷川テルとその娘・暁子さんを紹介するこの号には、テルの原作をできるだけ入れたいと希ったが、限られた誌面、ほんの数点にとどまったことが申しわけない。これを機に、長谷川テル・暁子紹介の書籍を編集したいと思っているが、とりあえず資料名的一端をご紹介します。

この号は、「のつびきならない危険な時代になった今だからこそ、長谷川テル母娘の志を伝えたい」という〈あごろ大阪〉〈あごろ京都〉の方々の志から生まれた。民衆の心を無視し続ける日本の悪法量産政治を嘆くだけではなく、変革の行動を実行する具体的な方法と気力を得る一助となれば幸甚に思う。

(あごろ新宿)

〈主な参考文献〉

- 『嵐の中のささやき』(長谷川テル著 高杉一郎訳 新評論社刊 初版一九五四年、再刊一九八〇年)
『テルの生涯』(利根光一著 要文社刊 初版一九六九年、増補版一九八〇年)
『長谷川テル作品集』(宮本正男編 亜紀書房刊 一九七九年)
『緑色の五月(みどりの五月)』(友常一雄訳・龔佩康編 中国旅遊出版社刊 一九八〇年)
『中国の緑の星』(高杉一郎著 朝日新聞社刊 一九八〇年)

劉星（りゅうしん）氏の想い出

坂井 尚美

劉星さんというだけでは、ほとんどの方がご存知ないだろう。日中戦争たけなわの一九三八（昭和十三年）年、当時の漢口（現武漢）から中国侵略中の日本兵士に向けて、「あなたたちの敵は、こちら側にはいません。私を売国奴と呼んでもらっても結構です」と訴えて反戦放送をした長谷川テルの遺児一人のうち兄その人であり、妹さんが暁子さんである。

劉星さんとは五年前の春、北京ではじめてお会いし、当時、中国政府公認の外国人弁護士第一号として活躍中であつた故高橋正毅弁護士に引き合わせたことから、強烈な印象が今でも脳裏にやきついて離れない。劉星さんは当時、北京工業大学の助教授をされていたが、その笑みを絶やさない温厚な人柄には、苦難の過去を感じさせないものがあつた。その後来日されたときも、わたくしの事務所でも再会することができた。

その後まもなく胃がんで入院されたことを暁子さんから聞いてはいたが、三年前の十二月末に亡くなられたことを聞いて驚いた。日米開戦の年の十月、父劉仁、母テルの長男として重慶で出生されたが、日中の架け橋として今後もその活躍が期待されたのに、僅か五十五歳でこの世を去られたのである。日本の今日をどのように見ておられたか、生前にぜひともじっくりお話を聞きしたかった。

それにつけても、わがジャパンは、戦前、とくに劉星さんの母が反戦放送をした「国家総動員法」登場の頃と似てきたように思う。長谷川テルがわが国でご健在なりせば、ちょうど米寿のお年、あらためて、「われわれの敵は海の向こう側(大陸)にはいませんよ」といわれそうである。

劉星さんには遺児三人が現在北京に居られ、祖母のふるさとで勉学する機会を持ちたいとの希望ももっておられるようであるが、今後もしさまざまの困難を乗り越えられるよう、ねがってやまない。

(大阪弁護士会・平和問題懇話会)

反戦活動で知られるエスベランチスト、長谷川テルさんの遺児(日本にも知己が多い北京工大助教、物理学者)の劉星(リュウ・シン)さんが、北京で胃がんのためじくなつた。親族が最近、友人たちに明らかにした。

1912年、山梨県に生まれたテルさんは、エスベラント運動を通じて友人、留学生、劉さんと知り合い結婚、37年中国へ、日中



悼

北京工業大学助教授 劉 星氏

12月30日死去 55歳

心の故郷に思い残し

戦中つね後、前線で日本軍向けの反戦放送に従事した。日本のエスベラントにあてた手紙でテルさんは「おのぞかであれば、どうぞわたしを真切ものとよんでくださることも結構です。……他民族の国上を侵略す(当時5歳)と妹の劉曉

面から反戦を告げた数少ない女性のひとりとして昭和史に足跡を残した。47年1月10日、妊娠中絶手術がもたらした、遺児たちの消息は不明だったが78年、下刊に再入院して数日後に

四川省江油のセント工場付属中学校教師となった。曉嵐(日本名・長谷川照子)とよぶ。47年11月、長谷川照子と結婚したが、遺児たちの消息は不明だったが78年、下刊に再入院して数日後に

動講師(中国語)を務める。曉嵐(日本名・長谷川照子)とよぶ。47年11月、長谷川照子と結婚したが、遺児たちの消息は不明だったが78年、下刊に再入院して数日後に



るばかりか、なんの罪もない無力な難民のうえに、この世の地獄をもちたつて平然としている人ひと、おなじ民族であることとを恥かして「おれいます(利根光一著「テルの生涯」)と著している。「売国奴」と名指して非難されながら、正義し、文化革命期間中に

肉親が判明した。79年、2人は日本エスベラント協会心ついたところから心の故郷と思ってきた日本にとも帰ったが、その人生や中国について本を書くことが星さんの悲願だったのだが……。

大坂府在住で大学の非常

【芸芸部・佐藤 由紀

テルさんに救われた「中国・東北の旅」

芦澤礼子

一九九五年六月末、四川省成都市での日本語教師生活を終えた私は、北京で世界女性会議が開催される八月末までの二か月間、念願の中国自由旅行に行くことにした。

まず七月は、高校生の頃からのあこがれの地、シルクロードへ。教え子の呂さんが同行してくれ、嘉峪関く敦煌くトルファンくウルムチくカシガルと、西へ西への三週間。敦煌の壁画に感激し、パキスタン国境近くのカシガルでは「ついにここまで来たか」と感慨にふけり、安いスイカやハミウリ、ブドウにかぶりついた。一晩立ちっぱなしの列車、二日間砂漠を走るバス、体力的にはきつい旅であったが、心は夢の実現と冒険心で踊っていた。

七月末に一度成都に戻って呂さんと別れ、今度は東へ向かった。目指すは東北地方、つまり「旧満州」だ。日本の敗戦からちょうど五十年、この時こそ、日本が深い爪痕を残した東北地方にぜひ行かなければならないと思っていた。この年、中国中央テレビでは毎日抗日戦のフィルムが流され、戦勝五十年を盛り上げていた。その少し前に日本の閣僚が日中戦争に関して「不適切」な発言をして中国で話題になり、私たち日本語教師は非常に恥ずかしく、腹立たしい思いをした。毎日中国の学生と付き合いながら地道に「民間外交」していても、閣僚の発言ひとつで努力が崩されるのはやりきれない。そんなことも

「東北で事実を見なければならぬ」という思いを駆り立てた。

卒業生を訪ねて山東省を十日間ほど回ったあと、遼東半島先端の町煙台からフェリーで遼寧省大連へ。そこからはもう東北地方。大連は前年、吉林省長春は二月に訪問済みだったので、計画に入れたのは遼寧省瀋陽（日本占領中の奉天）と撫順、黒龍江省ハルビン。いずれも日本軍が残した生々しい侵略の跡を見ることが出来る都市である。

瀋陽では九・十八記念館（柳条湖）、撫順では平頂山遺骨館（関東軍が村人三千人を虐殺した現場）と戦犯管理所、そしてハルビン近郊の平房には七三一部隊記念館と部隊が使用した建物の数々。平頂山では関東軍に殺された村民の、骨に刀傷や弾傷がついた遺骨が累々と折り重なり、子どもを抱いたそのままの形で残る母の遺骨の頭蓋骨付近に、髻の形の遺髪がころがっていて足が震えた。ちょうど八月十五日に訪れた七三一記念館の新館は当日オープンで、小中学生でいっぱい。近くにある旧展示館の建物は七三一時代そのまま、古い建物の中に残された医療器具や人体実験のデータなどは新館よりも臨場感があり、心の底から冷えびえとしてきた。

行くところ行くところ、日本軍がいかに非道であったかを物語るものばかりであった。自分で立てた旅行プランでありながら、足がだんだんと重くなってきた。シルクロードでは羽が生えたようにように軽かったのに……。日本軍の侵略の事実を見て、日本人がかつてしたことを認識しようと思いつつも、心の中では道を歩いていても「私が日本人だと知られたくない」と思うようになってきた。「日本の侵略者と同じに見られたくない。私は違う」と思い込みたい。そうでなければやりきれなかった。

一つだけ、救いの場所と思っているところがあった。ハルビン市内の「東北革命烈士館」、そこには長谷川テル（中国では緑川英子）さんの写真があるはずだった。当時はテルさんについて「中国で日本兵

に平和を訴える放送を行なった勇氣あるエスペランティスト」というごく基本的な知識しかなかったが、革命烈士として写真が飾られているという情報は入手していた。ところが、前のめりでウンウン足を引きずりながら烈士館へ行つて、またまた打ちのめされるような事実に出会った。館内では戦勝五十周年を記念して「日本軍の毒ガス戦」という特別展覧会を開催していたのだ。それまで毒ガス戦や、毒ガス工場のあつた広島県大久野島についてはほとんど知識がなかつたので、夢中でメモを取りながらもその非道さにショックを受けていた。我が家の近く、千葉県習志野市でも毒ガス専門兵士が養成されていたなんて、信じたくなかつた。

そのショックから立ち直りかけたのは、別フロアの常設コーナーに革命烈士たちの写真が並ぶ中で、ようやく「緑川英子」さんの写真にめぐりあえた時だつた。眼鏡をかけた地味な感じの、「烈士」というイメージとかけはなれたお顔であつたが、目と口元がきりつとしていた。この人は中国人の仲間だつた。尊敬すべき日本人もいたのだ……ホツとした、救われたと思つた。

今回、テルさんについて『あごら』で特集する機会を得て、改めてテルさんの足跡を勉強し直した。私はまず大きな勘違いに気づいた。もつと年高の女性だという印象だつたが、実際は三十五歳、今の私と同じくらいの歳で亡くなられた。その歳でこれだけの考えを持ち、実行されていたことにまず驚いた。それから、テルさんが「日本人兵士たちと私は同じ日本人、同じ人間」という信念を持つてマイクの前で呼びかけていたことに、改めて恥じ入る思いだつた。ハルビンで「侵略者である日本兵と私は違う」と思ひたかつた私は、全く間違つていたのだとはつきりわかつた。私も同じ日本人、同じ人間。加害者にも被害者にもなりうる可能性を持つている。加害者にならないために、この国を加害者にさせないために、強い意志が必要なんだということを、テルさんにつきつけられたような気がしている。

曉子さんが文化大革命の中を己れを曲げずに生きてきた勁さは、誰に教えられたものでもなく、テルさんから引き継いだ資質をご自分自身で育てた結果だと、今回強く感じた。文革の中で身を守るために面従腹背で切り抜けた人は多いのに、彼女はそれができずに迫害された。テルさんも曉子さんもまっすぐで、それはとても清々しい。

ちなみに、曉子さんの母校・唐山鉄道学院は、私が日本語教師として在籍した成都の西南交通大学の前身である。唐山大地震のあと、四川省に学校ごと引っ越したのである。今回このことがわかって、私は曉子さんにお会いしたことはないが、不思議な縁のようなものを感じている。

曉子さんの後輩——私が教えた学生たちの世代は屈託がない。特に日本へ留学で来ている学生たちは発言もいたって自由でびっくりする。先日も、夏休みで一時帰国した女子学生がお土産を携えて我が家に来てくれた。彼女は家族や旧友に会い、里帰りを満喫した反面、「今の中国のテレビは法輪功のことばかり」とうんざり顔で報告した。それから、台湾と中国の関係が悪化していることをたいへん気にしていた。「戦争になったらアメリカが参加するでしょ？ そうしたら日本も参加するよね……」。ガイドラインのことを考えて私も暗い気持ちになったが、そのあとの発言に私は腰を抜かしそうになった。「台湾は独立していいよ！ 今の中国の体制は良くないから。チベットだっていいよ。世が世なら、場所が場所なら「反革命」と言われそうな発言だ。しかし彼女によれば、こう考える中国の若者は結構いるらしい。良くないと思ったら気負いもせずに「良くない」と言える、精神的にも縛りのゆるい「中国的新人類」の誕生を見る思いがした。彼らののびのびとした感性が、どうか抑えつけられませんか。そして、テルさんと曉子さんのように、たとえ抑えつけられてもはねかえす力を若い彼らに持つてほしい。その力を私も持ちたいと思っている。

(あごら新宿)

長谷川テル・暁子の足跡

1912 (明治45)

3月7日、山梨県猿橋で出生。父・幸之助、母よね。姉は幸子。

1923 (大正12)

東京府立第三高女 (現在の駒場高校) に進学。

1929 (昭和4)

奈良女高師・文科に進学。

◆前年から文部省の思想統制が顕著に。各帝大の社研に解散命令。

河上肇 (京大) 向坂逸郎 (九大)

らが大学から追放。

◆4月 共産党員の全国的大檢舉。

◆10月 世界大恐慌。

1931 (昭和6)

「堤中納言物語」を研究テーマに。学内の短歌サークルに参加。

◆9月18日、柳条湖事件、満州事件勃発。

1932 (昭和7)

◆3月1日「満州国」建国宣言。

◆5月 五・一五事件。

6月 級友・長戸恭らとエスプレントを習う。

9月 8・30事件思想弾圧で逮捕

長戸と退学処分。帰京する。

12月 日本プロレタリア・エスプレント同盟に参加。

1933 (昭和8)

◆1月 ナチスドイツ、政権掌握

◆3月 日本、国際連盟脱退。

4月 日本エスプレント学会に無給勤務。5月「エスプレント文学」創刊に参加。

1934 (昭和9)

1月 NHKアナウンサー試験第一次に合格、二次試験に出頭せず。

◆10月 中国共産党「長征」開始。

1935 (昭和10)

2月 上海エスプレント協会

「ラ・モンド」に「日本婦人の状況」を発表。

1936 (昭和11)

2月 婦人エスプレント連盟の発

起人の一人に。

◆2月 二・二六事件。

3月 劉仁と築地小劇場で「夜明け前」を観劇。

秋、家族の同意を得ず劉仁と結婚。

1937 (昭和12)

1月 劉仁、抗日救国運動のため中国に帰国。

4月 テル、英国船で横浜より上海へ。

◆7月7日 蘆溝橋事件、日中戦争勃発。

◆8月 上海陥落。

11月 上海から香港へ。12月広州へ。

◆12月 日本軍、南京占領 (南京大虐殺)。

1938 (昭和13)

2月 テル、日本のスパイと疑われ、香港に追放される。劉仁もあ

とを追う。

◆4月 日本、国家総動員法公布。

9月 郭沫若らの協力で漢口へ。

国民党中央宣伝対日科で日本語の反戦放送に従事。

◆10月27日 武漢陥落。

11月1日 東京・都新聞が「嬌声

売国奴」テルの記事を掲載。家族

には脅迫文が届く。

12月 重慶へ。文化工作委員会

働く。

1939 (昭和14)

◆1月 重慶爆撃始まる。

◆9月 ドイツ軍ポーランド侵入

第二次世界大戦開戦。

1940 (昭和15)

◆10月 大政翼賛会発足。

1941 (昭和16)

6月 重慶で「生きている兵隊」

のエスプレント訳を発行。

7月 重慶文化人の会で周恩来が

「日中両国民の忠実な愛国者」と

称賛。

10月 長男・劉星誕生。文集「嵐

の中のささやき」出版。

◆12月 真珠湾攻撃、太平洋戦争

勃発。

1945 (昭和20)

◆3月 東京大空襲

◆4月 米軍、沖縄に上陸

5月 『戦う中国で』を出版。

◆8月 広島、長崎に原爆投下、日本敗戦。

11月 重慶を離れ、武漢へ。

1946 (昭和21)

1月4日、劉星 (四歳) 国民党特務により誘拐。六日後釈放。

◆1月10日 国・共両党の停戦協定調印。

2月 南京・上海を経て、3月瀋陽へ。

3月 長女・劉曉嵐 (長谷川曉子) 誕生。

夏 夫とハルビンで東北行政委員会委員を担当。のち、チャムスへ。

1947 (昭和22)

1月 東北社会調査研究所研究員に任命される。10日、妊娠中絶の感染症で死去 (享年三十五歳)。

4月22日、劉仁、肺水腫で死去 (享年三十六歳)。夫婦はチャムスの革命烈士墓に葬られる。遺児、劉星は叔父の元で育ち、劉曉嵐は牡丹江の孤児院で三歳まで育つ。

1948 (昭和23)

8月、由比忠之進、牡丹江で劉仁の弟からテルの死を聞き、翌年9月に日本に伝える。

1949 (昭和24)

◆10月1日 中華人民共和国建国。

1950 (昭和25)

曉嵐、ハルビンの保育園に移転。

1952 (昭和27)

ハルビン小学校入学。

1961 (昭和36)

兄・劉星と叔父の家で再会。

1966 (昭和41)

◆文化大革命始まる。

1969 (昭和44)

9月 曉嵐、唐山鉄道学院大学卒業。文革で寧夏回族自治区へ下放。

中衛鐵路学校で数学教師。

1971 (昭和46) 結婚。

1972 (昭和47)

◆9月 日中国交回復

1974 (昭和49) 長女誕生。

1976 (昭和51)

◆9月 毛沢東逝去。10月四人組逮捕、文化大革命終息。

1977 (昭和52)

8月 劉星から世田谷区長宛ての、テルの親族の消息をたずねる手紙で、テルの姉弟と連絡がつく。

1978 (昭和53)

8月 テルの姉、西村幸子訪中。

北京で二遺児と対面。

1979 (昭和54)

8月 劉星・劉曉嵐、初来日、母の足跡を訪問。

1980 (昭和55)

1980 (昭和55) ドラマ「望郷之星」制作、放映。

1981 (昭和56)

北京鐵路工廠職科大学で数学教師。

1985 (昭和60)

日本留学 (電気通信大学) 奈良女子大学

1987 (昭和62)

中国へ一時帰国。

1989 (平成1)

再々来日、福島大学に留学。

1990 (平成2)

4月、大阪経済法科大学国際部に非常勤講師として就職。夫と長女を呼び寄せ、堺市に居を構える。

1993 (平成5)

2月 日本国籍取得 (日本名・長谷川曉子)

1994 (平成6)

山口県へ中国残留婦人交流の会

で「私の生き方」と題して講演。

1996 (平成9)

12月30日 劉星、北京で死去 (享年五十五歳)。

1999 (平成11)

2月 京都立命館平和ミュージアムで「私なりの平和への歩み」講演。

11

25

〔参考資料〕『都新聞』一九三八年十一月一日付の記事

「嬌声売国奴」の正体はこれ 流暢・日本語を繰り 怪放送祖国へ毒づく 「赤」くづれ長谷川照子

漢口陥落直前まで漢口放送局のマイク

から流暢な日本語で激越な反日デマ放送をしてゐた日本女性の声が連日聞えて来たことは既報したが、この祖国日本に弓を引く覆面の売国奴女性の正体が武漢陥落と共に判明 三十一日夕刻 出先官庁からこの詳報が警視庁外事課にもたらされた。この女性は杉並区三谷町一五三、元東京市役所土木課長 長谷川幸之助氏（五八）の次女 奈良女高師中退の長谷川照子（二七）で、かつて 赤の女闘士として囂躍中に中国留学生と 赤い恋

に結ばれて渡支したものである。

本年二月上旬、突然警備放送局から女の声で反戦演説が行はれた。然も、それが菌切れのいい流暢な日本語である。この放送を耳にした誰もがマイクの前に起つ覆面の女性は何者だろうと深い疑問を抱き当局でもその正体を突きとめるため、躍起となつたが皆冒判らなかつた。次いで広東に現われて何回となく放送は繰返されたのだ。今夏わが無敵皇軍が漢口攻略の火蓋を一斉に切るや今度はこの怪放送が漢口を

舞台として毎夕行はれ、日本軍部の誹謗

日本経済に関するデマが紅い唇に載せて毒つき始めた。かくて去る二十七日午後五時三十分、神速皇軍の威力が完全に武漢を圧したその刹那から、この怪放送はハタと止まってしまつたが間もなく覆面の女性長谷川照子の全貌が明るみに曝されるに至つたのだ。この長谷川照子とは一体どんな女性か――。

彼女の父、幸之助（五八）は東京市役所土木課に三十五年間勤続 土木課長の椅子を最後として一昨年春退職、今は杉並区三谷町に住んでゐる。母よね（五三）も健在、長女ゆき子（三〇）、長男弘（二五）の間に生れた次女で、麻布の府立第三高女を首席で通し、昭和四年卒業と同時に奈良女高師に入學したが、その頃から赤の思想にかぶれて、エンゲルスカールへ急転換。

同校四年在學の秋、全園を吹きまくつた新年兵隊彈壓で退校を命ぜられた。

その後両親の許にあつたが一目踏み迷つた「赤」を清算仕切れず、日本エスベラント学会に所属し、直に同学会の人氣もとなるや同学会に通つていた中華民国留学生として文理科大学在學中の劉仁（二八）と「赤い恋」に陥ち、両親を説得して昨年三月正式に結婚、同年四月劉仁の故郷浙江省へ旅立つたが同年七月七日の事變勃発するや劉と共に蔣政権にくみし、時と共に敗軍の中樞部へとよち登つて行つた。親許への書信は上海から昨年十月までに四回寄せてゐるが、勿論手紙に自分が蔣の傀儡となつて反日戦に加わつてゐるなどは寄せてをらず、音信は第五回頁、本年一月香港から送つたのが最後である。

“嬌聲賣國奴”の正體はこれ

流暢・日本語を操り

怪放送祖國へ毒づく

赤くつれ長谷川照子



子照川谷長・女を賣を國

「流暢・日本語を操り」の「怪放送祖國へ毒づく」の著者長谷川照子。この著者は、戦時下の日本に於いて、流暢な日本語を操り、祖國を毒づく行為を行ったとされている。著者の経歴や活動の詳細は、本文で詳しく述べられている。

「流暢・日本語を操り」の著者長谷川照子。この著者は、戦時下の日本に於いて、流暢な日本語を操り、祖國を毒づく行為を行ったとされている。著者の経歴や活動の詳細は、本文で詳しく述べられている。

「流暢・日本語を操り」の著者長谷川照子。この著者は、戦時下の日本に於いて、流暢な日本語を操り、祖國を毒づく行為を行ったとされている。著者の経歴や活動の詳細は、本文で詳しく述べられている。

「流暢・日本語を操り」の著者長谷川照子。この著者は、戦時下の日本に於いて、流暢な日本語を操り、祖國を毒づく行為を行ったとされている。著者の経歴や活動の詳細は、本文で詳しく述べられている。

“本心とは思へぬ”

父幸之助氏悲痛を一語

「本心とは思へぬ」という一語、父幸之助氏の悲痛を表現している。この一語は、戦時下の日本に於いて、多くの日本人が抱いていた複雑な心情を象徴している。父幸之助氏は、戦時下の日本に於いて、多くの日本人が抱いていた複雑な心情を象徴している。

『都新聞』に掲載された記事
1938(昭和13)年11月1日

●長谷川テルさんの著作より

〔編集部注〕今回ご紹介した文章は原文がエスベラント語であるため、『緑色の五月（みどりの五月）』
『長谷川テル作品集』の訳を参照の上、編集部で整理したものです。

晩春の別れ

横浜の港は騒音で沸き立っている。

出航の汽笛が鳴りひびく。

船と陸のあいだには数知れない紙テープが五色の波となつてたわむれている。しかし私の両の手はからっぽである。テープを手に涙で目をうるませている見送りの人を、私はどこにさがせばよいのだろう。まるで風に吹き散らされる秋の木の葉のように、私はさびしく祖国を離れなければならないのだろうか……

突然、岸壁の上の沸きかえる騒音のただ中から、歌声がはつきりと聞こえた。——「新しい息吹きおこり、たくましい声とどろく……」（エスベラントの歌「エスベロ（希望）」歌っているのは数人の中国の同志である。旅券のない私が中国へ渡航できるように奔走してくれた人びとであり、いずれ中国で再会するはずの人びとである。心の中で、私も彼らといっしょに歌う。

船はゆつくりと出発し、陸は後ろへすべって行くように見える。五色のテープがびーんと張りつめた

かと思うと、まもなく散る花のように海面へ落ち始めた。岸壁上の歌声はだんだん低く遠ざかる。

「うるわし、われらの夢、この世に花咲かせん……」

もう白いハンカチを振っている彼らの姿が見えるだけである。船と陸をへだてる距離は刻々に大きくなってゆく。彼らの姿はだんだん小さくなってゆく。私の目はなお彼らに釘づけになっているが、しかしそれは彼らを見つめているのではなく、ほかの、目には見えないあるものを見つめているのだということ、私は知っている。……私は立っている、身じろぎもせずに立ちつくしている。

陸は遠ざかってゆく。私がある上で二十五年のあいだ、バラ色の夢、赤い怒り、黒い倦怠、みどりの愛を織りなしたその陸が遠ざかってゆく。それはもうすっかり灰色に化してしまった。灰色の大地よ、しかし、どうか私の過去の一切の幕場とならないでおくれ。

船はもう後ろに白いしぶきをあげながら速度を早めている。青い海はやさしく横たわり、空は瑠璃色に晴れわたっている。

一九三七年四月中旬のことである。

私は黙って、大きな英国船の三等船室のベッドに腰かけている。ぐるりには、男、女、子どもたち、十数人の船客がいる。彼らはみんな中国人である。中国人——きのう彼らは私にとつただの異国人にすぎなかった。きょうは道連れであり、あすになれば彼らはすでに同国人となつているだろう。

多くの日本人には中国人を軽蔑する習慣がある。彼らは中国人を下等な人間のようにながめるのだ。彼らの頭の中にある中国人の象徴は、未だに豚のしっぽに似た弁髪である。現代のヨーロッパふうの服装をした中国人にさえ、彼らはにんにくの悪臭と豚肉の脂肪とをかきつけ、本能的に肉体的な嫌悪感を

もって毛嫌いするのだ。そのほかにいつたい中国人について何を知っていると云うのだろうか？　そうだ、彼らは知っている、中国人が日本人を憎み、いたるところで日本人と対立し、しばしばそのために血が流されていることを。だから、私の両親や親類の者たちが私を怒ったり、あやしんだりするのも当然だし、——彼らの表現によると——私は中国人と結婚することによって、自分自身も家庭をも好きこのんで恥ずかしめることになるのだ。同時に私が上海へ渡航するのを、まるで血に飢えた敵のまつただ中へ、武器も持たずに身を投げ出すかのようにおそれている。

親しい女友達は言った。——現代の日本の青年の大多数は、いかなる学究心も、いかなる希望や情熱も持たないで老人のように座食しているだけなのに、中国の青年の多くはまるでその反対であることを知っている。だからあなたの恋愛を充分理解している。だけど——と彼女はつけ加えて言った——もしも私があなたなら、このような恋愛はあきらめるだろう、なぜなら、たった一人の母親を孤独な悲しみの深淵につきおとすことになるだろうから、と。出航の日を控えて彼女から短い手紙をもらった。それには次のように書かれていた。「私はもうあなたに会いに行くのは止めます。手紙でこそ、やっとの思いで、さよなら、ということができます。さようなら、あなた。どうぞおしあわせに、そして私のことを忘れないでくださいね。万一、あなたが敗れたり、心が傷ついたりしたときは、私のところへ帰ってきてください。いつでもあなたのために休息の場所を用意しています」

彼女は「知っている」とか「わかる」などという言葉を使っている。しかし、実際はほとんど何も知ってはいないし、わかってもいないのだ。彼女にとつて中国はそんなにも遠いのだ。

私たち 에스ペランティストにとつて民族は絶対的なものではない。それはただ、言語、習慣、文化、皮膚の色などの相違を意味するだけである。私たちはお互いを「人類」という一つの大家族の兄弟であ

ると考えている。私たちにとつてそれは理論ではなく、実感なのだ。さらに私たちは外的には同一の言語で結ばれ、内的には同一の感情で結ばれている。私たちもまた、自分の祖国を熱愛している。しかし、その祖国愛は、他民族への愛と尊敬と両立しないような性質のものではない。

ヒトラーはドイツ民族の種族的な優秀性と純粋性を宣伝し、自国民の心にヨーロッパ他民族への憎悪と侮蔑を植えつけようと努力している。彼はドイツの人たちをも含めて、世界のあらゆる国の 에스ペランティストの共通の敵である。日本の支配者たちについても、同じことが言える。彼らは日本人と中国人のあいだに溝をつくり、たえずこれを深め、かつ大きくして、この溝が自然なものであつて、越えることができないものだという印象を与えようとしている。

いままでに、おそらく数百の、あるいは数千の日本の婦人が、この溝を越えて中国人と結婚した。彼女たちの道が、花ひらく道であつたか、いばらの道であつたか、私は知らない。彼女たちの愛は国際的なものであつたが、また同時に個人的なものでもあつた。私もまた彼女たちのうちの一人である。ただちがつているのは、私たちの結びつきが 에스ペラントから切り離すことができないということである。したがつて、私の未来が幸福であるか不幸であるかは、それらの日本婦人の不幸とはいささか変わったものである。上海には、ひと足さきに着いた彼が私を待つてゐる。彼のほかには、誰一人私の知人はいない。遠い東北のある省からやつてきた彼にとつてもまた、上海はまったく見知らぬ都市である。でも、そのことで私はいささかのためらいも感じてはいない。私は彼のほかに一人も知人がいない、と言つた。いや、それは思ひちがいだ。私は上海で綠(エスペラント)の友だち、中国のエスペランティストたちを見出すだろう。いまはまだ、彼らの名前すら知らないけれど。

ひと月前は私の二十五歳の誕生日であつた。もしも人生が五十年だとすれば、すでにその半ばを終わつ

たのだ。過ぎ去った半生はきわめてありふれたものであつたし、これからのきたるべき半生も目新しいものではあり得まい。私はありふれた女性なのだから。しかし、仮りに日本にとどまった場合よりも、いくらかでもよけいに、より意義のある仕事を何かやれるだろうと私は信じ、そして感じている。なぜなら私はエスペランティストなのだから。

波に揺られる船が私の心を揺さぶる。おそらくもう大海へ出たのだろう。

もう考えこむのはやめよう……：なにはともあれ安全に上海に到着しますように。海の上ではなにことも起こりませんように！

二日目の夕方、私を乗せた船はこの航海の最後の日本の港である長崎に寄港した。一時間の停泊である。この一時間が私にとつてどんなに長く、どんなに不安であつたらうか。出航の合図があつたとき、肩の荷をおろした思いでほつと溜息をついた。

甲板の上で夕方の風がひんやりと髪の毛を愛撫してくれる。港ははるかかなたへ遠ざかつた。灯火のともつた長崎はまるで童話の国の美しいお城である。灯火がまたたいている。私に神秘的なお話をたくさん話したがっているかのように。だが、私はまだお話の魅力にとりつかれる幼児なのだろうか？

いまや、私の前には自由な海が横たわっているばかりだ。海は私を祖国から、友達から引き離す。しかし、また私を新しい生活へ、新しい友達へとみちびいてくれるのだ。

さようなら、私の祖国よ、友よ。

その夜の眠りは安らかだつた。夢の中で、静かに散りかかる桜の花びらと、その花びらのなかにたつた一人の小さな姪の、つぶらな黒いひとみを見た。

上海にて

苦力と摩天楼

六年の歳月が過ぎ去つたが、あの年、私は無事に上海埠頭に立つて、劉仁が私を手招いた時の情況はつきりと思ひ出すことができる。うれしかったと言うだけでは足りない、その時の私の心境はもつと複雑であつた。私は黙つて、じつと彼の手を握りしめ、言葉もなく、何故か、劉仁の手がいつもより大きく、熱いと感じた。

一九三七年四月十九日正午、私はこのようにして、中国大陸への第一歩を踏み出した。戦争で南に追ひ出されるまで半年、上海に私たちは住んだ。そういうわけで、上海は私にとって最も印象の深い、最も思ひ出の多い町になるはずだったが、正直言つて、私は好きになれなかつた。

私が港を出て、一番先に見たものは、一群の上半身まる裸の苦力カウリと一列に並んだ現代建築群であつた。この対比が私に与えた印象は深刻で、強烈であつた。以後「上海」と聞くと、直ぐ私の脳裡には、この二つの対比が浮かび上がる。これが、私が上海を好きになれない原因だったのである。

摩天楼は上半身裸の苦力たちが血と汗で、一階一階と造り上げたものである。しかし、一度出来上がったしまえば、苦力たちは又直ぐ地面に戻つて、相変らず家畜のように地を這ひ回る。摩天楼の主人公たちは文明生活に必要なものは、何一つ不自由なく享受しているが、この上、彼等は本国では到底受ける

このできない楽しみまで享受している。上海は所謂「冒険家の樂園」だと言われている。彼等には、この汚らわしい上半身裸の者たちを思い出すことは二度とあるまい。摩天樓の主人公たちと苦力たちの間には直接的な関係は無い。主人が奴隷たちに下す命令は、かれらの言葉がわかる「高等華人」の通訳を通して、あるいは、安南や印度の巡査が握っている棍棒を通して、実行される。

公園の入口の「華人と犬は入るべからず」の標札は取り払われはしたが、情況は昔と少しも変わら無い。苦力たちはかつて公園の中に現われたことがない。同様に、中国人しか乗らない電車の三等車両の中でさえ、かつて苦力たちを見かけたことはなかった。上海がいかに文明化され、現代化された都市になっても、苦力たちは依然として、原始的生活を送っているのだ。白昼、苦力たちは人力車を引くか、重い貨物を運搬しているが、このような仕事は主人公たちの国家では機械か、牛馬でしか、やらないものである。苦力たちの家屋は破れた草ぶきで、唯、夜かれらが死んだように眠るためか、そのまま死んでしまうためかだけに使うものである。苦力たちの顔は日に焼けて、真つ黒だが、健康的な色ではない。苦力たちは主人公の言葉がわからないばかりでなく、自国の文字すら、読むことも、書くこともできない。だから主人公が「イエス」と言えば「殴打」だと思い、「ノー」と言えば「刑務所」行きと思ってしまう。苦力たちは「イエス」や「ノー」すらもわからないのである。生きていようが、死んでいようが、誰も苦力たちを人間と見なさない。苦力たちが路上で餓死しようと、病死しようと、熱射病で死のうと——これは決して、無い訳ではない——人びとはかれらの屍体を飼主のいない犬のように運び出すだけである。

ともかく、上海は特別の町で、多くの鮮明な特色がある。例えば、ここは多民族の展覧会がなされているようで、それぞれの民族が各自の生活 방식으로暮している。上半身裸の苦力と豪華な摩天樓群という

結合体を除いては、上海、この典型的な、半植民地中国の都市の本質をより雄弁に説明できるものは、外にはないだろう。

私は上海が好きになれない。上海は私に、バラバラに解剖された体を思い出させ、このような想像は苦痛であつた。

二階に閉じこめられて

劉仁の友人の家で数日過ごしたのち、私たちは劉仁が東京で知り合つた夫婦と一緒に、フランス租界で二間の部屋を借りた。この二間は出入口がいか所で、その夫婦は前の部屋に住んで、日本人の私が未知の人に出合う不愉快なことがおこらないようにしてくれた。

私たちの部屋は唯一つしか窓がなく、大変暗く、家具もない。壁も以前は白かつただろうが、今では灰黄色に変色してしまつている。部屋にはただ二つの大箱と、一つの旅行鞆と、一台のタイプライター、それにベッド。がらんとして、粗末で、他人の部屋のように、親しみがなかつた。

「劉先生の奥様はマレー生まれで、此の度、初めて帰国した。奥様の実家は未だマレーにあつて、マレー語——エスペラントを指す——しか話せない」ということに、劉仁とあの夫婦で打ち合せをした。私のような者にとつては、ここがフランス租界で、東京でなかつたのは運が良かった。ここでは、他人の身の上や、経歴には興味を持たない。家主も隣家の人も巡査もみなそうである。

私の総てが、皆第一歩から始まつた。前の部屋の奥さんが私の先生である。毎日朝早く、彼女は街に野菜を買いに出かけ、帰つてくると御飯を作る。私は見習いとして食後に食器を洗う。火を起こすのは直ぐ覚えた。——現代化された上海でも、大部分の中国住民たちにはガスさえ未だない——。次に御飯

を作ることを見た。料理は極く簡単で、金を節約するために、昼飯と夕飯しか食べなかった。私たちが作ったのは当然「中国料理」であるが、これは世界的に有名な、あの中国料理ではなく、大豆油と塩で安い野菜を炒め、時には小さい肉切れを加えるだけのものであった。

皆は劉仁を、洋館に住み中国料理を食べ、そして日本の奥様を持つ「世界一の幸せな男」とひやかした。いやはや、彼の三つの宝は全くの「まやかし物」であろうとは。このかわいそうな幸運児は友人と新しく出来た時事パンフレットを出す出版社に勤めた。その出版社の責任者は日本から帰国したばかりの有名な新聞記者袁珠であった。袁珠は旅行の途中たまたま劉仁と同じ船室であった。彼は背が低く、太っていた。身長こそ高くないが、全身に力が漲っているようであった。事実、彼は確かに聡明、有能、円滑、機敏であった。発表する文章には、進歩的傾向があつたが、誰も、彼の思想、年齢をはつきりとは知らなかった。ある人は彼を共産党のシンパだと言うし、ある人たちの見方は全く正反対であった。上海陥落後も彼は上海に留つた。ある人は彼が地下工作にたずさわつていると言い、ある人は彼を罵り、前々から敵と連絡をとつていたと非難した。私たちは最後に、日本の新聞で、彼が上海傀儡政権で重要なポストについていることを知った。今日に至るもまだ彼が普通の漢奸であると信じない人がいる。本当に謎の人物であった。私も彼とは何回か会つてゐるが、日本語が非常に達者であつた。

上海事変後、出版社はパトロンを失つて解散した。彼は私に会いにきたが、その時家には私が一人きりであつた。彼は前もつてそれを知つていたのかもしれない。彼は黒眼鏡をかけ、中国服を着て、とても不自然であつた。雑談中に、彼は殊更に自然らしく、私の家は何処にあるのかとか、事情はどうかとか、劉仁は親戚が東京にいるのか等を尋ねてきた。私も彼が少し怪しくなつたので、それとなく、言葉を濁して答えておいた。これが私たちの最後の面会であつた。

前の部屋の奥さんは職業がなく、いつも、なんやかんやでよく外出していた。その間、私は家の中で、中国語やエスペ란トの書を読むか又は家主の二人の女の子と遊んでいた。後になって知ったことだが、家主は曾て長崎に何年か住んだことがあって、そこで日本人の妻を娶り、すでに二人の男の子がいる。おかしなことに、家主は応接間の目立つところに、亡くなった日本人の妻の大きな写真をかけていた。後刻——もちろん私たちが出たあとで——彼が「小漢奸」として、「仕事の場合」から帰る路上で殺されたと聞いた。私の二人のチビ友達は十一歳か十二歳位で、一人は日本人の妻が産んだ女の子、もう一人は家主の親戚の子であったが、両親はすでに亡い。二人は不幸な子どもであった。だから言葉があまり通じなかったにもかかわらず、二人はすぐ、私の仲良しになった。この小さい混血児は母親については何一つ知らなかったし、言いたくもなかったようであった。一回私は偶然に、彼女が母親の写真をじつと見つめているのを見た。その時、部屋には誰もいなかった。彼女は、継母はお父さんがいない時はいつも、彼女を「日本鬼子」と苛めると言っていた。

私の当面の重要事は早く環境に順応し、言葉を学ぶことであった。言い換えれば「中国人になる」とであった。そうでないと、上海に、いや、この小さいフランス租界に一生隠れていなければならぬ。考えてもみよ。もしあなたが、突然聾か啞になった時にはどんな思いがするだろうか。周りの人びとはいつものように活躍しているが、その中であなたは孤独で、周りの人びとのことがわからず、周りの人びとも又あなたのことがわからない……。

このような、一時的な異邦人の苦しみをなめることは覚悟していたと私は信ずるが、感情がいつも理性に従って行くとは限らない。特に、友人たちの中に居る時に、異邦人の思いを深刻に強烈に感じた。友人たちが談論風発する、私は緊張して、奔流のように喋る言葉を、なんとかわかろうとする。私はすつ

かり疲れ果てて、もう聞こうとも思わなくなってしまう。私は頭を垂れ、下をみつめ、心をじっと閉ざしてしまふ。友人たちと一緒に何かのことで笑ったり、興奮したりしている劉仁でさえ、私にとつてはまるで別人のように理解できなくなり、私の夫でなく、見も知らない遙か遠くの他人になってしまう。

二か月目の中頃、昼飯を食べる時、友人夫婦と劉仁が相談していた。「日も長くなつたし、食事も一日二回では足りないね」「そうだね。今日の午前中なんか腹が減つて困つたよ」「朝めしも食べようか」「パンがいいわ」「いや、パンは高過ぎるから、粥でも煮て食べよう」

「聞いてわかつたわ」私は子どものように大きな声で言つて、皆の言つた言葉を繰り返した。「その通り」皆は声を上げて笑つた。

私たちの経済状態が緊迫していたので、パンも、粥も、とうとう食べられなかつたが、しかし、それでも。私が初めて、一字一句、彼等の話が聞き取れたことは本当にうれしかった。

中国に来る前、私はある進歩的文学雑誌の編集者に、上海から報道か訳稿を送る約束をしていた。この約束は直ぐには果たせないで、唯、「花はどのように咲くか」の報道文学一編を翻訳しただけであつた。この作品は西安事変の前夜を書いたもので、作者は、この時代を画するような歴史劇の中で、一主役を演じた張学良將軍の軍隊に勤めていた人のようであつた。この作品を東京では相当大きい月刊の『日本評論』に中国名のペンネームで寄稿した。何週間かの後、私はその訳文の登載された雑誌と五十元の小切手及び編集長室伏高信からの手紙を受取つた。室伏は私を中国の青年と思ひ、今後も同じような訳稿を続けて寄稿するように言つてよこした。八月十二日、劉仁は日本銀行に行つて、原稿料を引き出してきた。次の日、日本軍隊は上海市を砲撃した。もし、一日おくれでいたら、取り損ねてしまふところだ

あつた。この時の五十元は、これ以後のより苦しい時に大変役に立つた。

中国に来ての初めの数か月は、ひどくゆつくりと過ぎ、私にとつては新しい生活であるが、平凡で、往々退屈な日々であつた。外国の観光客はよく街をぶらつくが、彼等は大会に漂う小船のように、一人の知人にも会わない。私にはこんな自由の楽しみすらもない。上海の有名な歓楽街も、私のように隠れ住んでいる貧乏人には別の世界である。私は現代生活と隔離され、また土にさえ触れることができない。私は二階に住んでいて、花壇もなければ、一鉢の花さえも持たない。時たま私は木造の床からアスファルトの路上に出て友人を訪ねたり、散歩したりして、又、この味気ない、薄暗い二階の部屋に戻ってくる。私はもうあの軟らかい、湿つた土がどんなに気持ちいいかを忘れてしまった。もし、私がエスペランティストでなく、また周りにエスペラント関係の人びとがいなかったら、この当時の私の生活はもつと無味乾燥で、息がつまつたものであつたに違いない。

エスペラントの旗の下で

最初の週のある日、二人の客が私たちのドアをノックした。一人は堂々と胸を張り、大股に歩いて入ってきた。もう一人はちょこちょこ小股に、体をゆすりながら入ってきた。初めの人は背が高く、肩幅も広く、強い近視で、いつも、一定方向を見ているようで、話をする時も銅像みたいだつた。もう一人は普通の身長だが、見かけは低く肩幅も狭く、両眼をキョロキョロさせ、黙っている時でさえ、微笑を浮かべている。この外観の全く相反する二人の青年は、私には聞いてもわからない中国語や片言の日本語で、私を煩わすことはなかつた。二人とも私と同じエスペランティストであつた。

「あなたはこの東京の女同志を知っていますか」——葉籟士という背の高い青年が、ポケットから手帳

を取り出しながら言った。「私はかつて、彼女と手紙をやりとりしたことがあるのですが」

「あらー」私は声を上げた。私の見た手帳には、私の日本の住所と氏名が書かれているではないか。「彼女のことはよく知っています」そして、ちょっと間を置いて言った。「その人は私です」

皆はよろこんで歓声を上げた。

私は数年前、上海で出版していた『世界』に寄稿し、多分その編集者だろうという人と一、二回手紙をやり取りしたことがある。その同志が今、私と話をしているのだ。

話の中でわかったことは、葉籟士は当時北平にいた劉仁とも手紙をやり取りした間柄であったことだ。葉籟士は中国のエスペラントとローマ字運動の指導者の一人で、私たち二人の新しい友達ではなく、旧知の間であった。その後、戦争中、私たちが最も困難な時に、葉籟士は忘れ得ない、感激にたえない援助者であり、いろいろな意味での鼓舞者でもあった。

「私を日本人に似ていると言う人があるが、あなたのような、本当の日本人から見ても、どうですか」。張企程というもう一人の青年が、背をかかめて、日本式のお辞儀をした。

彼は当時ある技術部門で働いていた。戦争の二年目には、最も進歩的な新聞社の記者になっていたが、その後、シンガポールに行った。日本軍の魔の手がシンガポールにも伸びた時、日本人と誤認され、英国当局に一度逮捕された。シンガポール陥落後、彼の行方はあまりよくわからない。張企程は安全に危機を脱して、現在は上海付近で活躍していると言う人もいるらしいが、どうか、そうであつて欲しい。

葉籟士と張企程のニックネームは牛と鼠だが、私の第一印象とは全く違った人だった。ここで私が指摘しなければならぬことは、厳肅な葉籟士は往々にしてユーモアがあり、冗談の多い張企程が反って厳肅で、仕事の時はエネルギーに満ちていた。当時、二人ともまだ三十歳未満であった。

元気で若く、仕事がまじめ、思想が進歩的——これが大多数の中国エスペランティストの共通点であった。私は、白髪の老人に会ったことがなく、また暇を持て余し、歌を唄い、若い娘を追いかけまわすプレーボーイや異端分子——ショービニストに会ったこともなかった。日本と違って、ここでは話をして相手を思想や社会的地位を推察する必要はない。皆、一様に同志であり友人である。

上海世界語者協会(Sanhaja Esperantista Ligo)という、この全中国エスペラント運動の中心は、英國租界のある小さな横町にあった。一階はエスペラントの本屋、僅かに二、三の本棚に本があるだけ。二階は会議室であった。後ろの中二階には、上海世界語者協会の責任者楽嘉煊と彼の妻及び三人の子どもが住んでいた。一番上の男の子は十歳で、少しエスペラントが話せた。あなたは楽嘉煊を中年の人と思うかもしれないが、実は三十歳になったばかりで、同志たちと同じように若かった。楽嘉煊一家が住み込んでいるので、上海世界語者協会は私たちに親しみ暖かい感じを与えた。単なる事務所のようなところではなかった。然し、この愛すべき家庭も、その他の多くの家庭と同じように、戦争のために離れ離れになってしまわなければならなかった。今、楽嘉煊は前と同じように私たちと共に、この自由中国の心臓部で、楽しそうに、エスペラント運動を続けているが、妻と子どもたちははるか遠くにある占領区の故郷にいる。その十何歳かになった子どもは、最も勇敢な抗日軍隊に参加し、某戦区で戦っている。

七月十五日、上海世界語者協会は、ある学校で世界語五十年記念会を催した。三百余名の新旧のエスペランティストが一堂に会した。広州、北平、その他の都市の代表も出席し、真面目に過去の仕事を総括し、熱心に、今後の計画を討議した。記念会は七・七事変(蘆溝橋事件)後一週間目に開かれたのである。外界の不安動揺は、このエスペラント会場にも影響を与えた。事態がどのように発展するか、皆目見当がつかなかった。決定された計画が果たして実現できるであろうか。然し、誰も中国人であるとい

うことと、エスペランティストであるということの間に何の矛盾も感じなかった。中国では、エスペラントを世界向けの科学報告や国際貿易や外国の観光客の誘致に使っていない。勿論、ファシストの宣伝のためにも絶対に使わない。エスペランティストの理想と中国人の理想は一致している。両方とも、異民族の圧迫を受けたくないし、他民族を圧迫しようともしない。中国エスペランティストは、早くから「中国解放のために、エスペラントを使おう」と書いた旗を高く掲げていた。

会場には『希望（ラ・エスベロ）』と『黎明（ラ・タキージョ）』のエスペラントの歌声が鳴り響き、同じように、これら三百人の口から共通の激情がほとばしり出た。

立て、奴隷になりたくなければ、

我等の血と肉で、

新しい長城を築き上げよう。

故郷を奪還せよ、故郷を奪還せよ、

日本帝国主義打倒。

東北は我等のものだ。（義勇軍行進曲「現中華人民共和国国歌」）

記念会は一致団結と熱情あふるる雰囲気の中に終わった。みんなはお互いに堅く堅く握手をし、熱烈に別れをつげた。七・七事変が起きる前は、二、三日経てば又会えた。おそくとも数か月後には又会えた。そう、少なくとも十二月十五日のザメンホフの誕生日には、みんなはエスペラントの旗の下に集まることができた。しかし今度は……何年も私たちは会うことができないことを誰が予想していただろうか。大会後、二、三か月で皆は離れ離れになってしまった。一グループは政府に従って漢口に行き、その後

重慶に行った。ある者は武器を取って軍隊あるいは遊撃隊に加わった。ある者は西北延安に赴き、緑の旗の下ではなく紅旗の下に集った。別のグループは自分の故郷に帰り、あるいはその地方の都市で仕事をし、生計を立てた。その他の人はそのまま上海に残った。皆は何時再び会うことができるのであろうか。恐らく、何人かの者とはもう二度と握手することができないかもしれない。

……その後彼等は民族のために、その若い命を捧げた。然し、汪精衛傀儡政府の支配下では、この三百人の中の誰も、一時期でさえもゆつたりとした日を送れないであろう。全中国のエスペランティストにとつても、そのような日は絶対に有り得ないのだ。

三十名のエスペランティストを集めることすら困難な今日、私はあの記念日のことを思い出し、気持ちには複雑であつた。彼等の大多数を知らなかつたにもかかわらず、ずっと彼等がなつかしかつた。

安全地帯より戦争を見る

怒りの声が響き渡つた

きらめく灯火の下で、白蘭ブランデーの香りに陶醉し、女性の腰を引き寄せて「あー、わがバラの花よ」とか「僕は君が好き。可愛い小鳩よ」とか唱っている。然し、別の悲愴で激動のメロディーは、この頹廢的音楽を圧倒して、街々に反響し、人心に滲み込んでいる。

四月の夜、そよ風が吹き渡り、遊子の胸中に甘い郷愁の思いがめげえ始めた。上海に逃げて来た東北

三省の流亡の民は、きつと特別に心を傷めているのだろう。

暴虐な日軍、焼殺、掠奪す。

妻子は離散、父母は死ぬ。

我等の怒り火は空高く燃え上がり、

日夜、故郷に思いを馳せる。(打回老家去)

しっかりとした、勇ましい歌声が、それに続く。

故郷を奪回せよ、故郷を奪回せよ。

日本帝国主義打倒！

東北は我等のものだ。(義勇軍行進曲)

五月が来た。フランス租界の静かな路の両側のアカシヤは緑が滴るようで、雪のように白い花びらからは芳香を放っている。然し、中国人民の心の中では、花は赤い。まさに血の赤さである。

五月の花は原野一面に咲き、

鮮やかな花は志士の血の上を掩う。

この瀕死の民族を救うために、

彼等は頑強に戦い続けた。(五月的鮮花)

唱う者は東北から来た者にとどまらない。より多くの中国人は満州事変が単なる過ぎ去った事件だけではないことを知っている。これは敵の中国侵略の第一歩で、明日にでも同じような「事変」が、彼等

の頭上に降りかかってくるおそれがあるのだ。この現実感あるメロデーが流れ、隅から隅へ飛び、やがて上海全域に拡がっていった。

去年十二月十二日に発生した西安事変は、政府の中の親日勢力に決定的な打撃を与えた。総体的に言えば、国家の政治に対して一定の軌道に乗らせる役割を果たした。しかし光明は決して容易ではないし、すぐに到来することもありえない。中国を閉じこめた暗黒の時期があまりにも長かったのだ。

六月のある日、共同租界の街道の気配が、いつもと少し違っていた。人びとは二、三人づつ、あるいは三人、五人と群れを作って歩いている。何処から来たかわからないが、どこか一定の方向に歩いてゆくようであった。彼等はまるで自然に、偶然に、集まったように、何本かの細い流れが、最後に一本の大きな河になった。その大河は、はばむことのできない流れとなつて、各街道を突き抜け、その歌声は雷のように鳴り響いた。

我等の血と肉で、

我等の新しい長城を築こう。

中華民族の危機存亡の時が来た。

追いつめられた一人ひとりが

最後の叫び声をあげよう。

起て！ 起て！ 起て！（義勇軍行進曲）

人びとは歩きつづけながら、叫んだ。「日本帝国主義打倒！」「我等の領袖を釈放せよ！」

これは「救国会七君子」の釈放要求のデモ行進であった。彼等男六人（沈鈞儒・章乃器・鄒韜奮・玉造時・

李公樸・沙千里、女一人（史良）は共産黨員でもなく、過激派でもなかった。彼等は資産階級の自由主義者であった。彼等の職業は、作家、弁護士や銀行の経営者で、皆、比較的高い社会的地位にあった。

彼等は上海で人民抗日統一戦線を結成し、指導したという理由だけで投獄されたのであった。彼等がやったことこそ、正に人民の切実な希望であったのに……。

デモ隊が進むにつれて、刻々と、それは大きくなった。彼等は歌を唱い、喊声を上げた。その声も、以前は分散的で、押さえられていた声だったが、今では一斉に雷鳴のようにほとばしり出た。

私はこのデモ隊に加わって、女の友人たちと、しっかりと腕を組んだ。私はそのデモ隊の中の唯一人の外国人であり、唯一人の日本人であった。しかし、私はどうして参加しないでいられようか。私にも中国の愛国者の釈放を要求する権利と義務があるのだ。私の心臓は彼等の心臓と一緒に脈打っていて、血は彼等の血と同じように沸き立っている。ただ歌だけは彼等についてゆけないが。それでも、私は唇を動かした。

我等万人一心

敵の砲火を冒して前進！

敵の砲火を冒して前進！

前進！ 前進！

デモ隊は警察の銃剣をも顧みず、勇猛邁進した。デモに参加した大衆は、西安事変の成果がまだ十分に成熟していないことを体験した。

戦争は勃発した、しかし不思議ではない

七月七日。砲声が轟き渡り、古都北平城外の静かな空気を打ち破った。上海では皆びっくりした。事態は更に拡大するのか、それとも、直ぐ停止するのか。日本側は、いつものように事態の不拡大を口先だけで言っている。上海市民は戦火の一時的停止で、再び中国の自由が部分的に灰燼に埋もれてしまふことを望んではいない。しかし、それと同時に、頭上に災難が直接降りかかるのも恐れていた。

上海市民の希望と恐れは両方とも起きた。

八月十三日は驚天動地の日であり、流血河を成すの日であった。戦争は突然のようであったが、本当に予想がつかなかったことなのだろうか。いや、そうではない。戦争は勃発の日には発生したのではない。有名な『戦争論』の作者、カール・フォン・クラウゼウィツ (Karl von Clausewitz) の説のように、戦争とは政治の別の手段の継続に過ぎない。日本のファシストがよく、中国人は思想から行動まで、すべて日本に反対するので、徹底的に懲罰しないわけにはゆかないとわめきたてている。しかし、なまなましい事実が雄弁に彼等を反駁している。数年前に発生した満州事変をもうすでに忘れてしまったと言うのであろうか。忘れはしない。私たちはもう少し遠くをはっきりと見極めなければならない。この六十年近くの苦しい体験が中国人の眼を見開かせることができなくても言うのであろうか。

「墨で書いた虚言は血で書いた事実を覆い隠すことはできない」

「血の債務は血で償わなければならない」

戦争はとうとう勃発したが、決して納得できないことではない。それは早晩起きることであり、現に起きてしまったのだ。

いずこへ往くか

「ここに日本の女性が住んでいるそうですが」と、ある日、日本語を話す一人の女が突然入ってきた。劉仁とその場に居合わせた友人たちは、私に目配せして、あわてて外へ出た。

「おりません、そのような人はおりません、きつと聞き違いでしょう」

「嘘をつくのはよしなさい。私、知つてますよ」この女は声を高めたが、すぐその声を殺して、

「私はこの近くに住んでいるものです。この同じ路地に。上海にいるほとんどの日本人は皆日本に帰つてしまつたのです。明日、最後の船が日本に往くんですつて。私はこの船に乗りたいたのですが、一人では怖いのです。彼女は一緒に参りませんか——その声はもう懇願する調子になっていた。

「奥様、残念ですが、ここには日本の女性はおりません。あなた一人でその船に乗つてもかまわないでしょう。船に乗れば、沢山の日本の同胞に会えるでしょうから。さあ、お帰り下さい。ここでこれ以上お話しされても、よくないでしょうから」

この後、彼女は二度と私たちの前に顔を出さなかつたし、私たち自身も、二日後には移つてしまつた。私は彼女が帰国したかどうかは知らないが、他の多くの「日本人妻」と同じように帰つたと思われる。同じような状況は一九三一年の「満州事変」と一九三二年の「第一次上海事変」の時にも起きていた。一時的な方便と安全のため、日本人妻たちは同じように夫と別れた。幸いにも、その時は僅か数か月で中国に戻り、夫のもとに帰ることができた。しかし今度はどうであろうか。万事が前と同じでも、彼女たちの生命は時代の風波にずつとおびやかされているのだ。夫婦の対面も思うがままにいかないだろう。日光が照り輝く素晴らしい日々にも、一種の不安と矛盾が彼女たちに暗い影を投げ掛けるであろう。

祖国！——なんと人をうっとりさせる言葉であろう。人びとはこう断言するであろう。彼女たちは私に比べて幸せだと。なぜなら彼女たちには帰るべき国があるから。私にはもう帰るべき国がない。その上、夫の国にも入ることができない。丁度双方とも捕えようとしている弱小な野兎が「中立地帯」をさまよい歩いているようである。

フランス租界が「安全地帯」になっているのは、私のような中国服を着た日本女性にとつてだけではない。早くも上海の閘北区が砲撃される前に、各種の品物を満載した多くの自動車が続々と入ってきた。その車を待っているのは、大体、狡賢い微笑を浮かべた家主たちで、その大部分は肥った白系ロシアの女たちであった。当時は、このような僑民(他国に居住する者)を保護したり、罰する法律がまだなかった。彼女たちにとっては、金銭が総てであった。彼女たちは自分勝手に高い家賃を吹っ掛け、以前から住んでいた人を追い出し、これら「高等難民」を歓迎した。

「奥様——ある日、丁度、私が洗濯していた時、白系ロシア人の家主がわざとらしく、「あなたは洗濯する人を雇わないのですか」と私に話しかけてきた。

「私は自分で洗います。暇で、時間を持て余していますから——私はこれしか答えようがなかった。

「今は、水の使用制限も厳しいし、水道料金も驚くほど上がりましたよ。もし、あなたが……」
これは口実だと、はつきりわかったが、どうしようもない。ある友人が急いで奥地に行ったので、私たちはその友人の部屋に住み込んだのだ。彼が出てから、この月はまだ十日も残っている。この月の部屋代は彼が全部払ってしまったであった。これは私たちには好都合であった。しかしこの家主は、前より高い部屋代を、この残りの一週間分として支払えと要求してきたのだ。確かに、これは理屈には合う。やむなく私たちはすぐ払った。

月末になった。白系ロシア人の家主の御機嫌を少しとるため、私たちは、ペチャンコになった財布から二十五元とり出して渡したが、中国人のマネージャーはお面をかぶったような仏頂づらをして、

「旦那が言うには、旦那の親戚が閩北から来ているので、旦那の考えでは……」

「お一同胞よ！」劉仁はマネージャーの肩をトンとたたいて、彼の手に一枚の紙幣を握らせ、

「国難の時期だ、そんなに、くそまじめにするなよ」

マネージャーはいったん中へ入ったが、すぐまた出てきて、私たちに右手の五本の指を突き出した。

五十元！ 神様、二十五元は私たち、この失業中の夫婦にとつては大変な金額なのだ。私たちは全部で百元しか持っていない。その半分が、八月十三日の前夜、東京から送られてきた原稿料なのであった。私たちは住む部屋が必要だが、それかと言って、パンが無くていいのだろうか……。

ああ、これこそ、本当に吸血鬼だ。しかし私たちはあえて彼らと喧嘩しなかった。まず、生きなければならぬし、生きていくためには、私たちは今、パンや部屋よりも、もっと重要なものを持ち続けなければならなかった。

私たちは部屋を探しに出かけた。部屋を探すことなぞ、絶対に不可能なことは、はっきりとわかっていた。私たちの失望は鉛のように、重く心にのしかかっていた。外は灰色の霧雨が降っていた。私たちは当てもなく、街を往来した。前へ進んだり、曲がったり、また戻ったりした。街道という街道は避難民でいっぱいである。彼等は、その名の通りの難民である。あの「高等難民」たちは、もう、とつくのとうに住心地のよい家を見つけた。今、その「高等難民」たちは西洋料理に舌鼓を打ち、コーヒーを飲み、映画館に入り、あるいはダンスホールで踊っている。私たちが見た通り、彼等は自動車で必需品やその他の物を運んできている。しかし、そのほかの人びとは寝具と衣服を除いては、無一物になった。

ある者は、きれいさっぱりと無一物になり、持っている物と言えば、自分の二本の足だけになってしまった。裸足の中年の婦人が呆然として、空の醤油瓶だけを抱いて歩いている。何故、敵の砲火の中から空の醤油瓶を引つたかのように取つて、またとない宝物を手に入れたようにしつかりと抱いているのか、彼女自身もわからないに違いない。彼等はそれでもまだ幸福だと言える。安全地帯にいられるのだから。無数の人が、既に閉められた租界の鉄扉の外で大声で泣き叫び、歩哨に、租界に入れてくれるよう頼んでいる。フランス租界はまだ中層、下層の避難民の安全地帯である。ここには、鉄砲玉も爆弾も彼等の頭上には落ちてこない。しかし、ここは果たして彼等の安全地帯なのだろうか。これらの疲労困憊した難民たちは半死半生で路傍に横たわっている。そうでない人たちは歩き続けている。歩くといつても、どこに行つたらいいのかわからない。そして、私たちもまたその仲間なのだ……。

「御親切な奥様、尊敬する奥様」——子どもたちの痩せ細った胼胝たぶただらけの手が何度も、私に差し伸べられた。「お恵み下さい、お恵み下さい。私はもう三日も食べていないのです」

私はひそかに苦笑した。私を裕福な女と思つたのは無理もない、私は新しい衣服を着ていたのだから（私にどうして中古の中国服があり得ようか）。私たちは朝から、ずーっと食事も取っていないし、今晚泊まる所さえないことを彼等はどうしてわかるう。難民と私たちの間に何の違いがあるというのだろうか。一種の恐怖が、時々私の全身を襲つた。もし、私が日本人だと見破られたら……。今、彼等に日本人の中から敵と味方を区別する理性を求めるのは無理である。私は非常に緊張して歩き、できるだけ中国の都会の女のように装つた。

灰色のこぬか雨が降る、降る。

時は八月中旬、しかしもう涼しい感じである。彼等も私たちも、心の中はもつともつと寒々としてい

たに違いない。私たちも難民と一緒に、街を放浪、徘徊した。目的も希望もなく、疲れ切っていたが、私の心の中の赤い炎は、まだまだ燃え切つてはいない。この炎は血を流し、涙を流すことによって更に現実的になり、彼等の心の中に、より以上に熱烈に燃えつづけることであろう。

夕方、私たちは上海世界語者協会に着いた。ザメンホフの写真が、壁から、眼鏡越しに、穏やかに、哀れむように、私たちを見下ろしている。しかしザメンホフも私たちこの二人の放浪者に何の役にも立つことはできない。彼自身も第一次世界大戦の砲火で、悲惨にも死んでしまったのだ。しかし、私たちの救いの星は今生きている彼の信徒の中にいた。その人こそ、詩人徐雉同志であった。私たちは初めての出合いであったが、二間部屋があるので、その一間をすぐ私たちの住居にしたいと言ってくれた。

地獄の叫喚が祖界をとりかこむ

あるメキシコの作家が、曾て、日本人は悪魔の首領だと書いたことがある。ある人は日本の兵士は野獣のようだと言うし、ある人は日本人の野蛮さは、はるかに野獣以上であると主張している。

私は、この意見に対して絶対に抗議をしない。このような抗議なぞは徒労のように思う。なぜなら、彼等はファシスト侵略軍なのだ。これだけで充分である。彼等から何か好い事を期待できるわけがない。白昼のベランダで、私たちは二つの活火山を見た。それは断えず大きな煙を噴き上げ、青空を灰黒く染めた。夜は夜空を赤く染めて、怖いようであった。長い長い炎は真つ直ぐに上に昇った。

それは火山ではなく、上海の閘北と南市が燃えているのであった。日本人は焼夷弾を空から投下し、地上の一般居住地区にはガソリンを撒いた。日本人は道路を封鎖し、機関銃で命からがら逃げる市民を掃射した。

辺り一面の煙が呼吸に喘ぐ人びとを窒息させ、長い長い炎の舌が血を流して、辛うじて生き残った人びとを舐めつくした。

「九月八日、日本空軍が松江駅を爆撃した。日本空軍は十両編成の難民移送列車に飛行機八機を使い、五十分の包囲攻撃を加え、十八個の大型爆弾を投下した。飛行機が列車の上を旋回している時には、車両に満載されていた難民達はまだどんな災難が起こるか思い至らなかった。しかしそれが始まったのだ。爆弾が投下され、後部四両が爆破された。血や肉が飛び散り、泣き叫ぶ声が一斉に起こった。まだ爆破されていない車両から人々は飛び出した。続いて一発の爆弾が前の一車両に命中した。列車の中にはもう生きている人はいなくなった。駅の周辺は慌てふためいて、逃げまどう人々で一杯であった。飛行機は少しも猶予せず難民達を追撃し、低空で飛んでは、機銃掃射をした。人間の足は飛行機より速いはずがない。難民達はばたばたと倒れた。最後の一群が慌てて畑の中に飛び込むと、それを追いかけて機銃の一斉掃射を加えた。ごく一部の人達だけが、大きな深い穴に隠れて、辛うじて生き延びたことをよろこんだ。しかし、この様子を飛行士に見つかつた。飛行士は連続三発の爆弾を投下した。爆弾は全部穴に命中し、一瞬の間に、そこにいた人々を地下に埋めてしまった」(巴金の山川均への手紙より引用)

誰の罪ぞ

侵略者は中国軍隊がこんなに徹底抗戦するとは予想しなかつたであろう。中国軍隊は戦っている。そして戦い続けた。しかし、すでに長期間準備した敵の近代的な武器の装備に打ち勝つのは困難である。

とうとう、早晚来たるべきその日が遂に來た。十月二十七日、中国軍隊は上海撤退。三か月の時間は

長くはない。そして、抗戦はまだまだ、これから続けられようとしている。

上海につづいて、北平と天津も敵の手に陥ったが、中国は更に抵抗を続ける。一種の象徴のごとく、二日目に蘇州河畔の四行倉庫の上に突然青天白日旗（中華民国の旗）が挙げられた。そこには撤退しようとする中国軍人たちが守備を固めていた。へんぼんと翻る旗は市民の暗い心を明るくした。この一条の光明もすぐに消え失せてしまったが、大勢の人びとが河岸に行つて、対岸のそれを眺めた。この河は租界と占領地帯を分けている。

Cの気持も他の人びとと変わらない。みんなと同じように、彼も友人と共に、その旗をよく見ようと、そのこの民家のベランダに上がった。彼は背後で人びとがヒソヒソ話をしているのに全く気付かなかった。「あれ、こいつ怪しいぞ。見ろ、ヤクザがよく着る黒の背広を着ている」

話がつぎつぎとさきやきから大声になり、それが広がっていった。彼がベランダを降りる時には、出口には既に沢山の人が集まっていた。何人かが彼に質問し、彼は答えたが、然し実際のところ、彼等は彼の言う事がわからなかったし、彼も又彼等の言う事がわからなかった。彼は遠い東北地区の間で、彼と一緒にいた友人も上海語が話せなかったから。

「漢奸！」

人びとは彼を指さして叫んだ。彼等二人は一生懸命弁解したが、無駄であった。

「この漢奸をなぐれ！」

「この漢奸をぶち殺せ！」

彼の友人が近くの巡査を呼んできたが、時既におそく、Cの体は地上で、全身血だらけになって、息絶えていた。このような場合、こんなに大勢の群衆を前にして、巡査は手も足も出なかった。

今までの一生の中で、思いもかけない精神的打撃を受けてきたであろう彼が、こんなに早くも、出し抜きの一撃で死んでしまったのだ。しかし私たちは友人として、彼を殺した直接の凶手に対して仇を打つことはできないし、打とうとも思っていない。もし、彼が今、別の世界で生きているとすれば、きっとなぐられてゆがんだ顔にくやしそうな苦笑を浮かべて、そこから、私たちを見ているだろう。

今は冬だ

砲撃も爆撃も止むと、上海は厳寒と沈黙の中に沈んでいった。骨を刺すような風。その風は、あの鮮血が乾く間もなく凍りついてしまったあの地方から吹いてきたのではないだろうか。避難者は喪家の犬のように黒々と押し合い、へし合い、街道という街道の両側に集まっている。どんな物でも値段は全部恐ろしいほど高くなった。とりわけ野菜は以前に比べて二、三倍高くなった。肉と米は殆ど買えない。沢山の在庫がある米屋の店員たちは冷ややかに「私たちは売りません」と言う。私たちはいつも米屋が店先に「今日は米があります」と貼り紙して、店を閉めているのを見ている。人びとは朝早くから米屋の店先に押し寄せる。全部の人がボロをまとい、手に袋か籠を持っている。彼等は大声を上げ、押し合いへし合いし、女、子どもは泣き叫ぶ。巡査は高い所から避難者の頭上に棍棒を振り回す。何時米を売るのが彼等もわからない。

ついこの間まで通行人を引きつけていた抗日の壁新聞やポスターが、すっかり見えなくなった。二社の中国語新聞が停刊せざるを得なくなり、他の数社も同じような運命を辿るかもしれない。どんなに小さな反日行動や反日言論もすべて厳しく禁止された。戦前・戦時にかけて、情熱的に活動した多くの文化人は全部、漢口やその他の地方に行ってしまった。ある者は雨あられと降る弾丸をくぐって……。

首都南京は危険極まりない。侵略者は上海の租界に向けて魔手を伸ばし始めている。「安全地帯」の意味もいよいよ限界にきた。そしていつ、食糧も自由もなくなり、ここで死ななければならなくなるのか。退去は既に久しく、私たちの避けられない問題になっていた。然し、どこへ、どのようにして行くのか。私たちにとっては、どの道も皆極めて狭く、危険は一日一日と切迫していた。友人たちと相談した結果、最終的に南方に退避することに決定した。いやもつと正確に言えば、私たちは、香港と広州を回り漢口に行くことをあこがれていた。ああ、もし漢口に辿りつけたらどんなにかいいだろう。たとえ汽車から漢口駅に降りた途端に捕えられてもかまわない。然し——途中で何事も起こらないだろうか。上海で初めの数か月を私たちと同居した友人夫婦が版画家（陳煙橋）とその夫人を紹介してくれた。二人は私たちと共に香港に行き、なんとか私たちに協力してくれることに承諾した。香港で使う言葉は広東語で、外省人にとっては広東語はまるで外国語のようである。この二人は広東の人であった。

十一月二十六日。

私たちの人力車は街をゆっくりと走り、灯火の奇麗な場所をちよつと走ったが、派手に着飾った男や女が若干散歩しているのを見かけた。真つ暗な貧民地区を少し走ると、そこでは無数の避難民がまるでポロ服を被せた死体のように横たわっていた。夜の凜冽な寒風は鋭く私たちの顔や頬を刺す。私の後ろには劉仁がおり、前には体格の立派な、肩幅も広い葉籟士がいる。葉籟士はじつと人力車に座って、身じろぎもしない。彼は私たちの乗船を見送って、その後漢口に行くことになっている。一週間も前に、すでに最後の銅銭まで使い果たしてしまった私たちは彼なしでどうして外へ出ることができよう。彼は多く語らず、私たちのために一切を手配してくれた。私たちは「ありがたい」さえも彼に言わないでし

まった。このような状況下でどんな話ができればよいか。

埠頭も、船上も、人間と色々な荷物で一杯になっていた。私たちはあまり大きくない船室に入れられた。窓が一つ、小さい灯りが一つあるだけで、中は薄暗く、息が詰まりそう。私は自分のベッドに座った。座っていても頭はすぐ上につかえた。上のベッドには見も知らぬ人が横になっている。

私は「絶対の自由なぞはない。一つの自由を得ようとするには、別の不自由を忍ばなければならぬ」と自らを慰めた。

劉仁は私の傍に横になった。彼は背が高いので、脚をゆっくり伸ばすこともならない。彼は私のために、どれほど苦労したことか。これは、彼が東京にいた時から予想していたことである。彼はいつも、そんな事は気にしないと云っていた。然し彼の苦しみと、私のための犠牲はいつまで続くのであろうか。この苦しみと犠牲は何の成果もなく、枯れ果ててしまうことはなからうか。

波の音が幽かに聞こえる。然し耳に聞こえるのではない。もし私がそうでなければ……。

私は急いで、くだらぬ考えを打ち消した。歩くべき道は打ち碎かれ、そしてまた断えず造られ続いてゆく。——私たち夫婦の生活もまたこれと同じである。特に今、この外部の見えざる力がこんなにも強大な時には。

私の心は明るく、晴々とした。私は眼をじっと閉じて、真つ暗闇の中で、私たちの行く末を考えた。然し、それは霧のように唯ぼんやりと、霞んでいるだけであった。

もう今は冬だ。そして、それも未だ到来したばかりであった。

※「晩春の別れ」「上海にて」は、共に『戦う中国にて』（一九四五年五月、世界語函授学社刊）で発表。

中国の勝利は全アジアの明日へのカギである

——日本のエスペランティストへの手紙——

皆さん！

ほんとうに長い間ごぶさたしました。日本のきびしい検閲を思うと、自由に筆を走らせるのも、ついためらいがちになるのです。それに、この戦争が二か月半以上も私たちの交渉の道を閉ざしてしまいました。でも、もうこれ以上だまっていることはできません。なにか、力強い、そして複雑な思いが、私を動かすのです。しかし、何から書きはじめましょうか？

皆さん！ 何国民であろうとも、人間らしい心や澄んだ理性をもっているかぎり、みんな中国に同情をいだいています。私は畜生ではありませんし、また正義についても学びました。ですから、私の頭の中にはいつも一つの問題があります。「何をすればいいのか？」ということなのです。仲間たちのように、前線へ行くべきでしょうか、それとも女性の仲間たちのように、難民や傷兵のために働けばいいのでしょうか？ でも、できない相談です。私は中国語で話すことさえもロクにできない無力な女なのですから。みなさん、しかし、しあわせなことに、私はエスペランティストです。そうです。「しあわせなことに」と敢えていいます。日本帝国主義に反対するこの革命的闘争の中で、ささやかな働き場所を見つけることができたからです。いま、私たちは、私たちの言葉、エスペラントを、国際的な武器として、もつとも効果的に用いなければなりません。「エスペラントによる中国解放のために」というのは決して紙の上

のきれいごとではないのです。私にとつては『チニオ・フルラス』などの雑誌に協力することは、単に一人の外国のエスペランティストが、薄っぺらな雑誌を発行するために、貧しい技術を提供することだけを意味していいのです。私がペンをとるとき、おさえつけられた正義の血がおどり、野獣のような敵に対する怒りの炎が燃えあがるのです。私は中国人民とともにあります！ そのことに私は喜びを覚えるのです。

お望みならば、私を売国奴と呼んでくださつてもけっこうです。決しておそれません。他国を侵略するばかりか、罪のない難民の上にこの世の地獄を平然と作り出している人たちと同じ国民に属していることのほうを、私はより大きい恥としています。ほんとうの愛国心とは人類の進歩と対立するものでは決してありません。そうでなければ排外主義です。そして、なんと多くの排外主義者がこの戦争によって日本に生まれたことでしょうか。かつて良心的、進歩的、あるいはマルクス主義者とさえ自称していた知識人までが、反動的な軍国主義者や政治家のシリ馬にのつて、恥もなく「皇軍」の「正義」をはやしたてているのをみますと、私は怒りや吐き気をおさえきれないのです。知識層に相当大きな影響力をもつ評論家、室伏高信は、日本民族は新世界を創造する使命をになつており、いかなる妨害者もその前に亡びるほかはない、したがつて、いまの戦争は東洋の二大民族にとつての宿命である、と吹きまくつています。かつて科学的社会主義者であつた山川均^(註)は、中国軍の「鬼畜性」についての問題をもつともらしく持ち出し、中国人民を「鬼畜以上」とののしつています。……もう止みましょう。あなたたちのほうがずっとよくご承知のことですから。

ああ、皆さん、良心というものは、その最後の一かけらまで、かくも簡単に投げ捨てられるものでしょうか。皆さん、けれども、皆さんを信じています。あなたたちが、一歩たりともこんな連中に近づかな

いでいることは、まちがいないと思つてゐるのです。あなたたち、進歩的なエスペランティスト、ほんとうの国際主義者だけが、この戦争の意義と自分の行動の正しい方向とを、根本的に理解できるはずだからです。

日中両国民のあいだには、いかなる基本的な敵対関係も存在していません。歴史をひもといてごらんなさい。反対に、あらゆる面での親密な関係が、見出されるではありませんか。一九二一年の辛亥革命のときには、たくさんの日本人が隣国人民の解放のために、すすんで血を流しました。プロレタリアートの解放のために、数年前、両国の労働者がどんなに固く手を握りあつたことでしょうか。みなさん、私たちは東京でこの問題についてあんなに熱心によく語りあいましたね。そして、いつも、東洋の、ひいては世界のエスペラント運動を推し進める上での日中エスペランティストの協力について、真剣に論じあいましたね。私はハッキリ覚えています。昨年、春、私が日本をあとにしたことで、この問題はとりわけ現実のものになりました。しかし、その後、さまざまなこと——その最大のものは、日本の警察による弾圧ですが——実現を阻まれてきました。

皆さん、いまがそのときです。私たちはあなたたちの援助を切に望んでいます。中国人民はあらゆる協力者を必要としてゐるのです。これを放置することはできません。ほんとうに今日こそが長いあいだの有意義な計画を、もつとも直接的な、もつとも誠実な形で推し進める第一歩をふみ出す絶好の機会です。ほんの少しのためらいでも、あなたたちには何倍もの後悔を、そして、私たちには無念の思いを、引き起こすことでしょうか。それがおそろしいイバラの道であることは、私もよく見きわめてゐます。しかし、それが何でしょうか。政府の死をもつてするおどしにもかかわらず、反戦運動は日本のいたるところに、あるいは燃えあがり、あるいはくすぶつてゐるではありませんか。上海駐留の日本軍の

中できえ、きびしい軍律にもかかわらず、反戦ビラが張りめぐらされているのです！

皆さん、この戦争における中国の勝利は、中華民族だけではなく、日本をふくめた極東の全被圧迫人民の解放を意味します。それはまさに、全アジアの、全人類の明日へのカギなのです。皆さん、どこにためらうことがあるのですか？ 覚えていてください。この瞬間に何もしないことは許し得ない罪悪であることを。しかし、あなたたちの変わらない同志愛を最後まで信じている私には、もうこれ以上言うべきことはありません。

皆さん、この祖国の危機的段階において中国の兵士たちがどんなに英雄的に、そしてどんなに頑強に戦っていることでしょうか！ 私はしばしば高鳴る鼓動をおぼえ、涙ぐむことさえあるのです。もしも、あなたたちも親しく見ることができさえしたら……。それに引きかえ、哀れなのはわが祖国の兵士たちです。上海駐留の日本軍は、この一週間のあいだに一万二千人以上が戦死した、と新聞が報じています。そして、数千、また数千と、青年たちが絶え間なく送り込まれてくるのです。その中に、あなたたちのだれ彼がいないと保証することはできません。いいえ、思うだけでもソツとします。隣国の抑圧された人民に戦争をしかけ、自らもむなしく倒れていくなんて……。みなさん、エスペランティストにとって、これ以上の大きな悲劇があるでしょうか。

では、またおたよりをしましょう。

皆さんの奮闘と健康をいのります。

※『嵐の中のささやき』（一九四一年十月、中国報道社刊）で発表。

（注）通州の傀儡軍の義拳に際して一九三六年の雑誌『改造』に「支那軍の鬼畜性」と題して山川均が書いた論文を指す。この論文に対して巴金が「山川均先生に」という公開状を書き、反論している。

（一九三七年九月 上海）

暴政の国——日本

こうした題は憎しみに満ちた大げさすぎる表現に見えるだろうか。しかし、それは鉄のように冷徹な事実なのだ。筆者である私自身が日本人であり、日本の野蛮な警察政治による抑圧を、この目でいつも見てきたのである。自分の祖国について、こんな言い方することを私は恥ずかしいとは思っていない。それどころか、兄弟たちが毎日どれほどの抑圧に苦しんでいるかを、みんなに知らせたいと思う。

ヒトラーは自分につごうの悪い書物を焼き捨てたが、その同盟者の日本政府もずっと前から同じことをやっている。ただ、ほんものの火を使わなかっただけの話だ。日本の人民はまだ文明に半ばなじんだ程度でいる。それなのに政府は「公序良俗」なるものを考え出した。そして近代的生活様式が入りこめないようにはからって、日本政府の非文化性をさらけ出している。

十年前、警察はお情け無用とばかり、洋画の芸術的にもすてきなキスシーンや抱擁のシーンをすべて切り取ってしまった。以前にはヌードの芸術作品の展示を一切禁止していたのだが、いつまでもそうしておれなくなった。といっても、時には展覧会でヌードの女性の汚れなくかわいい彫像のある部分を、警察はご親切にも布きれて蔽ってくれたものである。その片方では遊女の乱れ姿を描いた浮世絵を国宝あつかいして、もの好きなヨーロッパ人に宣伝しているのだ。そしていま、恋人同士はおろか、夫婦でさえも夜間に、または、人通りのないところを腕を組んで歩いていると（これはヨーロッパの影響であるが）、巡査がやってきて訊問したり、ときには、交番へ連行したりしている。しかし、あちこちの村の「夜ばい」と呼ばれる悪習には、手をふれようとは絶対にしない。「夜ばい」というのは、主として秋の

採り入れのあとに行われる未婚の男女の半ば公然の性行為のことで、そこから「聖母マリア」（未婚の母）が生まれることは珍しくない。これが、神聖な三千年の歴史をもつ民族の「公序良俗」を守るための、日本の支配階級の政治なのだ。

戦争が始まってからはどうだろうか？ ファシストの支配が狂暴になるにつれて、国民精神総動員の名のもとに、こういうやりかたはますますはびこってきた。とりわけおもしろい実例をいくつかお目にかけることしよう。

クリスマス禁止

クリスマスはすでに日本のお祭り行事となんら変わらないものになっているのに、当局はクリスマスを非日本的なものであるとして、なくしてしまおうと考えついた。

その命令が出る前に、帝国ホテルの支配人が宣言した。「ヨーロッパ的クリスマスを紹介するという使命は、すでになしとげました。したがって、今後クリスマスの祝典を一切行いません」。

まったくこんな時代になると、外国人に気持ちよくサービスすることよりも、当局者のおひげのチリをはらうほうがよっぽど大切なことなのだ。それとも満州「事変」の年、一九三一年のクリスマスとさきのような、醜悪な暴行が繰り返されることを恐れたのであろうか。あのととき、ファシスト集団の暴徒が東京のいくつかのダンスホールを襲い、紳士淑女にふん便を投げつけたのであった。

ダンスホールの閉鎖

去年の暮れ、全国五十二か所のダンスホールに、速やかに閉鎖せよとお触れが出た。それによると、

ダンスホールの存在は万邦無比の家族制度を破壊し、国民精神総動員に有害だ、というのである。

ダンスホールの経営者は驚いて「国情と時局に適應するようにホールとダンスのありかたを自ら率先して改善します」と申し立てた。一方では、これまで「ダンスホール」とか「ダンス」とかいつていたのを「踊り場」とか「踊り子」という訳語をあててみたり、ダンスを「愛国婦人会」や「国防婦人連合会」に入れてみたり、パーマをかけることを禁止してみたり、ワンステップ・ダンスに愛国行進曲をしばしば演奏してみたりし始めた。

私の考えでは、禁止しなければならぬのはカフェー（日本では単にコーヒーを飲む場所ではない）であり、芸者屋であり、そのたぐいの売春宿であろう。なかでも、世界に悪名をとどろかせている遊廓の存在である。いつたい、なぜこういうものが「わが固有のもの」として保存されねばならないのであろうか。そして、ダンスホールが外来のものだとして消し去られねばならないというのか！

これについて、国民精神文化研究所の藤沢博士が哲学的説明を与えている。それによると「奉公の理論は日本固有の精神である。それはヨーロッパにおける猷身の理論より、はるかに崇高なものである」。そして日本の町の女たちは、奉公の理論をまさしく身につけている！

パーマメント禁止

このおどろくべきお触れの理由になっているのは、日本の習慣や風俗に反しているということである。おそらく、お偉い先生がたは、日本人の髪のあるがままの美しさは日本固有の「島田」や「丸まげ」のたぐいに代表されると思ひ込んでいらつしやるのであろう。頭のでっぺんを次第にはげあがるように痛めつけ、あちこちにカモジをくつつけて、おびたしい髪油で怪物のような代物を頭の上におっ立てる

のがいい、とおっしゃるのであろう！

男女共学の禁止

日本の女子は今までも小学校を除いて、男子といつしよに学ぶ権利をふつつ持っていない。男性上位のこの国では、女性を人間として、また社会の構成員としてではなく、「良妻賢母」の名のもとに、夫に奉仕し、子どもを育てる存在としてのみ教育されているのである。そして最近、ほんのわずかの例外をなくそうとして、高等教育における男女共学の全面禁止が提案されたのだ。共学が「女性を男性化して、日本女性本来の美德をそこなう」からである。

おせっかいな当局は、中学生は丸刈り頭にするようにという命令を出した。そして一方では、今までも行われている中学生の校外補導を強化することにした。中学生がおとなの同伴なしに百貨店、映画館、喫茶店などへ出向かないようにするためだ。町は小さい区画に分けられ、教師は受持区域内での生徒の全行動に責任を負わされている。それというのも、大都会、とりわけ東京で生徒たちが反戦運動の中で大きな役割をはたし、逮捕された中にはしばしば中学生や女学生さえまじっていたからである。

こんなふうにして支配階級は日本古来の姿に帰るようにと、耳にタコができるほど人民に命令し、日本主義と日本精神について紋切型のお説教をしている。しかし、ぎりぎりのところ、日本人が自分のものとして誇るべきものは何であろうか？ 日本は天然資源の不足で、原料を輸入せずには重工業のいかなる分野をも維持することができない。文化に關しても貧弱である。ヨーロッパ的要素をなくすことが、日本人の近代的な社会生活の破壊を意味することを、支配階級は知らないのであろうか。きつとここで、支配階級は破壊だけを知っていても建設を全然知らない、という自らの体質を、勇敢にも示してい

るのである。

パーマメントやダンスが、非日本的であるということだけで禁止されねばならないのなら、まず役人たちがすべてが自らのヨーロッパふうの制服を引き裂かねばならないし、近衛首相以下の高官はさつさとゴルフをやめるべきであろう。それに、なぜ大砲だの飛行機だのが使われているのか。これらは、かつて日本人が「卑怯千万な飛び道具」と名づけたものではないか。

私たちは大まじめで支配階級に提案する。

あなたがたのお好きな武士道の結晶である日本刀で、兵士を武装させなさい。そうしさえすれば、あなたがたは、演壇の上から大汗をかいて「聖戦」の完遂をほえたてる必要が、もはやなくなるのですよ。

(一九三八年五月 香港)

※『嵐の中のささやき』(一九四一年十月 中国報道社刊)で発表。

代用人

衆議院では――

戦時下だというのに、衆議院は、雰囲気そのものが、まるで麻醉薬でも合んでいるかの如くに、悠然と開催されている。国民総動員は、人民ばかりでなく、お饒舌な議員たちをも「啞」に変えてしまった。質問なし。反対なし。居眠りして額をテーブルに打ちつける議員さえいる。衛士たちは薄荷と筆を持って、議員の間を歩き回っては、議員を起こす。「賛成」「賛成」、議員たちは朦朧としながら、とんでもない時に滑稽にも叫ぶ。こうした中に、空前の膨大な六十億の軍事予算が少しの障害もなく通過してしまった。

私の左に農村から来た中年男がぶつぶつ不平を言っている。

「畜生！ 山田は村の補助金を増やすと言うから、あれに一票入れたのに、騙しやがって。補助金のことには就いては一言も発言しやしない。あー、山野に入れるんだったな。山野は一票入れた人には三円ずつ配ったというのに」。

右のほうではモダンな女が二人、欠伸をしながらしゃべっている。「議員たちは賛成と言う以外、何もできないのね。そうじゃないですか」「そうよ。オウムか雲雀でも買ってきて、会議をさせたほうがまだましかもしれないわ。オウムは少し訓練すれば、賛成と言えりし、歯切れの悪い方言の議員よりは正確で、聞きよいでしようよ」。

議長は立ち上がった。

「総ての議案は悉く通過いたしました。これは大変慶賀すべきことです。唯今より、最後の提案を致します。ご静聴願います。戦争のため労働力不足を痛感している折、議会には必要以上に人が多く、私の考えでは、議員諸君においても、当然、前線、農村、工場に行かれるべきであります。そう考えることが、天皇陛下に忠良な赤子であります。しかし、憲法の規定により、多数議員の出席なしには、議会開会ができませんので、私たちはこう決議したいと思えます。以後、各位に似せた人形を各位の代わりとして、議会を開会したい」。議長は強くテーブルを敲いて、大声で叫んだ。「諸君、賛否を問います」。驚いて眠りから覚めた議員たちは何が何だかわからないまま、いつものように「賛成、賛成」。後方に座っている議員たちは、なおも居眠りをしている。

ベルが閉会を告げる。

辺りは一時騒然。

ああ、私も議員たちと一緒に眠ってしまったのだろうか。しかし!?——私はまだ自分の部屋にいてはないか。——私は眼を擦った。テーブルの上には、私が眠る前と同じように日本語の新聞が置かれている。外は自動車が行火をキラキラと光らせ、人びとは走り回っている。——私を覚ましたものは、日本の衆議院のベルの音ではなく、空襲警報であった。

(一九三九年八月 重慶)

※『嵐の中のささやき』で発表の「代用品時代——戦時日本の風俗画」から抜粋。

全世界のエスペランティストへ

同志の皆さん!

今日は私たちの敬愛するL・L・ザメンホフ博士の誕生日です。この日を迎えて、私はあなたがた、平和のために戦う仲間の皆さんに向かって、ペンをとらずにはいられません。ザメンホフ博士は、若い頃から諸民族の友愛と全人類の平和のために、たゆみなく戦いつづけました。けれども悲しいことに彼は人間同士殺しあっている最中に、息をひきとつたのでした。いま、中国における同じような殺戮の中でこの日を迎えて、私はいい知れぬ苦痛を覚えます。私は日本人です。けれども中国人民の友であり、彼らの戦友でさえあります。

去年の秋、私は人間も家も大地も空も、すべての人、すべてのものを三日三晩焼き続けたあの閩北フヤンペイの業火をみたのです。この春は、華中でもっとも人口の多い広州で、恐しい空襲を経験しました。数十機にのぼる日本軍の飛行機が毎日五、六回この町を狂ったように爆撃しました。傷ついた人びとが崩れ落ちた家屋の下敷きになって窒息しているのです。人の手や足が、子どもや婦人が、そして爆撃によつて

母親のおなかから月たらずで引きさかれないいな赤ちゃんでさえもが、ばらばらに散らばっているのです。美しい繁栄の町、広州は、瓦礫の山に変わりました。そしてその上には、生き残った人びとをおびやかすような月が輝いていました。

よるべもないみなし子、夫を亡くした婦人、身よりのない老人などの叫び、泣き声、そして、ため息……。刻一刻、その数を増す食物も衣類も家もない難民の群れ。日本軍国主義者の手による聖戦の、神聖な結末がこれなのです。

そして、ほんとうに多くの町や村で同じことが繰り返され、今も繰り返されているし、これからも繰り返されようとしているのです。

戦場になっている地方や、占領下の地域ではどうか。日本軍の鬼畜のような暴行については多くのヨーロッパの記者が記事や写真で、あなたがたの目の前にするどくあばき出しました。私はいま、自分の名譽をかけ、女性としての人類愛によって、この事実を裏づけたいと思います。私はまちがいない、この事実を見ました。

同志の皆さん、私は訴えなければならぬのです。このすべての事実を信じてください。それはいまもなお起こっています。つつしみ深い妻に何人も日本兵が暴行を加え、乳房を切り取りました。十歳の女の子であっても容赦しないのです。

同志の皆さん、このすべての事実を信じてください。それは、今もなお起こっていることです。幼児は火がついたように泣きだし、絶えまなく泣きつづけ、そして、次の瞬間には、その子の小さな胸に鋭い剣が突きささっているのです。バラ色のほったの少年たちが連れ去られ、泣き叫んでいる彼らの清らかな血は、重傷を負った日本兵の輸血のために、最後の一滴までしぼりとられるのです。少年たち

はグツタリとし、あるいは失神してしまいます。すると、そのかろうじて生きている少年たちは袋づめにされ、川や海に投げ込まれるのです。(ああ、揚子江だけでも、どんなに多くの小さい死体が見つかったことでしょうか！)

あるとき、私は捕虜収容所で二人の「満州人」に会いました。そのうちの一人は、「ア、ア、ア」と口にするだけでした。もう一人は、まるで中風病みのようなロレッツの回らない話しかたをするのです。彼らの様子から、日本軍国主義者が彼らに特別な注射をしてモノを言えないようにし、彼ら自身の兄弟と戦わせるために戦争に狩り出したことを、私は知りました。(彼らは侵略者から「満州人」と呼ばれています。正真正銘の中国人であつて、同じ言葉を使はずです)

また、別の時に何人かの朝鮮の若い女性たちと知り合いになりました。彼女らは「慰安隊」の名のもとに、日本兵の獣欲を満足させねばならないのです。そのうちの二人は黄色くやせおとろえていました。三人目の人は明らかにひどい梅毒におかされていました。そして、もう一人は大きなおなかをしていました。しかし、生まれてくる子の親はいつたいだれなのか、知っている人はこの世にはないのです。

同志の皆さん、これが皇軍が中国で見せている「文化」の正体なのです。彼らの「文化」のヒズメの下で、紫金山の木々は緑の葉をまったく失い、枝や幹でさえ銃火によって枯れはてています。清らかな西湖は血潮に染まって波うっているのです。

こうした状況のもとでは、これまでの消極的な組織形態では役に立ちません。UEAとIEL、SATとIPE(注)の同志たち、社会民主主義的または無政府主義的な同志たち、あなたがたは、まだお互いの間のささいな相違をかぞえて、統一を遅らせようと思つて居るのですか。力の分裂は我々に恐ろ

しい損失をもたらし、人類を荒廃させ、平和を破壊する者どもに利益を与えるのです。

もう一度、力をこめて言います。敵はただ一つ、ファシストですと。彼らはあらゆる手段を用いて、エスペラントを使つても全世界をあざむき、目をくらませようとしているのです。このことをしっかりと覚えていてください。

東京の反動的エスペラントイストのだれ彼は、帝国大学元教授で国民精神文化研究所の会員である藤沢親雄博士を会長にして、政府の補助金による会をつくり、恥知らずにも侵略者の「正当性」を世界に向かつてほえたてています。同じ目的をもって和歌山のあるグループは『ラ・スーノ』（太陽）というエスペラント雑誌を毎月出し、十数か国へ無料で送りつけています。相当前から出ている京都の『テンポ』（時）もいまではブルジョア自由主義の古い旗を降ろし、ファシズムの旗をかかげました。同志の皆さん、我々のエスペラントは、こういう不名誉な存在を許すことができるでしょうか。我々のエスペラントは、ロマン・ロランの言葉、ゴルキーの言葉、マルクスの賛同する言葉になっています。

同志の皆さん、私たちは団結しなければなりません。彼等に攻撃を加え、その仮面を引きはがさなければなりません。反ファシズム闘争のために、すべての力を合わせましょう。エスペラントが人類の文化と平和の、野蛮な破壊者に対する国際的な武器であること、国際的な強固な連帯なくしては実際の成果を得られないこと、このことを忘れないでいきましょう。私たちの武器があらゆる国境を越えたものであること、私たちの同志は世界のいたるところに存在していること、そして、私たちの声は地球の隅々までも届くのだということ、このことを思い起こしましょう。それに、私たちエスペラントイストは本質的に平和の前衛です。したがって、私たちの周囲に統一戦線を広げていき、それがエスペラント界以外の広い分野をも包含する、ほんとうに国際的な規模のものになるまで、育てあげていく義務があるの

です。

一、エスペラントを使って、反ファシズム国際統一戦線を樹立し、強化しよう。

二、ファツシヨ的エスペランティストと、徹底的に戦おう。

三、侵略に反対して、エスペラントによる国際的宣伝活動を、積極的に進めよう。

四、我々の統一戦線を外部へ拡大しよう。

以上が私たちの敬愛する指導者の誕生日に際しての私の提案です。今年のザメンホフ祭を記念するには、このことの実現以外にはないと確信しています。

最後に、中国の抗日戦争の現状を少しばかりお話ししましょう。

抗日戦争はいま新しい段階に入りました。西北、すなわち戦う中国の現在の中心地と、西南との驚くべき和合は進んでいます。中国民族は、古代にあつては、超人的ともいえる巨大な万里の長城を建設した民族です。そして今日、この民族の上に、全民族による比類のない統一の力が加わったのです。いかなる困難といえども、中国人民を打ちのめすことはできません。国民党と共産党の合作、人民と軍との結びつきは、ますます強固になっています。ごらんなさい、この新しい段階に重要な役割を果たす遊撃隊が、どんなに巧みに日本軍の後方をかき回しているかを。

けれども、ああ、私は知っているので——もしも性能のいい高射砲や飛行機が中国に充分あつたならば、後方の犠牲者はこんなに多くならないでしょう。防毒面が足りないために、どんなに気の毒に兵士が倒れていることでしょう。薬や看護人がないために、どれほどの負傷者がはかなく、苦しみ死んでいることでしょう。たとえ外部からの援助が全然なくても、中国はあらゆる困難を耐えぬいて、抵抗をつづけて、最後の勝利を得るだろうことを、私は決して疑いません。けれども、中国を助けることは

平和を愛するすべての国の人びとの義務です。中国民族が自らの解放のためだけではなく、人類の平和のためにも戦っているからです。ですから、私は、とりわけ中国に住む日本人としての私は、皆さんに次のことを求め、またお願いするのです。これをやりとげることがはエスペランティストの、そしてまたすべての人類主義者の務めでもあります。

一、国際連盟憲章第十六条を発動させるように、あなたの国の人民や政府を動かすこと。

二、あらゆる軍需品の日本への輸出の全面的禁止を、政府に要求すること。

三、日本商品の不買運動をおこすこと。

四、医療器具その他の必需品やお金を中国へ送るようにと、あなたの国の人民へ呼びかけること。

では、あついで握手とともに。

あなたの同志 ヴェルダ・マーヨ

(一九三八年十二月 重慶)

※『嵐の中のささやき』で発表。

(注) UEA (世界エスペラント協会) いわゆるブルジョア・エスペラント運動の代表的組織。IEL (国際エスペラント連盟) UEA と分裂してできた組織。戦後再統合。SAT (全世界無民族協会) テルの出発時には反共的社会主义エスペラント運動の中心。IPE (プロレタリア・エスペラント・インタナショナル) SAT から分裂した共産主義的エスペラント組織。一九三八年に壊滅。日本プロレタリア・エスペラント同盟はこの組織の日本支部。

(注) ヴェルダ・マーヨはエスペラントで「緑の五月」。テルは、ヴェルダ・マーヨか緑川英子を名乗っていた。

失くした二つのリンゴ——病床にて

(日光の降り注ぐベランダで、私は今までどおり、月に一度母に「特別な世話」をする。)

おかしいわ。いつもなら三十分位で白髪が全部抜けるのに、今日は減るところか、抜けば抜くほど増えていくようだわ。

鏡の中の母は、ひどく疲れているようでじっと黙っている。

「英ちゃん」

突然母は今迄聞いたこともないような、厳しい声で私を呼んだ。

「私が折角お前にあげた二つのリンゴ(赤いほつぺた)はどうして見えなくなってしまったの」

「それは、お母さん……」

私は悲しく、両手で自分の蒼白い頬を押えた。

上海の時はリンゴはまだあったのよ。それからはお母さまも御存知のように、広州にも、漢口にも、重慶にも、どこにもリンゴはなかったから、とうとう私は自分のリンゴを食べてしまったの。

母は何も言わなかった。私も黙ったままで、ただ手を動かすだけ、白髪はどんどん増えて、頭中が真っ白になってしまった。私は我慢し切れずに、

「お母さま!」

答えは返って来ない。

「お母さま、親愛なお母さま!」

半分怒って、半分甘えて、その痩せ細った肩に手を当てて、顔をのぞくと、ああ、お母さまではなくて、冷え冷えとした石膏の像ではないか……。私は眼が醒めた。

頭の芯はズキ、ズキと、ひどく痛く、胸は汗でびっしょりだった。

あちらも、こちらも、辺りの灯火は眩しい程に輝いている。

それなのに、母の窓だけが、どうして真暗だろう。

さびしい盲人の眼のように！

母よ！

春の微風が若葉の間を縫って、サラ、サラと音を立てている。

母の重くて疲れた頭をやさしくなでてくれないかな。

花壇の沈丁華は、真っ暗闇の中で、清らかな香りを放っている。

その香りが、弱った母の体をそっと抱き包んでくれないかな。

ガラス戸をしつかりと閉め

重いカーテンを下ろして

痩せ細った手を震わせながら

ラジオのダイヤルを回しているのだろう。

母の好きなバイオリンの曲も終り、

ジ、ジ、グーグーグーグー

乱れた訳のわからぬ雑音が飛び込んでくる。

けれど母はすぐに聞こえた。

電波は海を越え、山を越えて、

あなたをよく知っている声が聞こえる。

それは、遠くの娘の声なのだ。

娘は、飼ひ馴らした小鳥が飛び立つように、

あなたの懐から飛び立ってしまった。

毎晩、毎晩、マイクフォンの前に立ち、

その度に「お母さま！」と思わず叫びたい衝動にかられる。

私の体は燃えたぎり、心も裂ける思いだ。

次の瞬間、私の眼に浮かぶ無数の顔、顔、顔。

悲しみ、疲れ、飢え、怒り、恨みのこもった、

男女老幼の顔、顔。

母よ！ 母よ！

私の愛する人はあなただけなのだ。

でも、私はあなただけの者ではない。

この残酷な戦争の中で、
涙と呻吟と呪いの暴風雨の中で、

こっそりと自分だけの小さい幸せにひたることはできない。

「誇りを失った売国奴」と

ファシスト代理人は毒舌はく。

邪悪で、無知蒙昧で兇悪な視線に取り囲まれて、
母の衰弱した心はますます痛めつけられている。

しかし、母よ、

眼をしつかりと見開いて、「英ちゃん」をよく見ておくれ。

か弱い、苦しんでいる人々に対する熱い愛、

彼等を虐待する一切に対する憎しみ、

掛け替えない宝である「誇り」

これこそ母が私にくれたものだ。

これだけは決してなくしはしない。

あなたの娘はなくしてはいけない物をなくしてしまった。

——それは私の両頬の赤さだけだ。

何週間か前、

失くした二つのリンゴを求めて、私はW温泉に行った。

緑の芝生に日の光りが燦々と照りそそぎ、

黄金色の菜の花が一面に咲き、

薄紫のそらまめの花が素晴らしい香りを放っていた。

暫し、疲れも忘れて茫然となり、

ああ、もしかしたらここは幼なかりし日のK村ではないか。

この野原で母の袖を引き、

飛んだり、跳ねたりして、大声で歌った。

「春が来た、春が来た」

戦争を知らない永遠の天国だった。

しかしそこから余りにも早く離れてしまった。

思い出が楽園から私を追い出させたのだろうか。

北から南、東から西へ この二年は、断えず流浪した。

母よ、許してくれ、

頬からリンゴがいつなくなったのか、私自身も、わからない。

だが誰がそれを奪ったか、私は知っている。

憎らしい手、それと同じ手が何十万、何百万人の青年男女や子ども達から、

むごたらしくも両頬の赤いリンゴを奪ったのだ。

ここ中国でも、そして私の祖国日本でも。

私も、私たちも、

奪われたものは、取り返すべきだ。

でも、どのようにして取り返すのか、

何もしないで、じっと待つというのか。母よ、

死ぬほど、恐いかもしれないが、

耳をふさがなくて、眼をそらさないで、

激しい戦闘の、溶鉱炉を経てのみ

それらを取り戻すことが出来るのだ。

でも、母よ、

たとえあなたの娘が、

大事にしていた二つのリングを永遠に失くしてしまっても、

叱らないでほしい。

愛する母よ、見ておくれ、

そのリングは、中国大陸で、日本で、世界各国で、

綺麗な赤い、赤いリングを永遠に実らせるために、

先に落ちてしまった無数のリングの中の

二つに過ぎないのだ。

※『嵐の中のささやき』で発表。(一九三九年四月 重慶)

●長谷川暁子さんの講演

私なりの平和への歩み

——二つの祖国を持つ苦悩と喜び——

こんにちは。司会の服部さんからこの会で母長谷川テルについて話してほしいと言われましたとき、長谷川テルの娘としてではなく「私なりに生きていきたい」と思っている気持ちを伝えて、ご質問に答えるという形なら、私自身も勉強になるからとお申し出を受けました。それでいいです、ということでは何だかホッとしました。

私はこういう場面はとても苦手なんです。これは言葉の問題だけではなしに、精神的にどうも素直に「長谷川テルの娘」になれない面があつて、テルの娘として呼ばれて話すことに、今でも抵抗があつて、今日も不安な気持ちでここに参りました。

生い立ち——革命烈士の遺児として

みなさんと一緒に話し合う前に少し私自身のことをお話しします。

まず私、どこで生まれてどういう形で成長したかという、いままでの人生を、簡単にお話しさせていただきます。

一九四六年四月、瀋陽（奉天）で生まれ、その後、両親と五歳上の兄と一緒に東北の佳木斯へ行き、翌年の一月、母が亡くなり、間もなく追いかけるように、四月に父も亡くなりました。その時から私は、中国の地方政府に革命烈士の遺児として大事にそだてられました。私は二歳の頃ハルビンに行き、中国共産党高級幹部の子どもの幼稚園で子ども時代を過ごしました。一九五二年に小学校に入り、ずっと高校卒業までハルビンにおりました。

卒業してから北京の近くの唐山という都会（七六年の大震災でも知られる）にある鉄道の大学、これはアメリカにもよく知られている大学ですが、ここに（結構、こういうところ私とても自慢ですが）優秀な成績で入学しました。

中国の理工系大学は五年制なので、ここで五年間すごしました。大学時代は勉強というよりちょうど文化大革命の時代ですから、いろんな社会的な勉強をしました。

卒業後、田舎に、政府とか学校に決められた就職先として、西の方、少数民族の地域の学校に先生として行かされました。そこでまた十年くらい、中学・高校の数学の教師をしました。その間に、日本のエスペランティストの方々が「長谷川テルの娘に会いたい」と連絡を取られるというようなことがありまして、中国の政府も、そんな辺境の地でテルの娘に逢わせるのは都合が悪いというようなことで、北京に転勤、そこで六年間くらい過ごしましたが、私はどうしても日本へ行きたい、一目でも日本が見たいという思いが強くなりましたので、親戚を通じて、日本の友人に理解してもらって、留学することができました。一九八四年からの二年半でした。

初めての日本——母・テルの母校に学ぶ

一年半は調布の電気通信大学でコンピューターの勉強をしました。その知識をもって中国に帰れば、中国の数学教育にも役立てるかなという思いでした。

日本に行くには留学という資格しかなかったので、私は留学したのですが、実際は日本を見たい。日本人に逢いたい、できれば日本で生活がしたい、という内面の希望があったので、この一年半、あまり勉強も進まず、日本語も上手になりませんでした。今考えるとその時の身許保証人を引き受けて下さった方にと、私の先生方にも申し訳ないと思っています。

何とか一年半の勉強を終えましたが、中国は出国するのはとても難しいので、せっかく日本に来たのに、このまま帰れば二度と来日できないという思いが強く、どうしてももう一年留学を延長したいと思ひ、保証人の方にわがままを言ってお願ひをしました。保証人の方も理解をして下さって、いろいろ当たって下さって「奈良女子大学はどうですか」と言われました。

それは私、とても夢にも思わない有難いことでした。奈良女子大学は母テルの母校ですし、一番行つて見たいところでした。女子大の先生が研究生として一年引き受けて下さることになり、コンピューターの勉強から大変身して、今度は日中戦争の時代の歴史の勉強をさせて頂きました。奈良の一年はとても忘れ難い一年でした。いい雰囲気でしたし、アルバイトで自分の生活費を賄ひ、とても楽しくすごしました。今度は中国へ帰ることになってもこれ以上わがままは言わない、と、約束を守っておとなしく帰国しました。

日本再訪——大阪で就職

帰りまして、二年間大学で数学の教師をしていましたが、心の中では、何とか今度は留学ではなくて日本で暮らしたい……と思っていました。でも私は中国人ですから、どういう形で行けるか。知り合った友人と相談しましたら「福島でよかったら斡旋しますよ」と言われて、福島大学の研究生として一年の留学が決まりました。

今度は言葉も通じるようになったので、皿洗いのようなアルバイトでもいいから働いて自分の生活費をつくりたいと思いましたが、留学生には週二十時間の範囲のアルバイトしか許されていません。何度も入国管理局に行きましたが「駄目！」と言われます。どうしたらいいか、来年三月末には卒業しなければならぬ、就職して日本で長期に暮らしたいのです。それで十二月頃には、どうしようかととても焦りました。(今もオーバースティは三十万人くらいあるそうですが)もちろんオーバースティするつもりはありません。私はずっと「自分は日本人だ」と思っていますから、正式に滞在を認めてほしい。でも日本政府・入国管理局が認めてくれないと中国に帰るしかない、どうしようか、どうしようかという不安な毎日でした。ちょうどその時、八尾市にある大阪経済法科大学からいい話がありまして、これからは国際化の時代ですからたくさん留学生を迎え入れる方針を決めたので、留学生が楽しく過ごせるよう留学生のことをよく知っている人が来てくれれば……ということだったので、私は喜んで引き受けました。そういう仕事だったら私は自信があります。四十年以上過ごして中国のこともよくわかりますし、留学経験もありますし、二十年間教育の仕事をしてきたので自信がありますから、「私でよろしけれ

ば」と返事しました。カウンセラーという嘱託の契約が一週間後にまとなり、日本で過ごせることになりました。いいタイミング、いい形で、私の留学生生活は終止符を打ちました。それは一九九一年四月です。

「長谷川テルの娘」を望まれても……

私の人生は平々凡々です。でも私自身意識していなくても、長谷川テルの娘ということは、どこに行っても付いて回り、注視され大事にされます。で、よく「テルの話を」という依頼を受けました。この十年間で数えましたら二十回以上もありました。澤田さんの他にも、学校側、友人側、学生側からもよくありました。

でも、実際引き受けたのは、今回を含めて三回だけです。せっかく大事にされて頼まれたのに……と、自分でも、皆さんにすまないといつも思いながら断わってしまいます。澤田さんはとてもおやさしいですから、やわらかく私の気持ちを理解した上で「こういう話がありましたよ。暁子さん、どうですか」という形でもってこられます。でも私は、知らない顔とか、聞き取れないふりをしてやり過ごしてきました。気がすまないけれど、自分にはうそはつけない、と、つらいけれどそれで通してきました。

これまでに二回だけはお引き受けしました。

一回目は一九九二年、山口県で中国残留婦人の世話をして、皆さんからお金を集めて毎年三〜五名の残留婦人の方を招待する組織を続けている方々がおられます。そこからの依頼がありました。この方たちはハルピンに旅行して、東北烈士記念館で長谷川テルの展示を見たということもあって、ぜひその娘の話を知りたいといわれました。私はその時も断わりたかったけれど、残留婦人のことを十年も続けて

支援している方たちに断わってはいけないという思いもあって、複雑な心境で澤田さんの後について行きました。その時も何も用意なしに行つて、皆さんのお話をいろいろ聞きまして、留学生の世話をしながら考えること、自分の内面の矛盾、今までのことを振り返つて恥ずかしく思っていること、どうしたらいいか迷っていることを、素直にそのまま聞いて頂きました。

母の棺に一月寄りの添つて逝つた父

もう一回は芦屋のエスペランティストを中心とするグループからの依頼です。阪神大震災の前でした。私どうもエスペランティストの方々は苦手なんです。私はエスペラントもできないし、日本語も上手ではない、そして日本ではじめてお世話になつたのはエスペランティストですから、どうしよう……と迷いました。ちょうどその頃「テルの夫は重婚」という噂があちこちに流れていて、私の耳にも入りました。それで今度はテルの娘としてテルの代弁をしなくてはならないという気持ちで引き受けました。

その時の話は次のようなことです。わたしは、テルはエスペランティストとしてとても素晴らしい活動をしたし、日本人としても優秀、その上、女性としてもすぐれた女性だと思っています。その夫である父劉仁は十八歳の時、中国の封建的な因習に束縛されて、何もわからない年で十八歳の女性と結婚させられ、当時は小学校に入る人も少なかった時代に、大学まで進学させてもらい、優秀な学生として国費で日本へ留学しまし



山口県で講演する曉子さん

た。そういう人の内面はどんなに苦しかったか。自分のあまり好きでない女性と結婚をして、その悩み、苦しみはどんなに深かったか、おそらく父自身しか知らないことでしょう。はじめ、テルにも言わなかったらしいですね。中国に行つて少しずつ察するようになって、母もきつと苦しかっただろうと思います。結婚前にそのことを知つて了解した上で結婚していたらまた別ですが、ある意味ではだまされた部分もあつたと思います。ですから母も心の中で苦しかつたのではないでしょうか。

でも父と母の重慶での十年、戦後、東北へ行つての二人の生活を父と母の友人から聞きまして、母は三十五歳の若さで亡くなつたのは不幸でも、女性としては幸せだったということ、私、わかりました。父は母が亡くなつてから一か月の間、母の棺を誰にも、他人にさわることを許さなかつたですね。「もう埋めましょう」といわれても「駄目！」といつて、一か月ずっと棺のそばに座り込んで、厳しい佳木斯の早春の日々を送つた父のことを聞きました。こんなに愛されて二人で十年間、日本との戦争の中で共に戦つてきたことを思い、母は幸せだつたと思います。重婚ということは、もちろん父の影の部分ですけれども……。

一か月の後、父も体調を崩し、棺を担ぐこともできないままに、他人が棺を担ぎ出すのを見守り、埋められるまで黙つて見とどけて、二か月後に亡くなりました。そういうことから私はやっぱり二人の愛の深さを確認しまして、そういう気持ちで、芦屋での話をさせて頂きました。

叔父の言葉「あなたたちのお母さんは立派な人」

今回は三回目、今度は何を……と私は考えました。何故こんなに固く私が拒否するのか。皆さんにとつ

て多分理解しにくい部分だろうと思います。どうして自分をテルの娘として素直に受け入れなかったか。それを少しお話ししてみようと思います。

はじめてテルのことを知ったのは十四、五歳の時でした。それまでも日本人の子ということは知っていました。幼稚園の時から「あなた日本人の子ですよ」って何回も言われた印象がすかに残っています。喧嘩したりして「日本人鬼の子」といわれることがあっても言い返したりはしませんでした。言われても仕方がないと思っていましたから……。

でも母は誰、父は誰と知らないまま十四歳まで過ごしました。父の弟である叔父が吉林省のある都市に住んでいました。(この叔父は父が国費留学をした時に、私費留学生として一緒に日本へ留学しました。生活に余裕ができたので、別れて住んでいる兄劉星と私をせひ逢わせたいといつて、十四歳の夏休みに劉星を北京から、私をハルビンから呼んで兄妹の対面をさせてくれました。これは父が亡くなる前「二人の子をせひ頼む」と言った、その兄の気持ちを覚えていたからでした。気にかかっていたけれど、自分も五人の子どもがあつて大変でしたから、かまう余裕がなかったみたいですね。ですからその時、私は十二年ぶりに兄に会いました。夏休みの間、叔父はあまり父と母のこと話してくれなかったですね。ある日のこと、叔父の子と隣の子と遊んでいて喧嘩になり、隣の子に「日本人鬼の子!」って言われて、そのまま家に帰りました。叔父の子が兄に「お兄さん、晁嵐は言われましたよ、日本人の鬼の子」と告げ口しました。兄は何にも言わずに走り出て、私のこと言った子をなぐりつけましたね。兄は高校生、隣の子は十二、三歳の女の子でしたから、その子のお母さんは怒って、仲良しだった叔母に文句を言いに来ました。「この子(兄)をしつかり教育しなければ……」と。それまで「日本人の子」と言われても仕方がないと思つてずつと我慢をして来たので、何故お兄さんがこんなに怒つたのかわからず、とても

印象に残っています。

叔父は仕事から帰って叔母の言うのを黙って聞いていました。実は叔父はその頃大変な立場でした。日本へ留学した経験がある者は、その時代ほとんど政治的に信用できないグループにさせられています。で、いよいよ夏休みの終わり、明日は別れるという夜、叔父に呼ばれました。「君たちすっかり覚えるんだよ」(何を怒っているのかわからないという雰囲気です)ね、叔父は「他人にいくら言われても、あなたたちのお母さんは立派な人だということ誇りをもって生きてゆけ」と言われました。

その時から緑川英子の名前、エスペラント、そして奈良女高師……そういうことだけ私は覚えました。立派な女学校ですよ……という話。エスペラントの話。これから世界中の人々が戦争をしないで仲良く一緒に暮らしていこうと考えている人たちに使われている言葉です、と。そして、あなたたちのお母さんは日本人ですけれども、戦争にずっと反対して戦ってきて、そのために自分の生命までも捧げた。中国革命のために、自分たちの三番目の子を生んではいけない、他人に迷惑かけない、という気持ちで中絶したので、そうでなければ、今でも生きていたはず……。お母さんは立派な人ですよ。それだけしっかり覚えるんですよ……。その時一回言われたのですが、私は母は日本人だけれど中国人を殺した日本人とはちがう。むしろ中国と同じ立場に立って、日本人と戦った女性ということをしつかり覚えました。立派な日本人と心の奥に深く印象づけられました。

お金と引き替えに自由をなくす辛さ

でも日本へ留学して来て、ただの劉曉嵐という者を応援して、お金を出して留学させるという理由は

ない。テルの娘だから一生懸命お金を出してくださったという事情は理解していましたが、私には私の意志がある、自分のことを自分の力でやって日本で生活していきたい。何でも世話人に言われたとおりに、お金を他人から貰って暮らすのはとても苦しかった。それで何回も身許保証人の方に「お金を頂くのは心苦しいからアルバイトをさせてください」とお願いしたけれど、許して貰えませんでした。保証人としてはあたたかい気持ちで「三十代の日本語のできないあなたとしては、しっかり勉強したらそれで充分ですよ」と言われて、でも辛かったです。もう私は長谷川テルという名前を聞くのもいやになりました。とてもつらかったですね。

皆さんはなぜお金、お金、とこだわるのか疑問に思われるでしょう。私、小さい時から両親の傍で育てられずに、全部国費で、中国共産党からお金を出して貰って育ちました。五〇年代、普通の人の生活以上に豊かな生活をさせてもらいました。大学卒業まで国費で……。そういう私です。その私は小・中・高ともいい先生に恵まれ、正直な人に、正義感覚をもった人になれという教育が素直に染みついています。ですから、中国のこととても真面目に考えていました。中国の五〇年代末、六〇年代は、皆さまご存じのように厳しい十数年でした。食物もなく二百万人の餓死者が出たという時代でした。考える自由も奪われた時代でした。そういうことについて私とても真面目に考えていたので、だからこそ「今の中国共産党、これでよろしいですか？」とずっと考えていました。こういう批判は誰も口に出してはいけないことでした。しかし、私は家庭環境の中で育てられていないので、家庭でなら、お父さんお母さんが「そういうことは絶対口にしてはいけないよ。共産党万歳、毛沢東万歳しか言ってははいけないよ」と子どもに教えますが、私は誰からも、そういう警告を受けず、先生からは素直に、正直に……と教えられるばかりで、言ったら危ない、自分の将来はないという世間的な知恵は知らずに育ちました。です

から大学にはいつてから、政治学習会で、「今の制度は正しいですか」「餓死者二百万人に誰が責任を持ちますか」と何回も、友だちや幹部にも言いました。「今までの政策の失敗は否定できない」と私は主張したので大変なことになりました。結局幹部のところと呼ばれて「晁嵐、あなたは言いたい放題でしたな、他の人だつたらとつとに逮捕でしたよ。しかし、あなたは革命烈士の子どもですから、敵の人じゃないから今まで我慢してあげました。けれどもこれからはそういうことをいっさい口にしてはいけません」と言われました。もう何回議論しても結論のないことですね。そういう時代でしたから。最終的に幹部たちは「これからは生活費をいっさい出しません。あなたは忘れてはいけませんよ。両親のない子どもが今まで、大学まで入ることができたのは共産党のおかげですよ」。

この話を聞きましたら、私ほんとうに頭を棒で打たれたような感じでした。確かにわたしは生きていくことを国に、共産党に感謝しなければならぬ。でもだからといって何故中国のことを批判してはいけないのか？。自分を失うような一か月を経験しました。「お金を貰ったというだけで、相手の悪いことを言う自由がなくなるのですか？」とずっと自分の中で考えましたね。

苦しくても、人に頼らないほうが快適

それ以来、お金を貰うのが本当につらくてつらくて……。中国の無茶苦茶の状態を考えて、とてもつらかったですね。例えて言えば、自分のことを大事に考えてくれるお母さんがろくな働きもしないで、人間として失格な人、他人のことも考えない人だつたら、そんなお母さんがどんなにかわいがつてくれても、悪いことは悪いと言わなければ、いい子どもじゃない、と、私は思いますね。そういうことで、

お金拒否といっても、アルバイトすることもかなわなかった時代でしたから、友人に頼んで、「卒業したら働いて返しますよ」と言って借金をして一年くらい、お金貰わずに生活しましたね。だから、そういうことから、お金のこと、とつてもいやになっただんですね。小さい時からお金知らなかった。全部国から用意しても



らった。お金の価値観、知らずに育ちました。高校に入つてはじめてお金を手にしました。そして大学に入つてそういうことになって、「金」というのはそういうことですか。お金を貰ったら自由はないということをはじめてわかったのですね。援助というものに抵抗を感じるようになったのです。

でも、日本に来て、言葉できない、「アルバイトしますよ」と言っても、雇ってくれるとこないですね。やっぱり友人に頼るしかない、つらかったですね。そういうことからテルの娘と言われたくなくなりました。ですから奈良女子大の一年間、楽しかったですね。うどん屋さんでアルバイトしまして、なにしろ数学の教師でしたから、「いらっしやいませ」「有難うございました」というのが恥ずかしかった。おやじさんに「ここは商売ですから」といわれて、言葉は下手でも笑顔で接し、うどんのことも覚えて、皿洗いもして、自分の力で一年間留学できました。もちろんくたくたでした。けれども精神的には快適で、前の一年半、一か月八万円ももらった時より楽しかったですね。

テルはテル、私は私

長谷川テルにたいしてはお母さんという概念はないですね。子ども時代も、両親のない淋しさはなかった。自分で子どもを生んでから「ああ、お母さんのない子、どんなにかわいそう」と想像したぐらいですね。中国国民のあたたかさのおかげで、幸せに成人になりましたけれども、普通の人のお父さん、お母さんという思いはなかったですね。十四歳ではじめて緑川英子がお母さんだったということを知った私でした。

その私を「テルの子」として集会で紹介され「テルの子ですから、応援してください。今、留学しています。温かいお気持ちで……」。その間私は大勢の人の前で立つたままで……司会の方はもちろん、留学を無事終えるようにという好意で言っただけですが、私はその一、二分がともつらかったですね。でも今考えたら、世間知らずで、世渡りも下手で（今でもそうですが）、でもよく考えて、正しいことか、間違っているか、よいか、悪いかを見分けることができるのは、母から遺伝されたのかなあと 생각합니다。そのことを考えたら母に感謝する気持ちになります。

これからもこういう気持ちで、これからの人生を素直に送りたいと思います。こういう話をしたのは今日始めてで、多分最後だろうとおもいます。繰り返し話すことには慣れないものですから……。テルはテル。私は私。母のことは心に秘めて、誇りを持って素直な人、お金のために曲がることをしないように、今の私のままに生きていきたいと思えます。

●長谷川暁子さんの文章から

知られざる「長谷川テル」

母親・テルは父親・劉仁の妻にはなれませんでした。父は重婚だったからです。

昔から中国においては、トシヤン童養嫁トシヤンという古い習俗が残されていました。金持ちの男には二妻三妾を迎えることもごく当たり前で、ヌシノカミ女宗耀祖の悪習でした。

父の実家は地主でした。祖父は地元で唯一の文人で、商會會長兼郵便局長でした。

父が十三歳のとき、隣の町の十八歳の女を迎え結婚させられました。式を挙げたその日から、二人の同居生活が始まりました。

「お父さんとは初めの五年間にはなにもなかったのよ。彼は勉強しか知らない書生だったの。わたしはただのお手伝いさんにすぎなかった」と父の童養嫁、つまり彼の妻は後年そう語りました。

しかし、やはり男と女の二人の暮らしを長期にわたってしていたため、父が十九歳ごろに女の子が生まれました。そのあと父は故郷から遠くない奉天の高等専科學校に入り、家に帰ることが少なくなりました。父は、自分の家に字も読めない妻がいることを誰にも言いませんでした。

留学中の父が母に出会いました。二人はエスペ란ートの理想につながられ、恋に落ちました。そして一九三六年の秋に結婚しました。

当時東京農業大学で学んでいた叔父（父の弟）は、よく父に「家のことは絶対テルに口を滑らすな！」と警告されました。そのとき、父は帰国したら妻と離婚するつもりだったが、重婚を許せない日本人の妻にばれることが相当怖かったようです。

「七・七事変」（蘆溝橋事件）のあと、抗日運動はたちまち中国全土に広がりました。日本人妻をもつ人達はそれぞれの口実で、妻と離婚したり、日本へ帰らせたりせざるを得ない局勢になりました。両親には別れる気がありませんでした。当時二人はいつもエスペラントで話しました。よその人に聞かれたとき、父は母がベトナム人だとか、マレー人だとか言っでごまかしました。母も反日情緒が日増しに高まっている中国で、日本人であることを隠すためにさんさん苦勞をしました。

母が不意のことで、日本のスパイと疑われ、中国当局から即刻国外退去命令を受け、香港に追放された時、父は仕事で外出中でした。翌日それを聞いた父はためらうことなく香港に急ぎ駆けつけました。その貧民街で、母——敵国の人であることではないか、どんな危険に襲われるのか分からない我が妻と共に四か月どん底の生活を忍び耐えました。

そのあと漢口、長沙、桂林そして重慶に二人は力をあわせ反戦運動を続けて、数多くの困難を乗りこえ、ついに休戦を迎えました。

周恩来の『東北幹部は早く東北に戻り復興運動



テル・劉仁の結婚記念写真（一九三六年）

を發展させる」という指示に従い、両親は東北出身の文人同僚と一緒に重慶を築つことになりました。

ああ、戦争が終わったと、夫の故郷に帰れると思ひ、ホッとした母は、喜びいさんで出発の支度に取
りかかりました。しかし、出発の日が近づくとつれ、父は怒りっぽくなり、イライラするようになり
ました。母が故郷のことや入籍のことに触れると、父は苛立ち、時にちよつとしたことで母を叱つたり、
怒鳴つたりしました。

両親の親友はその頃、近くの川岸に一人座り込み、両足を水の中に浸し、東へ流れていく川の水を見
つめてゐる母の姿をよく見かけました。

その時の母は何を感じたのか、何を予感したのか、そのために何を悩んでいたのか、それとも敗戦の
日本のこと、日本の親類のことを懐かしんでいたのか、それは知り得ないことですが、その時期の両親
の關係はたしかに異常に見えました。

共産党と国民党の争いの激化のため、東北への行程は大変でした。途中で兄・劉星が国民党に誘拐さ
れたことがあったり、私服警察の尾行をまくため、貨船の倉庫で二、三日隠れなければならなかつたこ
ともありました。「妊娠している緑川（母の中国での名）が劉仁にあれこれ世話をやつてもらつてゐるの
を見て、私は羨ましい限りでした」と、重慶から青島まで同行した両親の女友達は、三十年の後、私に
何回もそう言いました。

奉天に着いた後、私が生れました。間もなく故郷から父の二番目の弟と父の妻が訪ねてきました。

父はこの女性を親戚だと母に言葉を濁しましたが、赤ちゃんの面倒を周到に見てくれたこの女性のこと
がどうも怪しいと母は思っていました。親戚が翌々日に帰りました。それ以来母は、よく父と口論する
ようになりました。

「すぐくこわかったのよ。私はあなたを抱いて、泣いているお兄さんを連れ一階に降りたの。二人はいつまでも喧嘩をして、なかなかやめなかつたわ」。その後、私たちを二階に住まわせてくださった日本人医学者のお嬢さん（現在東京調布市に在住）は、その時の有様をはっきり覚えていました。

つぶさに辛酸をなめつくした両親は、ハルビンを経由、安全地区佳木斯にやつとたどり着きました。だが、二人の人生の終焉も近づいていました。

私が生まれた六か月後、母はまた妊娠しました。しかし物資の乏しい内戦期に、三人の子どもを育てるのはとても無理だということと、これからしなければならぬ仕事がいっぱいあるということを考慮した両親は、母のことを大事にする東北行政委員会の「緑川中絶不可」決議に背き、病院に行きました。手術は失敗しました。腹膜炎で高い熱が連日退けずにつづいていました。意識がはっきりしない時の母はいつも日本語で「お母さん、お母さん！」と呟きました。最期になってはじめて日本への懐古の念を洩らしました。

母は死ぬ直前、あまりに後悔している父を慰めました。「私が死んだら、また日本の女性と再婚してね」。母は、長い間に女の勤でなにかを感じていたに違いないものの、最後までわからなかつたその謎に悩まされつつありました。けれども、夫が自分を愛していることを彼女は疑ったことはありませんでした。母の急死は父に致命的な打撃を与えました。一九四七年の佳木斯の一月は寒かつた。母の棺が置いてある小屋に父は二十数日の間、毎日じつと座り込んでいました。時にぼんやりと窓外の雪地を見つめ、時に「僕がテルを殺した！」と絶望して叫びました。早く棺を埋めないと、と諫めてくれた叔父は、狂ったようにあばれた父に何回も殴られました。

こんなに寒いところに埋められたら、テルがどんなに可哀相か、これを思うだけで父は胸が張り裂け

そうになりました。結局、棺が小屋から運び出されたのは、母が死んだ一か月もの後でした。

同年四月、父も亡くなりました。死因は長年にわたって患っていた腎炎でした。父はとうとう悲しみと悔いから立ち直れませんでした。いいえ、恐らく彼は立ち直ろうとは思わなかったでしょう。兄と私のことを叔父に頼んだ後、母を追いかけるようにこの世に何も未練を残さず去っていきました。

一九七四年、私は公営住宅の一部屋を与えられ、父の妻を砂漠地区のわが家にひきとりました。

その時、彼女は既に七十二歳になっていました。不運なことに、彼女と父の間に生まれた娘は十二年前にガンで死亡していました。

一人ぼっちになった父の妻は、親戚の家で手伝いをしたりして生活してきました。

学生時代に二回しか会わなかったこの女性が不幸だと、そしてそれがいくら古い習俗に帰結する事情があつたとしても、父にも責任があつたと、私はずっとそう思っていました。

心をこめて「お母さん」と呼ぶことはできませんでしたが、仲は悪くなく、八年も一緒に暮らしていました。彼女は私の娘の面倒をととても親切に見てくれました。保育園のなかった砂漠地帯にいる私は大いに助かりました。

私たちは時々昔のことを話し合いました。「父のことを恨みませんか?」「なぜ再婚しなかったのですか?」と聞きましたら、彼女はいつもこう答えました。「あなたのお父さん以外に気に入った男に一人も出会わなかったから」。

一九八四年、父の妻は辞世しました。享年八十二歳。彼女は故郷の劉家墓地に土葬されました。

これは、劉家の嫁としての彼女の宿願でした。

テルは、我が故郷からも、夫の故郷からも遠く離れている佳木斯の大地に眠っています。劉家に入

籍できなかったことと、日本の親類に会えなかったことによる感傷は、いまだに彼女の魂につきまといているかもしれません。けれども、彼女は淋しくないでしょう。自分が愛している、そして愛されているその人は、永遠にそばに寄り添っていてくれるのですから。

(一九九五年三月十四日)

〔筆者注〕上記の文章は、父親の弟、重慶時代の親友、そして彼の妻などから伺った話に基づいてまとめられたものです。

日本エスペランティストの皆様へ

「エスペラント」という言葉を初めて耳にしたのは私が十四歳の夏休みでした。父親側の叔父が十数年間も離れ離れになっていた兄妹を再会させるため、私と兄を家に招きました。

「君たちの両親はエスペランティストだった。お母さんは日本人だけど、立派な人だったんだよ。エスペラントで本を書き、詩をつくり、かなり有名な国際人士だった。日本人だけれど、ずっと中国人と一緒に日本侵略者と戦ったのだ」。一九五〇年代末の中国の激しい政情の中では、日本留学の経歴をもつだけで、社会主義に反するブルジョア分子と見なされ、自分の研究をやめさせられた叔父は、どんな複雑な心境で私たち兄妹にこれを語ったのでしょうか。

また幼稚園時代に「この子は日本人の子だ」とよく言われました。一歳くらいで両親に死なれた私にとって、「中国人の子や」「日本人の子や」と言われても、それが何を意味するのが全くわかりませんで

した。

私の小学校時代は、抗日戦争の教育が常に行われました。授業、映画、社会見学などはすべて日本侵略戦争に関するものばかりでした。恐ろしい万人坑、中国人虐殺の写真、そして自分の親類、いいえ村のほとんど全員が日本兵に殺されてしまった生存者の泣き声が、幼い私の心に焼きつけられ、日本人とはいったいどういうものかを教えられました。

恩と罪との情念の重なりあいの狭間をさまよった私は、自分が日本人だと思い込むようになりました。「日本に行きたい」「日本人に会いたい」という思いが、いつの頃からか心の奥に宿り始めました。

その後長い間、中国では激しい政治運動が繰り返し起こりました。次々に私を見舞う試験に耐えぬいてこれたのは、自分が優れた日本人の子だというアイデンティティが支えてくれたからです。

全日本中が戦争になだれ込んだ時に国の行方を憂慮したこと、ファシストの陰影が世界中を覆っている時にエスペラントを武器にし戦ったこと、日本のスパイと中国側に誤解されて香港に追放され、そこで貧民街の生活を忍んでいたこと、そして、漢口宣伝部のマイクの前に立ち、日本語で「誤って血を流してはいけない、あなたがたの敵は海を越えたこちら側にはいないのだ!」と日本兵の兄弟たちに呼びかけたこと……こうしたことをやってのけたのは、まさに一人の日本人でした。

母親のことを「エスペランティストのヴェルダ・マーヨ」というより、また「中国人の妻の緑川英子」というより、まず一人の人間というものの原点に揺らぎなく立っていた一人の日本人だったのだと、私は叔父の話聞いた時、はっきりそう思いました。自分も彼女のようにいつもその原点から離れず、信念を失わないように生き抜きたいと願いました。

五〇年代末から続いた中国の混乱期、人間の魂を愚弄する政治運動の中では、家族同士でさえ本音を

語ることができませんでした。このような時代の中国では、誠実に生きるのは決して容易なことではありませんでした。しかし、長谷川テルから受け継いだ、自分の運命を自らコントロールしたい性格の私は、そのように努力してきました。

高校時代、私は黙々と真実を見つめ、自分の進む方向を探していました。大学時代は、中国が最も暗い独裁体制の時期でしたが、自分の信念を裏切ることなく、自己否定の道を拒否しつづけるように懸命に頑張っていました。そのために、厳しい批判を受けたり、孤立の寂しさを味わわれたり、辺鄙な藤格里砂漠に下放されたりしました。しかし、苦勞はかならず報われます。苦難の歳月は私の心身を健康に育ててくれました。

中国人の乳を吸って成長しながら、私の中では「日本」を恋う思いが募るばかりでした。

中学生の頃、米軍に完全に占領された沖縄の女子たちの惨状を描いた映画、空襲で廃墟になった東京の町でオロオロしている子どもの姿、また広島原爆の焦土で呻きながら這っている人びとの絵本を見た時、名状し難い哀しみがこみ上げ、友たちに見られまいと思いつつも、涙が止まりませんでした。昭和天皇とマッカーサー司令官が一緒に撮った写真を見た時の、全身に受けた衝撃は一生忘れることができないものでした。

日本と日本人もあの戦争のため大変な苦痛をこうむりました。これは、日本侵略にひどい目にあつた中国人でも人間としての心で認められます。

しかし、敗戦の悔しき、占領された屈辱、貧困の苦しみ、さらに当時の日本人としての卑屈感までを私は感傷的に感じていました。それは、きつと私の中に流れている日本人の血のせいだったのでしよう。

『日本に行きたい』『日本人に会いたい』という気持ちは少しずつ『ノスタルジア』に変わっています。

た。

「日本に帰ろう！」と思うようになったのは、文革の荒波が終息する直前の「教育革命」の頃でした。当時、高校教師だった私は、教え子たちから信頼され、楽しく勤めていました。ところが、学校の教育が完全に廃棄された風潮の中で、その生徒たちに「日本人のスパイを打倒せよ!」「日本人の鬼出ていけ!」と怒鳴られ、家のガラス窓に石を投げられたのです。行先が見えなくなったその時、私は日本に帰ろうと本気で決意しました。『日中国交回復のような重大ニュースが一週間も遅れて伝えられた閉鎖的な藤格里砂漠でした。

そんなところにいた私を日本に迎えてくれたのが、日本エスペランティストの皆様でした。

その後、日本各界友好の人士の援助を頂いて留学、就職。そして家族を日本に呼び寄せ一緒に暮らすことになりました。

留学時代の日々も現在も、生活はいろんな面で「大変」と言っているでしょう。しかし、日本の土に足を踏みしめた瞬間から、ずっと一種の充実・満足感をしっかりと噛みしめてきました。それは険しい山道を登り、頂上に辿り着いたような充実・満足感です。たとえ風雪が荒れ狂う頂上であったとしても。数年来、日本の社会に馴染むため、できる限り愉快に暮らすために、主人、娘と共に静かに頑張ってきました。今、私たちは自らの力で自分が選んだ道の一つひとつの困難を乗り越えた喜びを享受しています。

今年が戦後五十年目です。自分なりのかたちで多くの方々々に期待されている『日中友好の架け橋』という「使命」を果たすべき時期になったと思います。賑やかな友好パーティーでもなく、よい聞こえのインタビューでもなく、自分の体験を生かし、生まれた故郷（中国）と心の故郷（日本）との人び

とのあいだに、あの戦争以来ずっと存在している溝を埋めるため力を尽くしたいのです。

歴史上には、癒し難い傷痕ばかりが残されているわけではありません。感銘すべき、記念すべき、感謝すべき出来事のほうもつと多いはずですが、それは、歴史をつくった人間の心の共通点が大いからこそです。その共通点を再認識してゆきたいのです。

長谷川テルの娘としての私は恵まれています。多くの方々のご援助がなければ、自分が自分であることをようやく見出している今の私はなかつたでしょう。今後も感謝の念を心に、前向きに歩みたいのです。

ここで私の初めての本音を、最初に私に温かい手を差し延べて下さった日本エスペランティストの皆様捧げます。

(一九九五年一月)

長かった五十年——

戦争の悲劇を乗り越えて、真の信頼関係を築くために

昨年暮れ、米国郵政会社の「キノコ雲」切手問題は、日本人に不快と反発を起こした。米国人は「戦争の終結を早めるため」という原爆投下の正当性を強調したが、日本人は、実験のネズミやモルモットにしか見なされなかつた屈辱と痛ましい被爆経験を忘れない。

東京の大空襲、沖縄の決戦、そしてヒロシマ・ナガサキの原爆で無数の日本人が惨憺たる犠牲を強い

られた。残された親類や友人は五十数年たっても依然として、その無残の死の哀しみにつきまといわ
れる。

アジア諸国の人々も、戦争の中で失われた親類と同胞の無残の死の哀しみを簡単には忘れられない。

戦前、中国で日本兵向けの反戦放送に携わった国際エスペランティスト・長谷川テルの娘として生ま
れ、中国で四十年間暮らした私は、戦争中ひどい目に遭った中国人の心の傷跡がどれほど残っているか
よく知っている。ある日突然、侵略してきた異人は、親類を虐殺し、財産を奪い、そして家を焼いた。
数千万にのぼった犠牲者の中に、無罪の平民と無抵抗の農民は少なくなかった。中国人は、親類の、同
胞の死を哀しんでやまなかった。その苦しみと災いをもたらした異人を恨んだ。

「済んだことより先のことの方が大事だ」と寛容な中国人はよく言う。中国人はかつての不幸を忘れよう
としているが、日本側が強調する被害者としての意識が、彼らに苦難に満ちた往時を思い出させている。
靖国神社の公式参拝は、中国人にはあの戦争の恨みを引き起こさせている。国家が戦争責任を負うこと
が戦没者を冒瀆することになるといふ一部の日本人の考えが、中国人には理解できない。殺された人の
命より、殺した人の命の方が尊いのだろうか。他の国の人々の命を奪った将校らを聖戦犠牲者の英霊と
して扱う行為は、アジアの人たちには、日本が過去への反省を拒否し続けているとしか受け止められな
い。

歴史認識に差異があるのは免れないが、人類の平和と繁栄が、国と国、人と人との真の理解・信頼の
上にしか築けないという貴重な歴史教訓は軽視できない。日本が、かつてあれだけの惨禍をこうむらせ
た反省を踏まえる気持ちに本当になっているなら、今回の「国会決議」は、決してあのような「難産」
で生まれなかつただろう。アジアの国々と真の友好関係を築く一歩にしようと思うのなら、決して今の

「文あつて心なし」という決議文にはならなかつたはずだ。日本政府の「誠意」までが隣国の人々に嫌われても仕方がない。

戦後の日本は、国民の努力で見事に廃墟から立ち上がり、経済大国になった。現在、米国とともに世界経済運営の重責を担っている。国際的貢献とアジア諸国への援助もますます期待されている。日本の国際存在の大きさは、国民にとって本当に誇るべきことである。

しかし、日本の国際的評価は国民のゆるぎない努力にふさわしくなく、政治力は経済力に見合わないと言わざるを得ない。時に海外からの批判の中には日本と日本人への誤解、偏見も見られる。ことによつては、各国と対等に向き合つて国際問題に対応することさえできないように見える。

その主たる原因は戦争責任問題を未決のままに引き伸ばしてきたことにある。日本の背負っている歴史の荷物は重すぎる。過去を歪めることは歴史を背負つて生きる日本の現在と未来を歪めることになる。そして、その重荷を自らの手で下ろさない限り、日本はいつまでたつても諸外国と対等な外交関係を作り上げることはできない。日本への信頼を損ない続け、国民に不幸をもたらすことは疑う余地がない。国際社会の一員として、いつでも、どんな問題に対しても堂々と自分の主張を申し出られる国になるためには、日本は心から過去を清算することから始めなければならない。そのためにずっと努力している国民の誠意を素直にアジア諸国の人々に伝えなければならない。

五十年は長かつたけれども、この節目の年は新しい里程標になれる。戦争の悲劇を乗り越えて真の信頼関係を築く最後の機会を逃さないことを私は心より願っている。

(一九九五年八月)

歴史をつくる・未来をつくる

おさききみこ
尾崎祈美子

(中国放送ディレクター)

「歴史をつくるのは権力者でなく、一人ひとりの民衆である」

学生時代、中国革命に心惹かれていた。卒業論文のテーマは長谷川テル。世間の枠組みでなく、自分の内なる声に従い続けた彼女の生き方は私のあこがれだった。

あれから十五年。広島放送局で働き、戦争と平和の問題、おもに旧日本軍が中国に遺棄した化学兵器の取材を続ける私は、今改めてテルさんの存在の大きさ、かけがえのなさを感じている。

毒ガスといえば、イラン・イラク戦争で使われたり、最近では地下鉄サリン事件などでその恐ろしさが知られているが、戦時中日本は毒ガスを大量に製造し国際法に違反して使用していた。この事実は、米国の政治的配慮によって東京裁判で不問にふされたため、日本政府はその事実を認めることなく、国民にも知らされることがなかった。つまり「臭いものに蓋」をしてきたのである。

ところが一九九〇年以降、中国政府が日本が中国に遺棄した毒ガス弾の廃棄を要求してきた。このため遺棄毒ガス弾の存在は国際社会でも注目され、「蓋」を開けざるをえなくなったのである。

中国に残された毒ガス弾は日本政府の調査によると約七十万発、中国東北部（旧満州）に最も多く、山西省や江蘇省、内モンゴル自治区など全土二十箇所にも及んでいる。

旧日本軍は二千回以上毒ガスを使用し、民間人を含めて少なくとも九万四千人の中国人を死傷したとされる。敗戦の混乱のなかで、現地の河川や海、池、湖、畑などに毒ガス兵器を遺棄した。その結果、戦後も中国の人びとを苦しめ続け、日本の遺棄ガス兵器で二千人以上が死傷したという。

日中両国政府は秘密裏にこの問題を協議してきたが、一九九五年になって日本政府は廃棄の責任を認め、今年一九九九年七月、処理について最終的な合意をまとめた覚書に調印するにいたった。そのため

の国家予算は数千億が見積もられている。

解決への動きを歓迎する一方、私たち国民が遺棄弾処理にお金だけ負担し（させられ）ており、一連の歴史事実から教訓を学ぶ機会を、十分得ていないようにみえるのが残念である。

なぜ日本の毒ガスが中国にあるのか。なぜ、このように長い間そのままになってきたのか。この負の遺産の持つ意味は何か。そのことを問い直し、歴史として私たちの心に刻まなければ、本当に責任をとったことにはならないのではないだろうか。「歴史は繰り返さない。だが、何かが歴史にならなかつたところ、歴史を作らなかつたところでは、歴史はまるごと繰り返す」という言葉のように……。

毒ガス工場で働いた人びとは、おもに化学式や軍事知識とは縁のない普通の農民や漁民で、女性や子どもも含まれていた。彼らの多くは肺がん、慢性気管支炎などの後遺症で亡くなったり、現在も苦しみつづけている。毒ガスは「敵」も「味方」も関係なく、人びとを苦しめ、戦争が終わった後も、心と身体に癒しがたい傷を負わせている。

毒ガスに関わらざるを得なかつた一人ひとりの普通の日本人たち。彼らは「お国のために」といったその時代の価値観と枠組みのなかで真面目に働き、上官の命令に従ったのである。その結果、半世紀も未来に負の遺産をのこすことになるとは、その当時は想像すらしなかつただろう。

後の世代の私たちが、彼らになぜ毒ガスなど作つたのか、と問うのは簡単だ。だが私たち自身、真面目に働いた結果、知らず知らずのうちに未来に負の遺産を残すということをやっていないだろうか。

中国の大地に残された膨大な日本の毒ガス兵器。その廃棄作業は二十一世紀に引き継がれる。

遺棄毒ガスのことは決して過去の出来事でなく、私たちがどんな未来を創るかということなのだ。

グループ紹介



嵐山でのワークショップ

大阪市立婦人 会館 自主グループ 連絡協議会

大阪市立婦人会館は、大阪市地域婦人団体協議会の「二日一円募金」から建設計画が始まり、一九六二（昭和三十七）年、全国に先駆けて公立の社会教育施設として開館しました。

婦人会館の歴史は、女性史であるといわれます。会館当初は、生活に潤いをもたらすものとしての教室、例えば、「ホームマネージメント教室」「手芸教室」、庭園や屋上を利用した「夕涼みパーティ」「のだての会」など、いわゆる趣味やお稽古の講座が開設されています。

一九七五（昭和五十）年の「国際婦人年」と、それに続く「国連婦人の十年」という時代背景の中で、大阪市立婦人会館の事業内容も大きく変化、女性問題を講座の柱にし、すべての講座に女性問題の視点が取り入れられるようになりました。中でも「二年制講座」という、一人の講師が二年間かかわる長期のプログラムは全国でここだけです。

また、女性問題を女性だけの問題とするのではなく、男性にも積極的に参加を呼びかけようと、一九九四（平成六）年には男性学の視点を入れた講座が取り入れられています。

グループ育成事業も積極的に行われ、グループ連絡協議会の基礎となる〈婦人会館友の会〉は、開館当初から発足しています。また、講座修了生による自主グループの育成・援助も行われてきました。時代の先端をいく画期的な施設として、ハード・ソフト両面において、全国の多くの施設のモデルとなってきました。

〈自主グループ連絡協議会〉は、会館の主催講座から生まれた自主グループが、さらなる学習とネットワークを目的として、一九八三年に生まれました。

多様な活動内容を持つ多数のグループが、講演会・館外学習会・連協まつり・連協ニュース発行などの活動を通してネットワークを深めてきました。婦人会館の主催講座も時代とともに大きく変化

してきましたが、開館当初から活動しているグループと、今年生まれたグループが世代を越えて共に活動できることは、グループ連絡協議会の大きな特色です。現在入会しているのは、三十一グループ。

それぞれのグループから代表を出して運営しています。全会員数は五百九名です。

大阪市立婦人会館は、現在は仮庁舎に移転、跡地には「クレオ大阪中央」(女性いきいきセンター中央館)が建設されることが決定しています。ところが、今度建設される「クレオ大阪中央」は、市民局の施設となり、運営は財団、いわゆる第三セクターです。私たちには不安や心配がたくさんあります。今まで婦人会館で活動していたグループが続けてやっていけるのだろうか……。

そこで、私たち(自主グループ連絡協議会)は、クレオ中央館の話を持ち上がった時から、さまざまな活動を続けてきました。

一昨年に連絡協議会十五周年記念誌発

行、同じく十二月に行なったフォーラム「婦人会館の明日を考える」が「あざら238号 女性と女性センターII」に取り上げられ、全国に発信されました。

昨年度は、大阪府地域活動女性グループ支援助成を受け、自主グループにアンケート調査を行い、報告書「学び続けるために・グループ活動調査から見えてくるもの」を作成。このアンケート結果をふまえて、昨年十二月五日にフォーラム「学ぶ女たちのネットワーク」を開催しました。

そして昨年行なった事業の結果報告として、今年8月6日(金)〜8日(日)の三日間、埼玉県嵐山の国立婦人教育会館で行なわれた「女性学・ジェンダー研究フォーラム」でワークショップ「女性が学び続けるために〜大阪市立婦人会館自主グループのアンケート調査から〜」を開催しました。このワークショップをまた次につなげるために、報告書を冊子にまとめ、報告会開催の予定です(ワー

クショップの詳しい内容は「集会から」をご覧ください。

ワークショップ運営者のプロフィール

片山生子(花つな)(写真左)

一九八八・八九年の「おんなの昭和史・

今歴史から学ぶ」の修了生。最近の活動

は、三年がかりで「良妻賢母論」を読破

一昨年冊子が完成。

澤田和子(夕陽丘女性史グループ)

二年制講座の第一回(一九八一・八二年)

「私たちの婦人問題講座・女性史コース」

の修了生。「女性と平和に関するあらゆる

問題」に取り組み、「家庭・職場・近隣の

人達と共に差別のない社会生活」を目指

して運動を続けている。

浜田容子(ドキドキ考古学)(写真右)

一九九二年「大阪の歴史を掘る・文化財

発掘ボランティア入門」講座修了生。発

足当初から数々のボランティア活動と古

代史学習を続けている。活動誌「五周年記念誌」「大阪発 衣食縄文」を発行。

アジア太平洋NGO会議、バンコクで開催

来年6月ニューヨークで開かれる国連女性二〇〇〇年会議に向けて、アジア太平洋地域のNGOオルタナティブ・レポートを作成する「アジア太平洋地域(中央アジア・南アジア・東南アジア・東アジア・太平洋)NGO会議」が、8月31日―9月3日バンコク市で開かれ、二十七か国、四百名が参加、日本からは「NGOレポートをつくる会」の中村道子代表ら二十九名と、直接申し込みの十二名が参加した。アジア各サブ地域の報告、北京行動綱領十二領域別のワークショップを経て、全体会議で採択されたレポート・決議文は、10月26日―29日にESCAP(アジア太平洋経済社会委員会)が主催する「アジア太平洋公式準備会合」(ESCAPハイレベル政府間会議)に提案され、来年2月の「第四十四回国連女性の地位委員会」でまとめられる「グローバルなNGOオルタナティブレポート」に盛り込

まれる。

〈NGOレポートをつくる会〉(03・3407・7922)は、「アジア太平洋地域NGO会議」シンポジウムレポートと決議文をまとめ、ホームページに掲載する予定
(www.jca.apc.org/aworac/bpfa/index)。同会作成の『NGOレポート』は千円(送料二百円)で販売中。

インターネットで世界フォーラムに参加しよう

女性二〇〇〇年会議に先立ち、国連の「Women Watch」では、全世界規模でのインターネットによる「北京会議+5(北京会議より5年)」世界フォーラムを行なう。このフォーラムに参加・貢献すると、その情報は、直接国連総会の進捗評価報告と今後の活動に対する勧告書に加えられると同時に、国連総会への参加許可が出る可能性が大きくなる。ワーキング・グループの討議内容は、

①男女平等を徹底するために有効な、政策、規制、戦略

および推進協力団体

②行政組織、企業や団体における成功した活動のケーススタディや事例紹介

③いまだに存在する問題点やその解決手段など

④今後も推進すべき活動

〔ワーキング・グループ一覧〕

女性に対する暴力（10月～2000年1月）

女性の経済的不平等の停止（9月6日～10月15日）

環境保護に対する女性の役割の強化（同右）

権力と政策決定の場への女性参加（同右）

女性の健康の確保と増強（同右）

貧困女性の救済（10月11日～11月19日）

女性と武力衝突（同右）

教育における男女平等の実現（同右）

女性とメディア（11月8日から12月17日まで）

女児の育成強化（同右）

女性の人権の明確化（同右）

◆参加申込みには英文の専用書式が必要なので、

〈Women Watch〉のホームページ（www.un.org/womenwatch）を参照のこと（あくまでも書式がある

ので、03・3354・3941にお問い合わせを）。電子メールでの申し込み先はbeijingplus5@edc.org。ワーキング・グループ討議開始の一週間前までに参加すれば、討議の詳細についての情報が届く。なお、詳しい情報はJanice Brodman EDC(jbrodman@edc.org)でも手に入る。（小川俣子）

国連、戦時下性暴力非難決議

国連人権保護小委員会（旧差別防止・少数者保護小委員会）は8月26日、「戦時下の女性に対する組織的レイプ、性的奴隷の強要は、人道に対する犯罪であり、国際刑事裁判所で裁かれるべき」と、「戦時下の女性に対する性暴力」を強く非難する決議を賛成多数で採択した。

従軍慰安婦問題を追及するマクドゥーガル報告者は、これに先立つ16日、「日本政府は国際法上の義務を十分果たしていない」と述べたが、決議文には慰安婦問題は盛り込まれず、「戦時下性暴力に関する国家と個人の権利侵害は、平和条約、平和協定、恩赦によって消滅することはない」との指摘にとどまった。

周辺事態法施行

5月24日に成立した「周辺事態法」が、8月25日に施行された。しかし「周辺事態」の範囲、国会承認が事後となる「緊急時」の定義など、あいまいな点が多く、特に自治体首長からは、軍事協力を要請されることを懸念する声が強し。住民が自治体を支えて抵抗し切れるかどうかが今後の運動の焦点になる。

各地で男女共同参画社会基本条例づくり

基本法に自治体の責任が明記され、各自治体で基本条例策定の動きが活発に。東京都はすでに案を発表したが、急ぐよりは、地域の声を吸い上げた、「国を上回る基本条例」をつくることが望まれる。

主婦の社会保険料、税金優遇に批判の声

来年度は年金・税制の見直しの年。企業年金の破綻に代

わる「日本版401K」導入の動きも活発になったが、大企業に勤める高所得者と主婦が優遇されているとの批判も強い。10月からは介護給付の認定も始まるが、「社会保険料も税金も払ったことのない主婦が、給付だけは平素に受けられるとは」と、不満も噴出してている。

見直しを迫られるNPO法

日本NPOセンター、シーズ、さわやか福祉財団がNPO法人化申請をした六七九団体にアンケートした結果では、回答した四〇二団体の二三%が、申請時点から窓口の官僚的対応に驚き、NPOへの寄付が所得の控除にならないことにはほとんど全団体が不満を持っていることがわかった。NPO法の附則では施行から三年以内に再検討されることになっている。認証の方法や寄付控除制度の見直しが早急に望まれるが、一方ではいち早くNPO登録した団体が自治体に登用されており、「官N癒着」が早くも問題視されている。

NPOの八〇%は活動資金に苦しんでいる。郵貯のボランティア貯金からもNPO支援が期待されている。

女性八四・〇一、男性七七・一六

平均寿命は九八年度も女性が圧倒的に上位。厚生省の発表では、前年比〇・一九歳伸びたが、男性は〇・〇三低下。不況下男性の自殺の急増がその一因とは、男性にもジェンダーの問題が。

多発するセクハラ事件

上司や教師によるセクハラは、かねてから問題になっていたが、最近では警官やテレビ局員等の例も続出。セクハラが増えたというよりは、耐えていた女性たちが、やっと声をあげるようになった、ということかもしれない。

低用量ピル「解禁」

ようやく認可された低用量の経口避妊薬が、9月2日発売された。「解禁」とは言っても、医者の処方が必要で、医療保険も適用されない。歓迎の一方、人体への悪影響を指

摘する声も根強く、専門家の間でも意見が分かれる。

性感染症（STD）患者数、女性上位

厚生省研究班の調査結果では、STD患者数は全国で約六十万人、胃と腸のがん患者の総数にほぼ等しい。うち、女性三五万人、男性二五万人で、女性が一・四倍。特に性器ヘルペスやクラミジアは、男の二・五倍に。STDは、将来、肝炎や、がん、エイズなどをおこすものもあると危惧されている。なお、厚生省は発表しなかったが、日赤血液センターの情報によれば、献血者の中から、東京で女子高生のHIVが発見されている。

一票の格差4・99倍でも合憲

九八年の参院選での、一票の格差4・99は選挙権の平等を保障した憲法に違反」と関東一都三県の有権者が選挙を訴えていた訴訟で、東京高裁は選挙無効請求を棄却した。「選挙権の平等」という点では、小選挙区制も違憲なのでは……。



女性学・ジェンダー研究フォーラム

— 大阪発のワークショップから

〔その1〕 大阪市立婦人会館自主グループ連絡協議会

今年も嵐山に女たちの暑い夏がやってきた。8月6日（金）～8日（日）の三日間、埼玉県比企郡嵐山町の国立婦人教育会館で、女性学・ジェンダー研究フォーラムが開催された。昨年は、一参加者として出来る限りのワークショップをのぞき、全国にはとても元気な女たちがいるんだと目からウロコ状態だった。来年はここでワークショップをしようと思いを馳らせて帰阪した。そして今年、百六十もの応募の中から九十六グループが選ばれ、その一つに入ったことは、嬉しいと同時に責任の重さも感じた。

私たち〈大阪市立婦人会館 自主グループ連絡協議会〉が主催したワークショップは「女性が学び続けるために— 大阪市立婦人会館自主グループのアンケート調査から—」。

連絡協議会は一〇八ページ「グループ紹介」で述べたように、さまざまな活動を続けてきた。この結果をワークショップで報告し、全国の参加者の声を聞き、地域の現状を知り、情報交換やネットワークを持ちたいと考えた。

まず、スライド『学んでチャレンジ 婦人会館物語』を上映した。このスライドは、大阪市立婦人会館三十五周年（一九九七年）を記念して、会館と自主グループ（ヘドキドキ考古学）が共催して制作した。資料提供や制作費用など、会館側の協力により歴史的な価値のあるものとなった。

昨年度行なったアンケートは、私たちの学習の拠点である婦人会館の主催講座から発足したグループ・何らかの事情でグループに発展しなかったところ・関わって下さった講師の方々にお願した。現在も活躍しているグループのアンケート結果で、「グループ結成の動機は？」という答えとして、「続けて学習したかった」がほぼ半数。「開館当初は、まだ生涯学習という言葉もなかった時代で女性が学校を卒業したあと、家庭の外で学ぶチャンスがほとんどなかった。学びの場を提供し続けた婦人会館というのは、非常に大きな存在意義をもっていた。」（講師の白石玲子さん）。また、約二〇%が「会館の職員からすすめられた」と答え、大阪

と東京にしかない社会教育主事という専門職員が、グループ発足や育成・助成に大きく関わってくる。

このアンケート結果をふまえて、昨年十二月五日にフォーラム「学ぶ女たちのネットワーク」を開催した。パネラーは、加藤美恵子さん（女性史研究者・島本町議会議員）・川西渥子さん（弁護士）・白石玲子さん（神戸市看護大学教授）、いずれも二年制講座の講師の方々である。女性が外に出る第一歩としての学び、グループづくり、仲間づくりが、これからの男女共生に向けて、共に活動できるような方法をと昨年は研究学習した。このフォーラムは、私たちの活動を振り返り、今後の方向性を探る機会となった。

ワークショップの後半はフリートーク。女性センターの講座の持ち方についての悩みや、参加者の地域の現状などを報告して頂いた。北海道・草津・富山・静岡・東京・滋賀……全国各地の女性が集まった。女性センターについて、まだできていないところ、財政難で先行きの見えないところもあり、人生のような例え話にもなりそうだ。

大阪市婦人会館は生活文化講座・趣味の講座から女性問題講座へ、男女共同参画を取り入れた講座へと、まるで全国的女性センターのお母さんの存在・モデルともいえる。

自主グループについても、三十七年前に誕生している趣味のグループ・女性問題講座からの学習グループ・社会的な広がりを持つボランティアグループが、現在の連絡協議会の会員グループだが、これからは、男性も多く参加するような多様な広がりをもせる可能性が強い。さまざまな人びとが交流するネットワークの場として、連絡協議会は新しいセンターになっても受け継いでもらいたいと願う。

このような活動を続け、声をあげ続け、それを何らかの形にして残していくことが、学び続けるために、私たちの拠点をよりよくするためには必要と考えている。（浜田容子）

〔その2〕

〈あごら大阪〉はワークショップ「女性センターと女性のいい関係とは？」を開催した。

〈あごら〉ではこれから全国各地で建設される女性センターや既存の女性施設を取材し、『女性センターⅠ・Ⅱ・Ⅲ』号を発刊したが、そのⅠ・Ⅱ号の編集に携わった渋谷典子さん（あごらウイン）の意見の発表を受けて、全国各地から集まった参加者の意見を聞き、二十一世紀男女共生社会に役立つ女性センターを皆で考えたいという企画だった。

渋谷さんは名古屋市男女共同参画センター（仮称）の設

置に向けての提言をまとめられた資料に基づいて発表し、それを受けて会場から活発な発言があった。行政側（女性センターの職員）や、嘱託やボランティアとして女性施設の運営に携わっておられる方の意見も多く、施設も大切だが利用者（職員）とのコミュニケーションが大切だと感じた。また、新しく建設される場所、既存の建物を立て替えた、大阪市立婦人会館のように施設の内容が変わるところ、それぞれ違いはあるが、ハード、ソフト両面で施設を利用する住民の意見を取り入れてほしいという意見が多かった。アンケートをまとめると、女性センターはこれからも必要という回答が多く、施設の条件についても、望む施設（会議室、講演会場、和室、図書室・資料室、コピー機、FAX、印刷機、製本機、パソコン、ワープロ、ビデオ、喫茶室、食堂、売店）などすべて必要との答えが目につく。今回は七十五名もの多数の方の参加があり、いかに今後女性センターが大切かがわかる。「今後男女共同参画推進センターを設立の予定なので、今回のワークショップが大変参考になった」とアンケートに書いていただいたことはいれたいことであった。

（澤田和子）

〈アンケートから〉

Q I、あなたの居住地には、女性センターがある 17 ない 16

2、「ある」の人、役に立っていますか

①非常に役立つ 5 ③あまり役立たない 3

②かなり役立つ 7 ④全然役に立たない 1

3、「役に立っている」理由

①講演会、講座の会場 11 ⑤資料調べ 5

②仲間内の学習会 10 ⑥相談機関 4

③活動の作業場 8 ⑦他のグループと交流 4

④コピー機、印刷機等利用 7

4、「役に立っていない」理由

①場所が不便 3 ③相談機関がない 1

②資料室がない 2 ④託児施設がない 1

Q II 女性センターが近所でない方に

他地域の女性センターは利用したことが

①ある 11 ②ない 5

Q III 女性センターは今後とも必要ですか？

①必要 25

②これ以上箱ものは不用。ソフトの充実を 4

Q IV あなたが望む「女性センターの条件」は？

①建物を造る前から、委員を民間から公募してアイデアを練ってほしい 26

②利用予定者から、十分なアンケートをとること 20

〈意見・感想〉

★秋には女性施設をと、行政に働きかけている。新しい建物でなく、空いているハコモノを利用して、と。まだ産声を上げたばかりです。 (秋田市)

★弘前市長は選挙で「女性センターを作る」と言いました。すでに二期目の半分くらいになりますが、まだ予定地も決まっています。青森県では、来年女性センターが新しくなります。 (青森県弘前市)

★行政のリーダーによって女性センターは変わります。市民も変わります。行政の方は仕事としての移動であつてもついた以上は学習してほしい。 (三重県四日市市)

★このようなワークショップに市の政策担当者もつと出てくるべきですよ。 (埼玉県鶴ヶ島市)

★豪華な施設はあるけれど、運営管理上の不都合は山積。利用者が貸し館の客だと思われている現実を変えなければ。女性のエンパワーメントは難しいですね。 (富山市)

8・15女性のつどい

毎年8月15日に渋谷ハチ公前で開いていたリレートークは、右翼の妨害が激しさを加え、中断していたが、三年ぶりに、東京ウィメンズプラザで開かれた。今年も新聞も右傾化、予告記事が全く出ず、集まりが心配されたが、悪法量産国会への憤りもあって、ふたを開けてみると会場は満員。恒例の吉武輝子さんの司会で、壇上に各方面の女性たちが次々に登場。超多忙の土井たか子さんも駆け付けて、「憂うべき状況だが、今は女性に参政権がある」と訴えた。終盤国会で活躍した円より子さんからは、何とか廃案に持ち込もうとしたあの手の手の苦勞話。山崎朋子さんから潜水艦の艦長として艦と運命を共にした父上が、初めは売国奴として報じられ迫害を受け、その業績が判明して二階級特進が一面トップ記事になると家族の評価も一変した秘話を。小林カツ代さんは、大陸を転戦した父上が中国で暴虐を働いた戦友に、最後まで「自分は忘れないぞ」と言い続けたなど、感慨深い話が続いた。その後は全員でデモ。この動きを今後の行動につなげる第二弾が期待される。(千)

とそっぽを向かれがちな、フェミニズムのテーマをしっかりと体現していた。面白ければ、食いつくのだ。「面白くなければ、食いつかない」道理を、「べき論に縛られ笑い飛ばせない」自分の日常と引き比べ、確認しないではいられない。

そんなもろもろの自縛から解放され、女装も趣味の一つにしてしまった三橋順子さんはとても羨ましい存在だ。彼自身も強調するように「ヴィシビリティ（目の前に存在すること）のインパクト」は大きい。もともと二流市民に生まれついた我々女性たちは、彼が説く「男女二分的性別秩序の矛盾や欺瞞」は、ある意味で（個人差の大小も含めて）とっくに体験済みである。もちろん、「そんなもん無い」「わたしは感じない」派のほうが多数派であるのは認める。そんな実感を口にした日には「被害妄想だ」「おかしい」と、かつてのウーマンリブの闘士たちが受けたような目に合わされるかもしれない。あの揶揄と嘲笑とからかいは、なんだったんだろう。『からかひの政治学』（江原由美子著・学陽書房）を読むと、その辺りの気配はうかがえる。

「街中の女装者」としての三橋さんは、「そこの男のお姉ちゃん」とか「そこの彼女」とは呼ばれても、「女の格好をしたお兄ちゃん」とは決して呼ばれないと強調する。「オーイ、彼女」とは呼ばれても「オーイ、彼」と声をかけられることは決してないと。社会的に女扱いされることで、社会的に劣位におかれる痛み（セクハラやレイプまがい）も体験した人の言葉は、やはり重い。

◎（男性に対しては）心に内在する男性性の揺らぎの増幅装置

◎（社会に対しては）男女二分制社会の枠組みの振動装置

男女二分制社会の矛盾をあぶり出す「触媒」

◎性二分社会の虚構性の証明

彼によれば、この三点が異性装のもたらすゆらぎ、だという。実行力のあるところがまた面白い。「レディス・デー」には、仲間とホテルやレストランへ出掛け、「すいません、わたしら、どっちでしょう」とたずね、相手の出方を観察したり、大島一日クルージングにお仲間十人で出掛け、交渉のすえ、男 3800 円；女 2800 円のチケットを五枚ずつ購入したりもする。

Transvestite IV

(トランス・ベスタイトIV)

奥川 睦

漫画が隆盛を極めはじめてから久しい。『日本では、電車の中で堂々と大人が漫画を読んでいる』と外国の人たちに驚かれて恥ずかしい、なんて記事が新聞紙上をにぎわせていたのは、二十年前のことだろうか。今では、そんなことをわざわざ言ったりする人もいない。それほど、漫画はデンとこの社会に根を張って存在してしまっている。外貨の稼ぎ頭でもあるらしいことは、旅をしていると、よくわかる。イタリアは、その中でも上得意のようで、ローマのホテルでチャンネルをいじっていると日本の懐かしいアニメがいくらかでも簡単に見られる。

数年前ベネルクス三国を訪れたときも、『Dr. スランプ アラレちゃん』のシリーズを、たまたま入った本屋さんで見て「ワーオー！」と声をあげそうになった。まさに、ピッシリ、ギッシリという感じだった。『ドラえもん』や『ドラゴンボール』もあった。今なら、『ピカチュウ』なんかがズラーなんだろう。帰国してすぐ、藤子不二夫の一人（安孫子さんのほう）が亡くなられて、TIME の訃報記事を見た。そこにある「稼ぎ高……ドル」の記述に「さもありません！」と素直にうなずいた。ベネルクスで見た本屋さんの光景が浮かばなければ「そんなものでそんなに稼げるの？」としか思えなかったと思う。

と、言いながら私はどうしても漫画を読む気がしない人間だ。よほどの暇つぶしに傍にある漫画や週刊誌に手を伸ばすといった程度からは、決して出ないというか出られない。これほどの活字中毒が、である。「漫画を読まないから、時代が読めない。ダサイのだ」と娘に教育されたこともある。その時は感心して「スゴイ！」とうなることがあり「なにを感心しとるん。これが漫画なんよ」と馬鹿にされたりする。が、やはり自分からは、手が出ない。確かに漫画の世界は思考の浮遊が簡単と見えて、バンパイアの兄弟（姉妹）愛に始まって、レズっほいのから親子の近親相姦のようなタブーがやすやすと外れてしまうようだ。水がかかったら男から女になる『乱麻1/2』や、階段を転げ落ちて男と女の体が入れ替わってしまう『転校生』などなど、フェミニズムなどブッ飛んでしまいそうなテーマがズラリ揃っている。

大林宣彦監督が尾道を舞台に映画化した『転校生』は、〈古い・堅い・ダサイ〉

沖繩戦の実相を薄める県の姿勢——新平和資料館問題

来年三月に開館予定の新県平和記念資料館（糸満市摩文仁）の展示について、監修委員会が提案した壕の復元模型の「日本兵の加害」を示す部分を、県が監修委員の承諾を得ないまま、残虐性を薄める形で内容を大幅に変更していたことが8月10日までにわかった。

変更後の模型では、壕の中で住民に銃を向けた日本兵から銃が削除され、負傷兵に青酸カリ入りのコンデンスミルクで自決を迫る兵士も削除されている。銃の日本兵は監修委員の指摘で復活する予定だが、削除が太田守胤県文化国際局次長の指示であることも明らかになった。この問題について、稲嶺恵一県知事は30日午前、「沖繩戦の実相を伝えるにはいろいろな選択がある」と述べ、展示変更は選択肢の一つとしてありうるとの立場を説明した。日本軍の残虐性を薄める変更が沖繩戦の実相を伝えるのに妥当であるかについては、「監修委員会に出す前なのでコメントできない」と明言を避けた。

なお、監修委員会が9月10日午後、新資料館内で開かれた。太田文化国際局次長は詳しい変更作業の経緯や内容について、20日の監修委員会全体会議の場で副知事も交えて報告することを伝えたという。さらに県側に監修委員会で決定した展示内容について、任期中も無断で変更しないことを求めた。

県、八重山平和資料館にも展示変更指示

県文化国際局は「戦争マラリア」の実相を伝えるため、今年5月に開館した八重山平和記念館の展示についても、監修委員の決定後に行政指導で一部変更を計画していたことが8月30日までに明らかになった。変更は「集団自決」とみられる写真の展示を削除しようとしたもの。開館前の5月中旬、石垣市で県文化国際局の担当者が五人の地元監修委員に展示見送りを伝え、委員の反発を招いたため、写真の説明文で「集団自決」と断定せず「沖繩戦で犠牲になった人びと」として展示することになった。担当者は「写真を下ろすと言ったことはない」と否定したが、監修委員の潮

平正道石垣市文化協会副会長は「間違はなく写真を下ろすと言った。監修委員会で積み上げたことを開館直前で行政だけで変更したことは許されない」と憤る。

なお、その他の展示写真や図画の説明文についても、県文化国際局が専門委員や監修委員への相談なしに、行政内部で大幅に削除や差し替えをしていたことが9月11日までに明らかになった。たとえば戦争マラリアの患者の写真で「体が焼けるような高熱に苦しんだ」などの具体的な記述が全面的に差し替えられたり、平喜名飛行場の絵の説明で「地元民や朝鮮人を動員して飛行場の整備を図った」とする部分が削除されるなど、沖縄戦と戦争マラリアに関する写真や図画二十七点のうち、大幅な変更は十一点上っている。写真説明は専門委員の保坂広志琉球大学教授が監修委員の意見、基本計画、西表島での現地調査、沖縄戦と戦争マラリアの歴史的事実を踏まえて文章を練り上げたにもかかわらず、県側から保坂教授への変更説明は一切なかった。保坂教授は「これは修正ではなく、沖縄戦の実相への改ざんだ。県には正義がない」と述べ、近く県に説明を求める。

「沖縄戦の真実伝えよう」平和資料館問題でシンポ

新県平和祈念資料館の展示内容変更問題で〈沖縄戦一フイート運動の会〉〈沖縄平和ネットワーク〉〈県歴史教育者協議会〉の三団体は、9月18日午後、那覇市の八汐荘で「沖縄戦の真実をどう語り伝えるか——新県平和祈念資料館問題緊急シンポジウム」を開催。第一部で新資料館の経過説明や八重山平和祈念館の現状と問題点などの報告、第二部で戦争経験者や沖縄研究者ら参加者からの意見発表が行われた。シンポジウムには三百人余りが参加、会場からは「ありのままの事実を展示してほしい」「事実を曲解することは、歴史に逆行することになる」などの声が相次いだ。

最後に①展示内容の変更作業の事実経過、展示内容の公開②新資料館の独立性や活動を保障する条例制定や専門員の配置③八重山平和祈念館の展示説明文削除の差し戻し④監修委員の任期を開館までとすること——を県に求める決議書を採択。この要請決議書は同実行委員会が県に手渡す方針。

語りかけたあなたへ 24

大里知子

四十数年前のこと

以前は、少しでもカッコーよくしていたいと思って、パーマをかけたリカットをしたりと、わりによく髪の手入れをするほうだった。

ところが、最近は全身のしびれと締めつけが苦しくて、よくよくのびてからでないとカットしてこようという気が起こらなくなってしまうている。今度も、あまり髪が長くなってうっとうしくなったから、美容院へ行ってカットをしてきた。

ちようど午後の時間のせいか、ほかにお客さんいなかったので、美容師の佐藤チエさんと少しおしゃべりができた。

佐藤さんも子どもの頃から花輪に住んでいるため、もちろん私の小さい頃のことを知っている。いろいろ話しているうちに、父のところへ受診に来るといつも陰の部屋から私や家族の話し声とか笑い声が聞こえたものだったと言われ、急に四十数年前のことが懐かしく思い出されてきた。

父は普通の住宅を借りて開業し診療をしていたので、患者さんの待合室と私たち家族の居間が狭ひとつ隔てて隣合わせていた。そんなわけで知人が受診の待ち時間に「知子ちゃんの声がするから」と、度々



襖を開けて入ってこられたりしたものだ。その反対に待合室で知っている人の声が出て、誰にも会いたくない日など襖を開けられないように、ひたすら声も出さず静かにしていたことが何度もあった。

診察室も四方が襖やガラス戸で仕切っており、何処からでもガラガラ開き、裸になって診察を受ける患者さんは、さぞ落ち着かなかったことだろう。

医療器具といえば聴診器と胸部レントゲンの器械しかないと、患者さんはよく嫌とも言わずに来てくれたと今更ながら思う。

私たち家族が居間で話していることも、たのしいことばかりではなかっただろう。ときには、誰かのことを厳しく批判していたこともあったのではないだろうか。木造住宅は音が何処までも聞こえるので、診察室で家族の会話がみんな耳に入っていた父は、いったいどういう顔で患者さんを診ていたのかと考えてしまう。

きつと、ときには患者さんと一緒に苦笑いしていたこともあったかも知からない。本業の診察より政治的な仕事のほうが好きで、時間を作っては外に出かけていた父のことだから、本業の医療のほうは家族がごはんを食べられればいいぐらいにしか思っていない、病院を建てて大々的にやるといふ気持ちはなかったような気がする。

父のこういってた住宅診療は、一九四八年から七二年まで続いて、兄が同じ敷地内に病院を建て、診療は父から兄にバトンタッチされた。

ここまで綴ってきたら、「おまえも、むかしのことを思い出し、そして語る年齢になったのか」と、父の声が何処からか聞こえるような気がして、いるはずのない父の姿を追って思わず周囲を見回していた。

悪夢の遺産 毒ガス戦の果てに
ヒロシマ〜台湾〜中国尾崎折美子著
学陽書房

『悪夢の遺産』という本をご存じでしょうか？ 広島のRCC中国放送のディレクター、尾崎折美子さん（1966ページ「めじゃーなりすとのおめ」にご執筆）が書かれた本です。

内容は、日本の毒ガス戦の一連の歴史を、台湾〜大久野島〜曽根製造所〜中国と、徹底的に、かつきめ細やかに取材し、いくつかのドキュメント番組を手掛けた彼女が、その時の取材の様子をまとめたものです。〈星砂の会〉のメンバーや、有志の面々で彼女を訪ねました。

毒ガス弾は戦争廃棄物（尾崎さんの造語で、神奈川大の常石教授により『知恵蔵』で紹介されています）であると言っ彼女は、

取材の中でその廃棄物にまだまだに苦しめられている多くの人びとのことを、とても優しく、そして鋭い眼で見つめ描写しています。話を聞かせていただいた時も、台湾の「霧社事件」関係者の取材や交流の難しさ、大久野島での毒ガス被害者の抱えている問題や、曽根で働いていた女性たちとのエピソードを熱く語ってくれました。

戦争を知らない世代が次の世代や時代に向けて、戦争を伝える難しさや大切さについてのお話に、知らないのはいけませんが、知ってからは、経験された人びとの思いをふまえてより広い視野で伝えていかねばならないと感じました。戦争は決して過去のものではなく、五十四年たった今でも苦しんでいる人びとがいることや、廃棄物として残されている物があることを調査し伝えることの大切さ……。特に彼女は広島におられるので、より一層「広島からのメッセージ」とし

ての意義を感じておられ、これからもそのメッセージがきちんと伝えられる世の中であって欲しいとおっしゃいました。あつという間の二時間半でしたが話はずみず、核兵器の問題にまで話が発展し、もつともつと話したいと感じました。

その次の日、小倉にある曽根製造所を訪ねました。戦争中、大久野島で製造されていた毒ガスを充填していた所で、戦後すぐに製造所は廃止され、今は自衛隊の射撃練習場になっているのも、何か皮肉なものです。大忙しの旅でしたが、まだまだ日本のいたる所に戦争の傷跡や廃棄物があり、心に体に深い傷を持った人びとがいることを忘れずによくと帰途につきました。（下）

◆『悪夢の遺産』は〈星砂の会〉でも取り扱っています。お申し込みは〒553-10003 大阪市福島区福島7-1-7 JR西労内〈星砂の会〉西村寿美子へ（06・6458・2311）。

（B6判 二三〇ページ 一七〇〇円）

幻の塔 ハウスキーパー熊沢光子の場合

山下智恵子著

BOCC出版部

一九三五（昭和十）年三月二十五日、

わずか二十四歳で市ヶ谷刑務所で縊死した熊沢光子。彼女は長谷川テルと同年であり、愛知県立第一高等女学校での親友・長戸恭は、テルとともに奈良女高師を追われたその人であったという。

光子は共産党入党し、大泉兼造という幹部のハウスキーパー（妻と偽装し、身の回りの世話をする）をしていて逮捕された。大泉は実は特高警察のスパイだったのだ。ハウスキーパーが女性をおとしめる制度であったこと、信じていた大泉の裏切り……。知性と志を持っていたはずの光子は、自分の言葉で語る機会もなく、獄中で自らの命を断った。それはテルの生涯に比べてあまりにも痛ましい。〈あこら〉会員である山下智恵子さんが、光子の足跡を丹念に追った労作であ

る。長谷川テルとともに、「もう一人のテル」もぜひ知ってほしい。（れ）

（B6判 二四〇ページ 一九〇〇円）

われわれは戦前の翼賛弁護士の轍を踏まない！

土屋公猷他十名 共同発行

表紙に「弁護士も街頭へ あす報国会結成大会」という、昭和十九年十二月十六日付東京朝日新聞の記事。二度と「翼賛弁護士」になるまい……との決意を込めて、戦後保障問題などでも活躍されている土屋公猷氏ら十名の弁護士が共同発行したのが、この小冊子である。

実は日弁連は、新ガイドライン法案について、ずっと態度があいまいだった。理由は「会内のコンセンサスができていない。強制加入団体であるから声明を一本化するの是不適切」ということだが、土屋氏はその状況に危機感を持ち、九人の弁護士と臨時総会を請求。七月九日のその会の記録が冊子の軸になっている。

基調講演の松井康浩氏は、戦前の日本弁護士協会が治安維持法や国家総動員法に反対しながら、言論統制に押しつぶされた過程を詳細に報告。金城睦氏の「沖繩は平和運動の先頭に立つ」、鈴木達夫氏の「国旗・国家」法の違憲性」など、力のこもった提起も掲載され、参考になる。

二部の森川金寿氏の論文「周辺事態法（案）と国家総動員法」は、改めて戦前と今の時代との相似を示した貴重な問題提起だが、何とこの原稿が日弁連機関誌『自由と正義』に「原稿量が不適切」として掲載を見送られたそうだ。理由はどうあれ、日弁連は狭量だと思ふ。

「弁護士は国民の人権を守る責務を負っている」という土屋氏の言葉が、冊子をつらぬいている。弁護士だけでなく、私たちにも、政府にも、人権を守る責務があることを自覚したい。（あ）

（B5判 六〇ページ 一〇〇〇円）

◆書店にはないので、高山法律事務所（03・5275・1180）にお申し込みを。

「どうなってるの？日本」

◆セクハラに取り組んでいる友人から、こんなメッセージが届き、衝撃を受け、落ち込んでいます。転送しますので、読んで下さい。

*

長崎県内の長崎県町村議会議長会主催の研修会で、中川八洋・筑波大教授は「衰退する日本—国家再生の道を探る」と題して講演、女性蔑視の発言と、国家主義的な発言が合体したとんでもない内容に、〈婦人民主クラブ〉の長崎の会員が抗議文を出しました。全国の女性たちが抗議に連なりました。

〈抗議文〉

長崎県町村議会議長会会長 伊藤政彦様
8月25日、諫早市内で行われた長崎町村議会議長会主催の研修会（対象は県内の町村議会議長・副議長・常任委員ら）において、中川八洋・筑波大教授は「衰

退する日本—国家再生の道を探る」と

題して講演の中で、国立大学の教授の言とは思えないような、不見識極まりない暴言を繰り返していたことが、地元マスコミなどの報道で明らかになりました。

8月28日の長崎新聞の報道によれば、「長崎市長が作った長崎アピール（平和宣言）は正気とは思えない」「日の丸・君が代（の法制化）に反対した者は非国民。共産党の議員に税金で金を払う必要はない」「女は四十（歳）過ぎたら肉のかたまり」「日本は戦争をしないからため。戦争をしない民族は退廃する」との趣旨の発言をしています。

名指して攻撃された共産党の県委員会が、8月27日に出した「講演内容への抗議と謝罪を求める申し入れ書」を見れば、もう少し詳しい発言内容がわかりますが、「少子化で日本は滅びる。男は二号・三号に子どもを産ませたらよい。それに

こそ助成すべきだ」「男女は平等でない。三十過ぎの女性に金を使う必要はない」

「セクハラ裁判をしているのはみんな共産党だ。社民党の福島議員は日本共産党から派遣されている。夫婦別姓も共産党だから家庭崩壊する」「米国の統社会はずばらしい」とまで述べています。

まさに、虚言・妄言、反共・戦争肯定・女性蔑視のオンパレードです。このような内容の講演が、公金を使って「選良」と呼ばれる方々に対して行われたことに對し、私たちは大きな衝撃と憤りを覚えます。主催者の責任が厳しく問われるのは当然のことです。

長崎市の伊藤市長と同市議会議長は「発言が事実とすれば、被爆都市として平和を願う長崎市民の心を踏みにじるもので強い憤りを感じる」などとして、中川氏に発言の真意を糾す連名の文書を送っています。地元の市民団体や女性団

体も、主催者に対して厳しく抗議していません。一般市民の反発も大きく、地元新聞には中川氏の講演内容に対する抗議の投書が相次いでいます。中川発言は、まさに日本国憲法の理念「主権在民・平和主義・男女平等」への攻撃であり、女性たち全体を差別蔑視ものであり、中川氏の講演内容とこのような事態をまねいた主催者・貴君に強く抗議するとともに、以下の点を要求いたします。

1、講演テープを起こして正確な講演記録を作り、公表すること。

2、記者会見などを通して主催者の自己責任を公にし、中川氏の罵詈雑言により有形・無形の被害を被った人々に、誠意を持つて謝罪すること。

(賛同の宛先は akashi@jca.apc.org)

*

今現在、こんな日本人が存在するのさえビックリですが、その人物が国立大学の教授で、次代を担う学生を育てるのかと思うと、お先真つ暗、希望が持てない

哀しみて身体がふるえました。

今、日本はなにかが変です。

何のために、一連の法案を通したのでしょうか？ この先には、何が待ち受けているのですか？ 五十余年の平和といわれた陰に、怖ろしい魔物が育っていたということでしょうか？

今、日本が戦争に荷担するような事態に向かおうとしたら（いえ、もうしてるのかもしれない）、それを阻止する力が、私にあるのか？ あるとしたら、それはどういう方法なのか？

私が嘗て、親たちに投げつけた「どうして、戦争はダメって言わなかったの？」という言葉が、とても傲慢な響きをもって、自分に突き刺さってきます。

(丸亀市 岡本恵子)

〔役に立った「情報公開」号〕

◆なるほど！ これなら私にもできそう。具体例が一つひとつ明確に示されていて、勇気がわきました。こういう実践例も、これからどんどん載せてください。

(埼玉原 大沢敏子)

◆251号（あごら横浜）の活動は「すごい」と感心ばかりです。

(富山市 登石知子)

〔JR秋田駅前にアゴラ〕

◆と言っても、（あごら）の店があるわけではありません。駅前広場アゴラ。駅前の小さな空き地のネーミング。古代ギリシャのAGORAのように、そこでソクラテスやデモス（民衆）が議論するわけでもありません。でも、東北にアゴラなんて、何だかうれしい。そこから自由な討論が生まれるといいですね。

(東京 斎藤千代)

〔日本の侵略と韓国の抵抗のうた〕

◆ミュージシャンの高木透さんが、日本の侵略に抵抗して韓国・朝鮮の民衆が歌っていた歌を集め、CDボックス『鳥よ鳥よ、白い鳥よ』（たかの書房刊 四千円）を出版しました。この出版を記念して、東京でコンサートを開催します。

10月8日（金）6時半〜カンダパンセ（J

R水道橋駅西口徒歩7分)

料金 三千五百円(自由席)

予約・お問い合わせ 東京労音

(03・3204・9933)

〔編集後記〕

◆そよ風にのって進行する戦争への地ならし。共に憂う(あごらめいと)に、かつての日、ひるむことなく反戦の警鐘を鳴らした女性と、その遺児の声をおとどけでさる僥倖に感謝。(伊藤ルイさんの映画「ルイズその旅立ち」を見た日に(素)

◆編集の素人の私が、ハーグ会議報告の編集も引き受け、この『あごらめいと』と二冊が同時進行した。長谷川テル、暁子母娘のことを、一人でも多くの人たちに知ってもらいたいという願いを実現させてくださったことに感謝。平和運動で知り合った人たちに書いていただけたことは大変ラッキーでした。一冊でも多く売ります。(和)

◆編集の醍醐味は何と言っても、活字を媒介にして、思わぬ出会いができること

である。今回はまさにそれ。戦前にこんな日本人がいたのかと、深く感動させられた。二つの祖国を持つ暁子さんとは、世代もそうは離れていない。歴史の渦の中に私も酔ってしまいそうだ。(真)

◆この号は自己の魂が意識の外でいかに影響を受けているか、しみじみ思いを馳せました。私の母は平凡なひとで、何を継承しているのか判然としませんが、それなりに尊敬し、母の子どもで良かったと常々思っています。「母」とは偉大なる生き物、という思いをいつそう強くしました。(オ二)

◆長谷川テルさんの本は何冊か出ていますが、暁子さんのお話や文章が本になるのは、おそらく初めてです。暁子さんに喜んでいただけるでしょうか……。 (あ)

◆ほぼ同時代人でありながら、高群逸枝と長谷川テルは、どうして対照的な発想をしたのだろうか。

テルの発想の根元には(希望者)によって提案された国際語「エスペラント」があ

る。民族や国境を超えたこの言語は、国や民族の紛争を解消する手がかりになった。今というグローバルな情報をテルは得ていたのだ。歴史に「もしも」はないが、テルがもし長生きしていたら、世界女性会議でもさぞ活躍していたらうと惜しまれる。

一九七五年、第一回世界女性会議(メキシコ会議)で、「第三世界の言語を基に、露・英・仏語に根ざすエスペラントよりさらに進んだ世界共通語をつくらう」という提案が出た。以来、毎回の世界女性会議で(あごら)はそれを提案してきたが、「新エスペラント」は、未だに実現できない。

インターネット時代の今、英語が世界共通語になるうとしていますが、問題視する人も多い。コンピュータなどで、どの母国語からも等距離でアクセスできる「平和希望者」の世界語を生み出せないかと、(紛争の二十世紀)が終わらうとする今、しみじみ思う。(千)

〈あじろ〉は、人と人が出会うつひろば——

思い悩んだとき、もつと豊かに生きたいとき、流れを変えたいとき……。心おきなく話し合える仲間がいる……。そんなひろばが、北海道から沖縄まで、いつのまにか広がりました。

雑誌「あじろ」を軸に、よりよい自分と社会を目指す、ゆるやかな連帯。「病床からでも参加できる運動」が、モットーです。

会費は月刊「あじろ」の誌代込みで月額七百円。一年分前払いが原則ですが、ご相談に応じます。入会金は一千元。ハガキかFAX、電話を頂ければ、申し込みカードをお送りします。

〈BOOK〉の登録も、ズイン……

一九八〇年に生まれた〈BOOKバンク・オブ・クリエイティビティ〉は、〈創造力の銀行〉。あなたの創造力や特技、希望の報酬を、連絡ください。各国語翻訳・通訳・企画・調査・取材・編集・校正等の専門職のほか、どんな〈創造力〉でも歓迎！ただし、半年以上〈あじろ〉会員の方に限ります。

先絡連

どちぢもTEL160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4 中公ビル
TEL03-3354-3941 FAX03-3354-9014
Eメール XLV05467@niftyserve.ne.jp

あごら 253号 闇を照らす閃光——長谷川テルと娘・暁子

●発行1999年9月10日

●編集 あごら大阪・あごら京都

●発行所 あごらMINI編集部 〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

●TEL 03-3354-3941 ●FAX 03-3354-9014 ●E-mail XLV05467@niftyserve.ne.jp.

●定価 本体1143円+税 ●振替 00100-0-5264

